

右通承得此段申上候、已上、

丑十二月六日

小倉滞在
唐物縮横目
土岐新兵衛

生産方掛

御裁許掛衆

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第七二四号

文書ト同文ナリ）

文書原寸 縦一六・五糎 横二七〇糎

一三八 高江郷士青崎市郎左衛門ヨリ藩庁ヘノ

建白

物価騰貴ニ付救済方策

（包紙ウツ書）
上

封
「」

乍恐奉上書候

当時日本六拾余州一統諸色高料之段承及申候得共、御領国之儀は分而諸色高料ニ御座候、右之訳合之根本は、当時市中金相場高直之処よりして、他国より格外高料

之訳ニ御座候、当分市中金相場壹兩ニ付拾四貫五百文より凡拾五貫文迄之相場ニ御座候、右ニ付諸色高直ニ御座候、其上当分小銭壹文ヲ六文之通用御免被仰付候処、右ニ準シ猶亦高料ニ罷成申候、至当分未タ日々益高料ニ罷成申儀ニ御座候、尤其訳合は、壹兩ニ付拾四貫五百文より拾五貫文位之金子を他国江持出、六貫四百文より七貫四百文位之相場を以品物を買入、御国江持下申候得は、丁と倍ニ相当申候訳合ニ御座候、御国之金貳兩ヲ他国ニ而壹兩ニ仕申訳ニ御座候、何品ニ不限諸色高料ニ罷成申候、右銭一条ニ付而ハ無御抛御次第は、奸悪之商人共他国江金銭を持出申候処より、無御抛右之通小銭六文通用御免被仰付候儀ト承及申候得共、右様ニ付キ今更金相場被召下儀不被為叶候次第ニ奉存候、右ニ付諸色他国同様ニ相準申候様御座候ハ、万民も格別歎キ不申候得共、今通被召置申儀ニ御座候ハ、御領国上下之民一同苦ミ申儀ニ奉存候、尤高禄或は大商人之分は格別渡世も宜敷御座候得共、中以

下小身之諸士并日々生業仕候者共、甚難渋ニ相迫居申
 訳ニ御座候、畢竟當時御上様より諸品代一条、高下之
 御沙汰等先年通不被仰渡、御寛有被遊候ハ、一入難
 有可奉存之処、却而御沙汰不被為在を幸ニ仕、勝手次
 第二売捌方仕、諸人ヲ迷惑為仕申候儀ニ御座候、勿論
 御領内商人共、身之分限ヲ不弁、自分勝手而已相働申
 者ニ御座候、乍恐今通被召置候而は、益諸人一同迷惑
 仕訳ニ御座候、尤御領国之米引足不申訳合は、御存知
 被為在致ハ不奉存上候得共、脱体於御国、酒・焼酎を
 過分ニ米ヲ潰シ申訳ニ御座候、其訳は他国は大方上ミ
 酒ヲ相用申物ニ御座候、上酒之儀は御存知も被為在候
 通、摂州池田・伊丹ニ而製法仕、日本六拾余州大方行
 渡居申物ニ御座候、尤広キ江戸・京・大坂・長崎迄於
 其国々、酒造人申儀は曾而無御座候、御領国は御領国
 之米ヲ以酒・焼酎造人申候得は、おのつから米は引足
 不申訳ニ御座候、尤於国々焼酎在之國は何方も承不申
 候、於御当国是非焼酎無之候而不相済訳合も御座候ハ

、当分在御座焼酎屋共江真幸酒売方御免被仰付度、
 左様御座候而、右之焼酎屋は是非ノ御差留被仰付度
 奉存候、尤先々月焼酎造方御免被仰付候故、則より米
 高直ニ罷成、甚諸人ハ難渋仕候訳合ニ御座候、右焼酎
 ニ限り不給候而ハ、餓死ニも相及筋之儀も御座候ハ、
 致方も無御座次第ニ存候得共、吉凶事ニ付酒さへ有之
 候ハ、随分相済可申儀と奉存候、尤右之米潰シ申事
 は、小店之酒屋よりも多分焼酎屋ニ相潰申物ニ御座候
 付而は、是非ノ焼酎屋迄は御禁止被仰付度奉存候、尤
 諸人は扱置、御上様ニも當時御配慮被為在候央ニ、色
 ヲト余計之儀ニ迄御氣を被為惱候而は、上御老人様よ
 り外當時御取替も不被為在御尊体、万一も御心配被為
 嵩候処より、重キ御煩共被為出候而は、当世之物騒之
 上、御領国暗ニ罷成申訳ニ可有御座重疊奉恐入申候、ケ
 様申上候さへも、御心痛奉掛上訳合と益奉恐入申儀ニ
 奉存上候得共、看々御国諸民一同程難儀仕申を打捨置
 申儀も又難忍奉存上候処より、下郎之身も不願、重御

役御兩所江奉入内覽置候得共、于今何の被仰出候趣も不奉承知候、右ニ付而ハ可成丈は賤敷身分として、御上様江奉上書儀ニ而は無御座候得共、所詮難黙止候処より、乍恐不及是非存寄之次第申上候、其訳合は今通被召置候而ハ、既ニ先々月比より段々於市中追剝ニ似寄候強盜見候様之事多々有之、就中先月廿九日夜も、面体を隠し掛取ニ行キ候者、所持之錢財布ヲ押取仕逃去候由、其外ニも於上・下町四五人程被奪取候世上風聞承得申候、右体之儀段々相重ミ申候上は、自然と後々は大事ニ罷成申は案中と奉存候、左様御座候得は、前文ニも申上候通、則御上様御難題ニ被為及候儀と奉察上候、右始末乍存知不申上罷在候も却而不忠之儀と奉存候故、猶存寄之訳、左ニ奉申上候、右様申上候而も、諸色俄ニ被召下候趣法は、随分御座候得共、左様ニ御座候而は、小商人共迷惑仕訳合ニ御座候、急々押々被相改候而は、無理ニ相当候場所も可有御座、当分日々高料ニ罷成候諸色御座候故、此涯日々高直不相成

様之御趣法被為在度、先當時之処を以売買仕候様被仰付候ハ、後々は自然と下落仕候様可罷成、当八月頃より御兩所江上書奉入内覽置候得共、末其儀御取揚無御座候故、最早時節も相後レ申候得共、来寅三月比より七月迄之間ニは、中々倍々諸色高料ニ相成申儀は差見得居申候間、巷日も早何卒左条之趣意通、御手被為付被下候ハ、諸人一同難有再生仕御高恩と乍恐奉存上候、尤諸色ケ様ニ日々高料ニ相成申理筋は、去ルニ三月比より私見当^{ケントウ}之次第御座候処、丁と見当通右式無相違成立申訳ニ御座候、ケ様申上候次第、其御打捨御取揚不被為在候ハ、来年三月比より七月迄ニは如何程諸色引揚申程合も難計奉存候、仍而私式重覺恐多も不顧、昼夜存詰候始末、左ニ奉申上候、

御掛り之次第

一 重御役様御老人御掛り

一 御側御役様御老人

一 御徒目付様御老人

但御人柄極御取しらべ、御無欲之御方、尤御毎動有之候様、

一 諸色目付役 老入

但書同断

一 上町町横目 式人

但書同断

一 下町町横目 式人

但書同断

一 西田町町横目 老入

但書同断

一 町々之月行司 老入ツ、

一 下広小路江御直成会所老ケ所

但表之間八帖・次之間八帖、落子間ニして五拾枚敷

位

鉄
○クハン

鉄
○クハン

右之図通八本御造調、式本は下町御高札脇江、式本は上町御高札脇江、式本は下ノ浜・石燈爐下ノ角江、式本は上行屋之橋江

右之通被召立度、尤御晒木長サ卷間位、四寸角廻り位、御晒木式本宛之訳合は、余之義ニ無御座、御趣意相背申候売買人有御座節、売人も買人も右之通両晒被仰付度、左様無御座候而ハ、御趣意行レ不申訳合ニ御座候処より、式本ツ、被召立度奉存候、

一 銀会所 老ケ所

但下広小路江

右之取払役 町横目式人

外ニ手伝六人位

右之通御取仕立被仰付度、左様御座候ハ、誰人ニ而も罷出、兩替願出候者江最安何時ニ不相限、任好半朱・

琉球小錢之間而替被成下、不自由無御座候ハ、只今則銀会所江半朱・琉球小錢相集申儀相違無御座候、若相集申儀も御座候ハ、半朱・琉球小錢直段御下ケ相成筈之風聞為仕申候ハ、俄ニ相集申儀は相違無御座候、

一第十二 近在之野菜売之次第
一第十三 骨糟会所之次第
合拾三ヶ条
右ヶ条御取締又は旅人御取締ニも可相成儀付而は、御番所左之通被差立度奉存候、

- 一第一 米之次第
- 一第二 金錢并札之次第
- 一第三 薪之次第
- 一第四 塩之次第
- 一第五 味噌之次第
- 一第六 諸色之次第
- 一第七 大工・日雇取賃錢之次第
- 一第八 駄賃錢之次第
- 一第九 船運賃之次第
- 一第十 魚類并谷山女魚売之次第
- 一第十一 桜島女生り物売之次第
- 一 一ヶヶ所 水上坂之下
- 一 一ヶヶ所 谷山街道郡元辺
- 一 一ヶヶ所 郡山街道花尾口
- 一 一ヶヶ所 上後迫口
- 一 一ヶヶ所 祇園之洲
- 一 一ヶヶ所 たんとと御番所有之候得共、勤場人御手輕奉存候
- 一 一ヶヶ所 上弁天鼻先八町雁木
- 一 一ヶヶ所 新築地之鼻先出向之波戸
- 一 一ヶヶ所 新橋下出向之波戸
- 一 一ヶヶ所 下弁天町出向之波戸
- 一 一ヶヶ所 下石燈爐下出向之波戸

一 沓ヶ所 屋久島雁木波戸

一 沓ヶ所 天保山砂揚場辺

右之通被召立候様有御座度奉存候、尤勤場人之義は、御城下窮士之面々兩人宛、下役トして上・下町町横目沓人ツ、被仰付度、左様御座候而、諸年限一詰沓ケケ年之間は不被仰付候而は、行ひ方之次第、本付方相調不申訳合ニ御座候、且町横目之儀は、月代ニ而も半月代ニ而も、又は拾日交代ニ而も可宜奉存候、左候而、御法度之御趣意、板面ニ御書記、御番所毎ニ被掛置候様被仰付度奉存候、右御番所御造立方之儀も御作事方御作調ニ而は、俄之事ニ而延引仕儀も可有御座奉存候ニ付、御手元御計ヲ以、一刻也共早々御作調被為在候様奉存候、右御作調料之義は、当分流行仕候札ヲ以、御作調相成候ハ、過分之御入価ニは相及ひ不申候、尤札之儀は、是迄之通之大札ニ而は諸人氣請も不宜候ニ付、小札数多御作調、右を以御番所御作調有御座度、尤札紙之儀も御国製にてハ宜無御座候、是非下り紙ニ而札

御調、札面之儀も恐多奉存候得共、御上様ニ正金銀御預ケ為申上筋を以預リト御書記有御座度奉存候、浜辺之御番所之儀ニ付、上方通之大船沓艘ニ付運上銀として沓両ツ、小廻船より小船迄は運上銀式分ツ、釣船并遊参船等之儀は運上ニ及ひ不申候、其外何船ニ不銀、式分ツ、運上銀被仰付度奉存候、尤沓両は七拾文、式分は拾四文ニ御座候、右代錢ヲ御番人御扶持米トして被成下度、左様御座候ハ、格別御出目ニ相成不申候、右取始末之儀は町横目より差引仕、御蔵入被仰付度奉存候、尤陸地之御番所之儀は、商人共往来之毎ニ式分ツ、運上銀被仰付度奉存候、

一 第一米之儀は前文ニも奉申上候通、御国之金錢之相場高直改御領国之儀は格外高料ニ御座候訳合は、当分之米相場納米沓升ニ付八百式拾四文位より間ニは七百七拾式文位次第不同ニ御座候故、他国之直成凡沓升ニ付三百文位より三百四五拾文、太体国々之直段之由承申候、右申上候通、則御国之金相場正金沓兩ニ付、拾四

貫五百文又は拾五貫文、他国之金相場は凡壹兩ニ付六貫四五百文より七貫貳百文位、右之匁を以丁と引合申候処、貳兩ニ金丁と壹兩ニ罷成申候、左様御座候得は、何品ニ不限金相場之直段ニ而他国より倍之直段ニ御座候、右之直段俄ニ引下ケ方被仰渡候得ハ、何方江欵ヒゾミ出来申候、左候得は、弥以諸人難渋ニ罷成申訳御座候故、先当分通之直成を以、御規定被為在度、左様無御座候而は日々諸色未高料ニ相成申訳ニ御座候、左様御座候故、乍恐私申上候通被仰付被下度奉存候、全体米之儀は米御蔵第一之大本ニ御座候、大方米御蔵之直成を以、米中買人共相場相立申訳ニ御座候、尤先々月時分焼酎屋御免無之内は、少々は米下落之模様ニも御座候処、焼酎煎方御免相成候故、猶又米も無多事罷成、夫丈直段も引揚申候事ニ御座候、尤米御蔵之日用夫凡六七拾人罷成申候、右之内拾五六人米之手形商売仕候、尤出物御蔵へも日用夫凡四五拾人、毎日罷出申候、右之内ニも五六人米手形商売仕者御座候、御春屋蔵・御

台所蔵ニも貳三人宛右之商売仕候者罷居申候、右者共ヲ御直成会所江被召呼、丁と御趣意通被仰付、御趣意之儀は余之儀ニ無之、此節諸色直成御規定被為在候儀ニ付而は、兼而其方共米商売有之者之由ニ候間、御趣意之旨深奉波受、聊取違等無之様可相守候、右ニ付、其方共より奉承知趣を以、五人組合証文差上置候様被仰渡文言左之通、

五人組合証文之事

一乍恐此節難有諸色直段御定被仰渡趣奉承知候、若私共五人組合之内より御趣意相背申候者御座候節は、外四人ヲ以御高札脇御晒木江私共より引列晒方仕可申候、到其節難渋ケ間敷儀一切申上間敷候、仍而五人組合証文奉差上置候、以上、
但飯料米如何程差支候故、当飯米之内ニ而も分ケ具候得と欵、又は所望と欵、何様ニ難渋之段申候而も、御定直成より外ニハ一切売渡申間敷候、若御趣意相背内分ニ而売渡候者於有御座は、跡以御役所様江御

聞通御座候節、其段御達御座候へ、私共本人同様
御晒被仰付度奉存候、

金藏御用

米藏御用

何かし

月日

||
||
||
||

御直成会所
御役々様

右之通被仰付度奉存候、

(付紙)
一当分

御蔵米 三斗三升六合入

売俵ニ付代錢貳拾八貫文ニ御座候、

内卷升ニ付代錢八百五拾文位ニ御座候、

一 下町・上町中買人共之儀も前文同様之振合ニ被仰付度

奉存候、右銘々之儀は、町々之月行司兼而何商売と申儀は存知居申候、右月行司より銘々之者共御直成会所江御呼出ニ相成、前文之趣意御徒目付様より御叮寧ニ御達ニ相成、組合証文之義も、一々無残御取置有御座度奉存候、

一 第二金錢相場之次第、右相場之儀も急々御引下ヶ相成候而は、是亦諸人は勿論御上様ニも御不益ニ被為成候訳合と奉存候、依之前文ニも申上候通、銀札過分ニ御作調有御座度奉存候、尤当分流行仕候札ニ而は、諸人氣請不宜候ニ付、此涯急々御取付ニ相成事ニ御座候へ、上方表より御買下ニ相成居候紙有御座哉ニ承知仕申候ニ付、右を以御造調被下候様奉存候、第一どぶぞや銀札ニ御拵被下度奉存候、銀札も余之義ニ而は無御座候、七掛之金相場ニ而御座候、七掛と申は、仮令ハ拾兩なれば七百文、卷兩なれば七拾文、卷分なれば七文、右之通之相場被召立被下度、左様ニ御座候へ、右七掛之義ハ銀之相場ニ而御座候、此相場御領内追々

相弘り通用仕候ハ、後々は肥後表も同銀目ニ而御座候ニ付、自然と彼表へも通用仕訳ニ成立申候、右肥後表江不通用之節は、肥後熊本町江薩摩銀会所セケ所御取仕立御座候ハ、則肥後表通行仕候義相違無御座候、肥後表は扱置、御領国第一之訳合ニ御座候、就而下広小路御銀会所セケ所、則より御取仕立有御座度奉存候、前文ニも申上候通、拾兩以下之銀札過分ニ御造調有御座度奉存候、尤壹分は七文ニ而御座候ニ付、七文は式(馬)ツ刻之小札三文五リニ御座候、右三文五リ之札ヲ大過分ニ御造調、幅等之儀も至極小振りニ而宜敷御座候、左様御座候而、当流行仕候半朱琉球通宝并小錢札ヲ以兩替被仰付度、左様御座候得は、諸人一統銀会所御作調於有御座候は、氣請宜訳合ニ御座候間、則銀会所江通用半朱琉球銅錢忽相集申儀は相違無御座候、左様御座候而、右半朱琉球之間は錢方江御遣シ、天保錢ニ鑄直シ被仰付度、左様御座候而、小錢之儀は御物様何方江も此涯御困置被成度奉存候、尤当分ニ至り、小錢未タ

他国江拔出申候、此涯是非御上様江御取揚置被成候方宜敷御座候、尤鹿兒島は勿論之事御座候得共、他領境辺ニハ余程數多之錢技出掛罷在哉ニ承得申候、直様御手被為付候場所は、第一都城・志布志・川内向田辺・阿久根・出水、右之場所御手敵敷御取締之上、御取揚相成度儀と奉存候、右諸所錢迎も銘々一所ニ計相円居申訳ニ而も無御座、併間ニハ過分ニ相集居場所も都城始可有御座奉存候間、何分ニも壹日も早右諸所庄屋・郡見廻所ニおひて、銀札ヲ以小錢引替、或は半朱琉球之間御引替被仰付度奉存候、何れの筋御手早被為付度儀は、右之小錢之事ニ御座候、右ニ付而は、小札御造部(マ)調方は非年内中相調候様、昼夜御急キ被仰付度奉存候、左候而、此涯三文五部之小札專通用御免被仰渡置、私申上置候通、諸所御番所何方迎も御出来之上、右之小錢三文之通用御免被仰付度、左様御座候上、敵敷御触流被遊、若壹文ニ而も他領江拔出シ候者は、屹と首ヲ御刎、御当地人群集之場所江三十日位も晒方被仰付度、

尤万民御救筋之為メニ御座候得は、纒五人或八人之命ニハ難被易御事と乍恐奉存上候、尤拔米錢御取締之向は、乍恐下郎之私申上候通被仰付度奉存候、右御取締之儀ハ浜馬引共并上荷船頭共江御手厚御手被為付置、上荷船頭或は馬引之者共、手先ニ召仕御取締被召入候得は無相違御取締ニ相成申儀ニ御座候、右勤場之儀は昼夜之無差別相勤不申候而は御手薄罷成申訳と奉存候、夜ナノ大船ニ密ニ積入申哉ニ承及申候、間ニは多分蒸氣船出帆之節、御用物積入ニ相混、積入申哉ニも風聞仕申候、是非右等之船々出帆前ニハ、右御取締之人數無油断夜廻等分而堅固ニ仕候様被仰付度奉存候、何分早目ニ御手被為付度義は、他領近辺之郷々・浦々ヲ出帆之御明改、至極入念被仰付度奉存候、何分ニも湊口江御番所有御座場所も有之、多ハ無御座場所而已御座候故、至而拔米錢ハ勿論、旅人御取締等ニも別而無心元儀と奉存候、天保錢之義は、上・下町之上方通之商人共を御役所より被召呼、其方共凡何百兩程之仕込

ニ而上方通いたし候哉之段御聞届之上、凡何百兩程宛ト可申上候ニ付、右之員數高ニ応シ、老兩ニ付天保錢ヲ以九貫文之相場ニ而、兩替被仰付被下度、左様御座候得は、於上方右品々買入仕候上、御国元江持下り、売弘候而も他国之諸色之直段より格別高直ニハ無御座訳合ニ御座候、若矢張是迄通之振合ニ而高料ニ有之節は、右之者共於他国買入本帳御取揚、御覽ニ相成申候得は、直ニ相分り申筋ニ御座候、左様御座候得は、老割式割之利潤ニ而、随分御国元諸色も他国ニ準シ、左迄高直ニは相見得不申訳合ニ奉存候、何分ニも前条ニも申上候通、御国元にて式兩之金子ヲ他領ニ而老兩ニ仕成シ申筋ニ御座候故、於御国元は三増倍高料ニ相成申訳ニ御座候、尤兼而上方通仕候者共之儀は、町々月行司能存知罷在儀ニ御座候間、御糺被遊候得は、直ニ相分り申儀ニ御座候、

一第三之薪、右薪之儀も、御国ニ而は往古より山国ニ而往古は最安直成ニ而御座候処、夫故当分迄も右商売見

切ニ而商売仕候訳ニ御座候、右薪之儀は何方国も斤量掛ケニ而商売仕物ニ御座候、左候得共、御国之儀は矢張當時ニ到迄、見賦商売仕来申ニ付而は、段々甲乙ニ而次第不同ニ御座候ニ付、乍恐私式申上候通被仰付度奉存候、趣法左ニ申上候、

一 堅木 沓拵(縫カ)

但斤ニして 何拾貫文

但上中下直段右ニ相準シ

一 雑木 沓拵(縫カ)

但斤ニして 何拾貫文

但書同断

一 枯木

但直段同断

一 べら木

但書同断

右之通、御定直成看板札ニ御書記、薪中買人共居宅之

戸口之上ニ御掛置、尤直段之儀は、右中買人共より申出通御書記、右之品は山品ニ御座候間、山斤量ヲ以中買人共ハ買入置、諸人江売渡候節はかね斤ニ而御定リ之直成ニ而売出候様被仰渡度、左様御座候ハ、中買人共利潤之儀は山斤とかね斤之間ニ而、随分利潤は有御座訳合ニ御座候、尤当分通ニ而は、直段次第不同ニ御座候ニ付、右様御定被下候得は、拾人ニ而も式拾人ニ而も買入仕候而も、沓貫文がのハ沓貫文がの、拾貫文がのは拾貫文がの有之筋ニ御座候、頓と次第不同ハ無之訳合ニ御座候、就而ハ中買人をば此節御直成会所江御呼出ニ相成、諸色御直成御定相成候儀ニ付而は、是非此通行ひ召付候様御達之上、前文米同様之五人組合証文差上候様被仰渡度奉存候、尤中買人より口入無之薪売買ハ御差留相成候段御達有御座度奉存候、何人ニ不限是非中買人江申入、中買人より買入候様被仰渡度奉存候、

一 第四塩、右塩之儀は、御領國中引足不申段は兼而承及

申候、就而は右塩行ひ方ニ付、先度より度々中村・郡元辺之塩屋江罷越、段々承及申候処、當時は賃取之女共外商売方ニ而、塩焚之方江罷出候は無多事、夫故益塩出来高も相少キ訳合ニ御座候由、右ニ付乍恐私存寄左ニ奉申上候、上方通之船々より、塩ヲ以御運上被仰付度、仮令ハ式拾三反帆なれば式拾三石之上納被仰付度、帆前老反ニ付老石ツ、御運上塩トして被仰付度、御運上銀差引被仰付、残代錢も御座候ハ、船主江被仰付度、尤塩問屋上町江三軒、下町江五軒計被仰付度、左様御座候得は、塩問屋より銘々差引仕、御上納分ハ御上納仕、残錢御座候ハ、船主江致返錢候様被仰付候ハ、十分御国中之仕分ニは引足申丈ニ御座候、左様御座候ハ、自然と中村・荒田辺之塩も下落仕筋ニ御座候、塩売子ニ罷出候者共は、是迄塩道辺より罷出候者江被仰付度、是以御直成会所より手札相渡被置、売子何拾人と御定被置、余は一切売行之儀^{アルキ}不相成候様被仰渡、右之人数共江其段被仰付置候得ハ、外々之

者共、俄ニ売行之儀相成申物ニ無御座候、いづれ其道々之者ニ無御座候得は、其行ひ相届申物^{オコナ}ニ無御座候、是以前条同断問屋・売子より五人組合証文差上候様被仰渡度奉存候、

（付紙）
一去年は

塩老升ニ付代錢七拾式文ニ御座候、

当分

老升ニ付代錢三百文ニ御座候、

一第五、味噌・醬油之儀は、大豆根本ニ御座候ニ付、則是以御国ニ引足不申品ニ御座候付、存寄左ニ申上候、大豆之儀は肥後表過分ニ有之品ニ御座候ニ付、肥後表当分馬弘底之段承及申候、就而は此御方様より年々馬百疋ツ、御遣シニ相成申候而、右之大豆三万石丈御所望被為在候ハ、則彼表は御納得之事ニ御座候、右大豆三万石ニ付而は、過分之錢高ニ相及申候ニ付、馬百疋位ニ而は迎も及付不申候ニ付、跡補方之儀は御国製之新川墨、肥後表ニ而売弘メ、彼御方様江御相談被為

在候ハ、随分御納得可有御座、右墨ニ而引足不申節
ハ、日州辺之御手山之櫓木并楫木等御差送り御座候ハ
、随分相応申訳合ニ御座候、若右品々ニ而引足不申
候ハ、諸所方々ニ有之候鉄砂ヲ右之方江御遣シ罷成
候ハ、十分之事ニ奉存候、右之儀も、前文ニ奉申上候
通、則銀札を以御買入品々御買円メ御座候ハ、過分
之御利徳は相見得居申候、何ぞ正金銀御払出ニ不相成
候共相済申儀ニ奉存候、是非馬百疋丈不被差遣候而は、
彼御方逆も御相談相調申筋ニ而は無御座候、左候而、
右不足丈ハ随分余之品々ニ而補ひ相成候訳と奉存候、
〔付書〕 大豆 是迄は凡老升ニ付代錢式百六拾四文位ニ御座
候、
当分
老升ニ付、代錢八百七拾式文ニ而次第不同ニ御座
候、

ニ而は、迎も商人共承知不仕候者ニ御座候、乍恐私
り左ニ奉申上候、諸色之儀は、町々店毎ニおひて、何
店ニ不限、品物ニ直段ヲ書記、店先毎ニ差出候様有御
座度、左様御座候而、草履・草鞋・下駄之緒ニ到迄、
無残直段書記差出候様被仰渡奉存候、尤同職同志、
荒物店は荒物店同志、又ハ小間物店は其同志、惣而店
先ニ書出候様被仰渡奉存候、尤荒物之直段付無之品
は、屹と売渡候儀不相成候様被仰渡、又油屋・醬油
屋・酢屋・酒屋・焼酎屋之類は、其屋々毎之入口戸口
之上ニ、老盆ニ付いくらといふ事書記差出置候様有御
座度奉存候、尤当分油屋杯は、枧之四隅ニ鬚付ヲ塗付
ケ当分高料ニ売渡候上、右様之手数も御座候、焼酎屋
・酒屋ハ枧之底ニ木ヲはめ杯仕、誠ニ言語道断之致方
ニ御座候、是以右御取締被仰付度、いづれ之同職は同
職同志ニ無御座候而ハ其訳を存知不申候、物ヲ譬而申
上候ハ、蛇之道ハ蛇が知ルト申物ニ而、其同志ノ
之穿鑿不仕候而ハ、御上様より計如何程被仰渡候而も

毛頭行ひ付兼申訳合ニ御座候、左様御座候得は、天地和合仕訳合ニ御座候、右ニ付米同断之同職同志之五人組合証文差上候様被仰付度奉存候、尤諸色ニ付直段書仕、店先毎ニ差出置^{コト}訳合ニ付而へ、無筆之女童或は田舎者杯、至而文盲之者迄も、往々は何品何文ト申字迄も相分り、自分ニ仮名書迄も出来申は案中ニ奉存候、左様御座候へ、弥御城下、田舎迄も諸事弁別仕義ト存寄罷在申候、且下男・下女之類ヲ以、諸品買入トして差出候節、間ニハ直成ヲ相重メ、密々代錢横取仕候体之儀も有之、其主人ノノも余計之悪念迄も差起り疑惑仕候義も段々有之事御座候処、右様御趣法被仰渡候へ、諸色直組店先江相究居申事故、老文迎も押隠罷居儀不罷成、勿論主人ノノ之疑念も毛頭差発り不申訳合ニ御座候ト奉存候、

一 第七之大工并日雇賃錢之次第、右大工之儀は、当分是以賃錢高料ニ御座候、左之通申上候、賃錢之儀ハ米直成ヲ以被仰付度奉存候、

一 上大工 賃錢米式升代
 一 中大工 賃錢米老升八合代
 一 下大工 賃錢米老升六合代
 右之通被仰付度奉存候、尤米老升直成ヲ以、仮令ハ老升ニ付当分ハ八百文位仕申候、左候得は、上大工老日賃錢老貫六百文ニ相当申候、中・下右ニ準シ申事ニ御座候、尤右之儀も御城下中惣棟梁と申者老人被仰付度、左候而、右棟梁より諸大工共江手札相渡置、年々正月欵極月比欵、手札改仕候様被仰付被下度、其節銘々より右棟梁方江錢百文宛持參仕候様被仰付度、右代錢之儀ハ、余之儀ニハ無御座候、筆紙墨料ニ御座候、右筆墨之儀は、仮ハ御直成会所、今日は米之下落、今日は米直上り候訳合、時々問合越申候節、則より廻達ヲ以米直段諸大工へ為相知申雜費料ニ御座候、

(付書) 一 是迄

付木老把ニ付

代錢老文ツ、ニ御座候、

当分耆把ニ付

代錢拾貳文ツ、ニ御座候、

是迄

燈心耆把ニ付

代錢貳文ニ御座候、

右老行之通買入置申候得は、凡日數三拾日位有御座

物ニ御座候、

当分耆把ニ付

代錢貳拾四文ニ御座候、

是迄仙香耆把ニ付

代錢貳文ツ、ニ御座候、

当分耆把ニ付

代錢拾八文ニ御座候、

是迄皮紙耆束ニ付

代錢百三拾貳文位ニ御座候、

当分耆束ニ付

代錢五百文ニ御座候、

右日用之品々ニ而御座候処、ケ様ニ高直ニ罷成申候、

猶外ニも色々數多御座候得共、御高察被遊被下、能

々御勸考被遊被下度奉願上候、

一日用夫之儀は、下大工同様ニ耆升六合賃錢被仰付度、

右之儀も御作事方江罷出ル人足頭之内、定番と申者江

惣棟梁被仰付置被下度、是以大工同様之振合被仰付度

奉存候、左様御座候得は、諸人も一統米直段ニ而賃錢

相払申儀ニ付、少も難渋がり不申訳ニ御座候、

一諸細工人之儀も何細工人ニ不限、右様之振合被仰付度

奉存候、前ニも申上候通、何れ何之道シヤも蛇之道ヘトハ蛇と

存候訳合ニ御座候間、其職々之頭分より取締仕候様被

仰渡候方宜奉存候、右様御座候得は、無相違行ひ相付

申訳合ニ御座候、其訳合ハ錢百文ツ、出調仕候処より、

其支配頭能々氣相付罷在候故、嚴重ニ支配相届申訳ニ

御座候、

一第八之公駄賃錢、是以甚當時ニ付一統困窮仕訳合ニ御

座候、右ニ付奉申上候、馬引之内ニ馬差と申者罷在候、

右之者共江六拾間ヲ耆丁ニして綱ヲ六拾間引延し、仮
ハ上行屋橋口より豎馬場之頭迄何町ト相定、其外町端
々迄、右之通綱引延シ、又ハ下町石燈爐下角より下町
端々迄、右同断引延し、耆町ニ付當時之米相場ヲ算当
仕、耆町ニ付拾式文ツ、之直段御定被置度、左様候而、
馬々付出候場所より三丁より内は、四丁之賃錢相払候
様被仰付度、右之訳合ハ、仮ハ耆町付出申候而耆町之
賃錢相払候而ハ、馬引共面働ニ存、迷惑ニ存申訳故、
右通四丁賃錢相払候様御定有御座度奉存候、右之義も
銘々五人組入証文御役所江差出候様被仰付度、左様御
座候而、万一抜米錢ト見請申候節ハ、即御役所江訴出
候様、左候而、御取上ケ之上、右訴人江被下度奉存候、
証文之内ニ前文米同様之前書ニ而、但書之場江抜米錢
ト相心得申候節は、則御役所様江訴出可申上段、万一
一氣不相付候節は、抜米錢仕候本人同様ニ御取扱被仰付
度奉存候旨相認、差上置候様被仰付度奉存候、

一第九之船運賃、是以無十方高賃錢ニ而、夫故色々鹿兒

島江積廻候店先之品々高料ニ相当申候訳ニ御座候、就
而ハ右賃錢之義も、米相場ヲ以被仰付度奉存候、式人
乘なれば三人前之賃錢、老人ハ船賃合三人、老人に米
五升ツ、合耆斗五升、左候得は、耆升八百文ニして四貫
文ニ相当申候、米下落候得ハ、矢張夫ニ準シ申訳ニ御
座候、右之儀も上荷船頭之内、頭立候者より右差引仕
候様被仰付度奉存候、積入荷上之節、抜米錢ト差心得
候節は、即前条同断、田舎之義ハ浦役所へ訴出、御城
下は夫々御役所江訴出候様、万一一氣不差付候儀有之節
ハ馬引同様屹と被仰付度旨、証文差上候様被仰付度奉
存候、

一第十、御当地納屋之儀、是迄諸色方被為在候時より、
毎日相場書・直段書等諸色方江差上来候得共、其詮全
無御座候、行ひ付兼申儀ニ御座候、恐多奉存候得共、
是以私申上候通被仰付度奉存候、納屋之義ハ、六拾余
州之国々江納屋無之国ハ何方も無御座候、広キ江戸日
本橋さへも直段書仕、広キ江戸売行申訳合ニ御座候、

増而御当国御城下ヲ売行申ニ直段書等も無御座候、是以是非納屋頭と申者兩人被召立、右之者共銘々直段付木ニ書記、方々売行キ候様被仰付度奉存候、万一直段書等無之品売買仕候儀御座候節ハ、右五人組合証文通御晒木江被相晒候様之証文差上置候様被仰付置度奉存候、右通被仰付候ハ、無相違行ひ行届申義、相違無御座候、

一 谷山之女之魚売共、是以此已前は下ノ荒田・武橋迄之内売方仕来申候由候得共、到当分勝手次第世間売行申ニ付、前文通之行ひも付兼申訳合ニ御座候、尤郡元・中村辺之塩屋ノニ賃取トして日々罷出候者ニ御座候処、当分ニ罷成、世間勝手次第売行申候処より、右塩焚場江も罷出不申候、夫ニ付当分は塩も出来高相少ク御座候、右之義ハ御差留被仰付度奉存候、左様御座候得は、おのつから塩焚場江罷出様罷成申候、左候得は、夫丈過分塩も出来増申訳合ニ御座候故、おのつから塩も下落仕申候筋ニ御座候、

一 第十一、桜島女之生り物売、右之儀も是以世間ヲ勝手次第生り物売行申候、尤生り物之義ハ肥シ等も仕不申、自然と生候物ニ御座候得は、何ぞ諸品ニ相準シ高直ニ罷成訳全無御座候、右之儀ハ是非御差留被仰付度奉存候、尤生物中買人被仰付度奉存候、左様御座候而、上町江拾弐三人、下町江廿人計、右之通被仰付度奉存候、右之中買人共より銘々店先ニ売渡、店先江付木ニ書記店先江相渡候得は、是以直段則相分り申儀ニ御座候、沓割掛ニ而は、当分相調兼申儀ニ付、沓割五部位之処を以、店先江渡方有之様被仰付度奉存候、余之義ニ而も無御座候、御直成会所より御手難被為届訳合ニ御座候故、桜島女物売ハ是非御差留被遊度奉存候、

一 第十二、近在之野菜売、是以直段不相記候而ハ、売買仕兼候儀ニ御座候得は、今通勝手次第売行申候而は、諸人迷惑仕訳合ニ御座候、右之儀ハ御用八百屋ト申者式拾四軒御座候、右廿四軒之内より毎朝正六ツ時下駄小路ニ罷出、直段相場を相立、御上様御用分取分ヶ、

残り分ヲ諸方ニ売行キ、右之儀も付木ニ書記、仮へね
 き一ト前・菜一ト前代錢書記、是以中買人売行候様被
 仰付度奉存候、尤唐芋之義ハ古来より辨ヲ以舛^{ハカ}り申候
 ニ付、右之儀は中買人共より買入候上、斤ニ掛占卍斤
 いくらト直段御定通売行候様、是以米之直段ニ振合せ
 斤売仕候様被仰付度奉存候、左様御座候而、近在之百
 姓共老日農業仕、老日は御城下を売行キ、勝手次第ニ
 売渡候儀ニ御座候、是迄ハ老日売行候分は漸六七百文、
 間ニハ八百文位も売出来申候処、当分ニ而は老日売行
 候分ハ凡六貫・七貫・八貫文位ツ、売出申訳ニ御座候、
 左様御座候得は、前文ニも申上候通、老日農業仕、老
 日御城下売行申候得は、月ニ拾五日農業仕訳ニ御座候、
 残り十五日ハ昼寝仕姿ニ御座候、左様候得は、是以野
 菜等も十分出来不申訳ニ御座候、私申上候通、中買人
 被仰付候得は、三拾日ハ三十日農業仕申候得は、夫丈
 過分ニ野菜等も出来申訳ニ御座候、左様御座候得は、
 おのつから直段も下落仕義案中ニ御座候、

(付帳)
 「去年は

唐芋老升ニ付

代錢六拾四文ニ御座候、

当分老升ニ付

代錢貳百文或は貳百四拾八文又は百八拾文位ニも

御座候、次第不同ニ御座候、」

一第十三、骨槽御会所、右一条之儀ニ付、百姓御救と被
 思召上被召立候訳合ニ御座候得共、右一条ニ付而は、
 曾而御救之筋ニ無御座、何方百姓ニも其難渋ニ存悔申
 筋ニ御座候、乍恐多何卒此儀は、百姓為御救御差留被
 仰付度奉存候、勿論奸悪之商人共より初発願進仕候時
 分は、御上様御利潤有御座向ニ申上候儀と奉存候、夫
 ニ付而ハ御御利潤(筋カ)も少々ハ可有御座候得共、万民每晚
 油ニ差迫候訳合ニ御座候得は、是以どふぞ万民御救ニ
 被思召御差留被仰付度奉存候、尤其御利潤丈之儀ハ、
 上方通之船々ニ、仮ハ拾反帆老艘之御算当被遊、其掛
 御役々或は手伝・小仕・日用夫水揚口錢迄、御差引被

仰付、其残り丈之御利潤丈ヲ船毎之帆前ニ準シ、骨粕持下候節、夫丈之御利潤丈ヲ運上銀被仰付候ハ、御手も御よごし不被遊、御利潤丈ハ有之訳合ニ御座候、是非是丈は御差留可被下候、夫ニ付而ハ不依何篇、猶申上度存寄も御座候得共、文盲故仮名書を以少シ是丈奉申上候、是非此跡々申上候様被仰付候ハ、又々幾度ニ而も仮^か字書ヲ以可奉申上候、

右条々之趣は、万民御取救之御根本ト賤敷私之身も不願奉申上候、右ケ条書丈ニ而も御取揚被下候ハ、御領内数万人之人命御救筋ニも相当、来春より夏ニ相掛、飢餓ニ苦ミ申民百姓共迄再生仕程之訳ニ而、実ニ以御仁徳之程猶更深難有可奉存上候筋と、明暮存詰罷在候処より、重畳之不願恐多、右之始末ニ相及ひ申候、前条ニも申上候通、米之一条ニ付、諸人御救之為メ、焼酎屋丈ケはどぶそ早速御差留被仰付被下度奉存候、右ニ付而は、薪等も焼酎屋ニおひて焚禿申訳合ニ付、薪も出増申訳ニ御座候、又米も当

分は過分ニ焼酎屋毎ニ買込居申候、右之米も則より焼酎ニ潰シ不申候得は、是以出増申訳ニ御座候、又焼酎煎方ニ付而も田舎より百姓共雇入有之、右百姓も煎方不仕候得は田舎江罷帰農業等仕者ニ御座候、左様御座候得は、矢張夫丈過分穀物も出来増申訳合ニ御座候、左様御座候得は、焼酎屋之儀は別而余計成物と奉存候、米穀は春日無之候得は、人命ニ相拘り申誠ニ大事之品ニ御座候得共、焼酎は無之候而も酒有之候ハ、吉凶事ニ事欠キ申事は無御座、勿論焼酎一切無御座候而も人之命ニ相掛申儀ハ少シも無御座候訳と奉存候、乍憚私事も是迄江戸表江も三拾余度往来仕、大体他国之風俗ヲ見聞仕候処、他国之農民・町人は働方ニ付申候而ハ、每朝正七ツ時ニ起出、農業或は何仕事ニ不限、終日無油断相働申候而、夕方ニ相成候而も、何ぞ草臥^{ゾリヤ}休メ杯と申儀ハ一切承及ひ不申候処、御国之農人・町人ニ限り、每朝五ツ時頃漸起上り、仕事等ニ取付、昼過七ツ過頃よりチン

〱草臥休等ニ取付、取肴或は鮪之魚之刺身トして
 多分給酔、誠ニ費成焼酎と存申候、剩体も弱ク罷成
 者も漸く有之、其身之行ひは不宜、ヤ、トモスレバ
 所帯方難儀ト申立、御上様ニ迄御迷惑奉掛上候事多
 々御座候、市中諸所焼酎屋毎ニ当分買入有之米別而
 過分ニ而、右ヲ焼酎ニ不相潰、貯有之候ハ、来春
 より夏ニ相掛、仮凶年ト申候而も、水粥等相噉り申
 迄ニは及び申間敷儀と奉存候、前条通ニ焼酎屋御差
 留被仰付候得は、則米は下落仕訳合ニ御座候、恐多
 奉存候得共、当時之酒屋・焼酎屋被差留候ハ、格
 別諸人も融通仕申事ニ奉存候、成程真幸江酒屋被召
 置候得共、是以畢竟御国米ニ而御座候ニ付、上方伊
 丹・池田より御上様御手ヲ以御買下相成候方、却而
 御利益之御方欵共奉存候、ケ様ニ申上候も、私愚意
 迄ニ而ハ無御座、是迄奸悪之商人共手数能々案内有
 御座処之道筋、惣而私能存知罷在申候処より、一々
 申上候事ニ御座候間、乍此上猶能御勘考被遊候上、

万民之御救と被思召上、右条々御取用被下度儀奉仰
 願候、右御趣法立ニ付而は、科人毛頭出来不申訳合
 ニ御座候、右科人無之訳合は、則前文ニ申上候通、
 四寸角之柱、広小路始諸所江被召建、諸人より五人
 組合証文差上置候上は、万一相背候者有御座節は右
 五人組合之内より取扱仕、右柱江相晒申儀ニ御座候
 得は、一向御上様より御手被為付候儀ニ而ハ無御座、
 自然と奸悪之心も相正シ申筋ニ御座候故、御領内益
 静謐仕訳と奉存候、尤返ス〱も焼酎屋之儀は、諸
 万民ヲ御助ケ分と被思召上、為御救御差留被仰付被
 下度奉存候、余之儀ニ而は無御座、当分焼酎屋毎ニ
 米四五拾石ツ、位買入方仕居不申屋は老軒も無御座
 候、凡五拾軒位之屋々毎ニ、右之通過分之米買入置
 徒ニ焼酎ニ煎潰シ申次第ニ御座候間、右米を其俣貯
 置、万民之飯料ニ見賦申候而も、来二三月比より七
 月比迄ハ多分不足仕訳ニ而は無御座候間、何分ニも
 此一条ニ付而ハ、此涯早速御差留仰付被下度、偏ニ

以奉願上候、且亦前文ニ奉申上置候札一条ニ付、三文札之儀ハ無拋極肝心之訳合ニ御座候ニ付、右之儀ハ是非御造調被下度、是亦奉願上候、右札御造調ニ相成候得は、御領内諸色一同平等仕次第ニ而御座候ニ付、其委細は御作調相成候上、猶委敷追而可奉申上候、尤諸色直段平等仕候様成立申候上は、他国より金銀はおのつから入米申儀ハ無相違事ニ而、其理筋は追々可奉申上候、是迄之振合は、他国ニ而は諸色下料ニ而、御領内ニ而は高料ニ有之候故、金銭他国江拔出申儀は、為差知レ事ニ而、奸悪之商人共密々仕兼申儀ニ而ハ全無御座、仮ハ他国ハ品高直ニ有之、御国ニ而ハ諸品下直ニ有之候得は、下直之品ヲ他国江持出、他国之金銭ヲ御国江持込申理筋ハ、丁ト相見得居申事ニ御座候、猶胸中ニハ御利益筋種々相合居申候得共、至極文盲之私ニ御座候故、乍漸十分之一仮名書を以奉申上候、御取用被下候儀ニ御座候ハ、私生涯之本望此事ト奉存上候、

丑十二月七日

高江士

青崎市郎左衛門

上

文書原寸 縦一六・八釐 横一二三四・五釐

一四三 倫敦関研蔵ヨリ蓑田伝兵衛へ

幕府ノ陸海軍備其他

(封筒)

「蓑田伝兵衛様

御親披

関研蔵

」

八月初旬之御尊翰、何方へ相滞候哉、当月二日龍動府へ相達難有披見仕候処、御両殿様益御機嫌能、府下平静、尊公様ニも御壮栄御連動之由奉恐賀候、随而爰許一統相揃無異、(書生カ)初生中ニは追日昇学、私共ニは是迄着眼いたし候件々も大概成就仕候付、当月廿七日出帆之英飛脚船より帰朝之決定仕り、当分仕廻繁務罷在申候、尤当月廿七日出船いたし候て、四拾余日にして香港へ相達、五六日茂滞在、依時宜上海・福州へ行候欤、直ニ帰郷可致

欵、香港着之上、船之都合次第相究候筈御座候、左候へは、来三月十日前後ニは、拜顔を奉得候含、折角相衆居申候、△欧羅巴も相異候儀無御座、柴田日向守当月二日(剛也)仏船より帰朝いたし候由、軍艦製造之諸機関購入いたし、惣代銀百八拾万ドルを五ヶ年ニ割渡候談判相整候由ニ而則年々三拾六万トルツ、相払候へは、五ヶ年ニ至り、軍艦製造いたし候様成就いたし候由、仏国より諸機関は職人等まで凡三拾人計相雇、追々来朝之筈也、其外陸軍士官数名相雇候筈と云々、幕府も此度は憤発して、海陸軍を盛ニして遠大之逆意を相懷候事ニ相聞得候間、列藩も此逆意を注目せずはあらず、勿論此始末ハ深長にして筆紙ニ難尽、最早此書状之相達候時分は、拜謁を得候迄になるへし、△我朝は各国領事官とも突然と撰海へ相迫り兵庫開港之事件を申立候処、始は、京師之御義論難被相開勢之処、段々紛論之上、終ニ開港決定ニ而、既ニ当年より開港相成候哉之趣、支那国のテイカラフ新聞紙ニ追々相見得、始末如何と掛而苦念罷在申候、△御国許も専

整財之御手段相開候而崎陽其外盛大ニ御手相伴候御模様伝承いたし、爰許一統大愉快也、私共ニも遠航以来、専苦心仕候儀は、只整財之策略他なし、此度は随分御土産有之申候間、何卒御待可被下候、勿論遠行以来、乍不及蒙眼之相及候丈、段々見居も相付申候間、帰朝之上は充分無腹臆愚論建言仕候心底御座候間、依時機は私之醜首獄門ニ掛候儀も可有之決心ニ御座候、其他難尽、不遠拜謁之期ニ申上残候、先は御受旁草々如斯御座候、恐々敬白、

於龍動府

丑十二月七日

養田伝兵衛様

尊報

(五代改厚)
関 研藏

追而、此度は桂公(久武)へ別段書状差上不申候間、宜御披露奉願候、乍末毫衆掛も相異之義無之由御越被下奉厚謝上候、

文書原寸(折紙)

縦一三・六種

封筒原寸

縦一・二種

横 二二種

横 七・二種

一〇六 土岐新兵衛ヨリ裁許掛衆へ

幕吏ヨリ長藩へノ八ヶ条詰問

（堀裏朱書）

乙丑十二月九日

小倉より

土岐」

先月廿日於芸州ニ長州家老宍戸備後之介御糺明之次第承得候形行、去ル五日付を以御届申上置候処、先月晦日、右於同所、長州奇兵隊頭取之者共御糺明之次第、且上方表之形勢承得候形行左ニ申上候、

長州側用人

木梨彦（彦右衛門）左衛門

同奇兵隊頭取

河腰安四郎

井原小七郎

入江嘉伝（親重）次

右彦左衛門事、先達而広島江致參着候、井原主計病氣煩付致帰国候付、右為代先月廿五日芸州江致到着候由、河腰安四郎外二人事、右通頭分之者共ニ而、御用召ニ付、同廿九日同断致到着候由、然ニ翌晦日於広島国泰

寺大目付永井主水正殿（尚志）其外、公辺御役々より右安四郎・彦左衛門等御糺明之ヶ条、左ニ承得申候、

一 当春長州内乱争鬪之節、大膳父子慎中出馬、如何、

一 右争鬪相鎮候上、大膳萩江不引取、山口江入城、如何、

一 破却之山口城修覆、且武器手配等、如何、

一 於馬関来船之夷人接対和親、如何、

一 大・小砲夷国より買入候儀、同断、

一 壬戌丸夷国江壳渡ニ付、村田蔵六印形付之畫面、長門直応対、同断、

一 筑前大宰府江被召置候本公卿江進物致、右江付添之本

諸太夫森寺大和長州江渡海、同断、

一 淡路・監物御召ニ不出、其外末家・家老之内、御召ニ

不応段、同断、

右八ヶ条、木梨御呼出一応之御糺相濟、河腰外二人御

召出同様御糺明之由候得共、極秘密ニ而、何様御答申

出候儀逐一相分り不申由、然共壬戌丸夷国江壳渡候儀

は、初而致承知候段、銘々申出候由ニ而、御糺相濟、

尚亦宍戸・木梨御呼出申出之趣、一応御聞込相成候付、

此上は何れも調印之書取可差出、猶其上ニ而、御尋之

趣有之段、御達相成候由、右は小倉藩川島再助事、当

分芸州江差越居候者ニ而、彼之方より当月朔日出仕シ

之届書、昨八日当所江相達申候由、

一酒井雅楽頭様御役御免ニ而、川越侯御儀御用ニ而、当

分御京着之由、右は本之通御復職共ニ而は有之間敷哉

と取沙汰有之由、

一筑前宰府滞在之五卿為取締、公義御目付先日通行之向

ニ申上置候得共、右為取締御目付小林甚六郎其外、追

々中津江着船候上、通行相成管之由、尚亦承得申候、

右通承得申候間、為御見合此段御届申上候、已上、

丑十二月九日

小倉滞在
唐物締横目
土岐新兵衛

生産方掛
御裁許掛衆

〔本文書ハ〕鹿兒島県史料 忠義公史料「第三卷第七三〇号
文書下同文ナリ

文書原寸 縦一六・三種 横二〇〇・五種

一四三 土持佐平太広島ヨリノ報告 二通

広島出張中ノ幕兵不節制ノ件等

一四三九ノ一

(端裏)

〔朱〕「乙丑十二月九日」
〔付箋〕「土持佐平太」

別紙老通并脱藩建白之写、且又大小監方より長藩江御

札問之条々聞書一通相添差上申候間、御披露給度、此

段御頼上越候、以上、

但脱藩於京撰御召捕相成候節、同人共口問書写御座

候得共、此節写方相濟不申、依而跡便より差上候

様可仕候、以上、

丑十二月九日

土持佐平太

奥掛

書役衆

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第七二九ノ
二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一四・五種 横三一・二種

一四三九ノ二

(増裏朱書)

乙丑十二月九日

広島より

土持佐平太

(尚志)

(選)

先月廿日永井主水正等より穴戸備後之介御呼出、御詰
問御座候得共、其漙相分不申候趣、且此表風説書等、

同廿日付を以御届申上候通御座候処、其後長藩諸隊段

々広島表江參着仕、同晦日備後之介其外四人、御糺問

旁之事件、彼是承合候形行左通御座候、

(并三郎、安寛)

一同廿日午刻時分、永井主水正・戸川伴三郎・松野孫八

郎等三人乗馬ニ而、都合五拾人余従卒一列ニ曳統、御

徒目付石坂武兵衛・栗田耕一、御小人目付桜井謹作・

瀧田正作・内田鎗五郎・鈴木安兵衛等付添、芸藩物頭

一人致先乗、国泰寺江出張相成、然ニ穴戸備後之介ニ

は麻上下致着服、尤乗輿ニ而率添馬一疋、家来五拾人
程召列、且大津四郎右衛門同十四五人之供廻ニ而出張、
四郎右衛門ニは御糺之席ニは不被召出候得共、芸藩五
六人、植田乙次郎等相俱寺中江罷出諸事致手続等、次
之間江相扣居、勿論寺内人弘ニ而、芸藩より寺門前江
は段々致護衛、左候而、乙次郎等儀は折節其場之様子相
伺申たる由御座候処、書院中央ニ主水正出座、伴三郎
・孫八郎順席被致、無程備後之介被召出、主水正膝元
近く稍額を合候位ニ相隔、語音等瑣細、襖越しニは聞
分兼候廉々御座候由、然ニ同晦日昼時分又候大目付等
三人、廿日同様之振合ニ而、同寺江御出席有之、備後
之介其外四人之者共御呼出相成、備後之介着服・供廻
等先日同断、木梨彦右衛門儀家来三拾人程召連、尤乗
駕ニ而右同様、諸隊河腰安四郎・井原小七郎・入江嘉
伝次三頭乗馬ニ而、都合拾人余曳曳、且芸藩ニも段々
付添致出席、御糺問之節は、次之間江相扣罷居傍觀仕
候処、最初右安四郎・嘉伝次・小四郎三人一同ニ被召

出御糺濟之上、引統備後之介・彦右衛門兩人御糺問有之、然ニ安四郎外兩人被召出候座席、主水正膝元より漸四五尺位も隔居、右備後之介・彦右衛門兩人罷出候節は少し席を引進れ、同日御口問之事件は、薄々洩聞得候程之由、然共備後之介始諸隊相俱廿日御糺之趣ニ不相替、芸藩方致伝承候趣旨を以、其後植田乙次郎等より内々長藩江承繕候処、兩日御糺ニ付応対振之件々委は不相洩候へ共、大略説話之趣、別紙之通御座候、將兩度之御糺夜ニ入曳取、其節備後之介始諸隊等至極喜悅之面色ニ而致退座、左倅而、長藩ハ芸藩江挨拶之趣、此節御用召ニ就而は、実々難題之訳筋と及痛心候処、案外御叮嚀之至、別而難有儀と奉存候間、猶亦宜敷御執成給度段為申儀も御座候由、

一前条兩度之御糺ニ而、御疑惑之廉々相分申候哉、且直様長国^{（毛形）}之御所置被仰出ニても可有御座哉之旨、芸藩より御目付方江内分問試候処、最初備後之介申出之趣意不相替、諸隊之申口も随分相揃候、乍然確証之為、書

取を以可申出段被相違候付、差出候はハ、則閑老衆江御執達有之、其上浪華表ニおひて、重而御評議被為尺何分御沙汰可有之訳柄ニ而、当国出張之大小監方前ニ而不相分段、御内達之由、左候而、諸隊之分は一応御糺濟相成候故、御暇被仰出候へ共、邂逅出浮候付而は何と欵御所置被仰出迄之間、備後之介相俱滞留仕度段申出候由、

一今度大小監御供方之内、長州脱藩三人被召列、広島江御来着之上、金子迄も被差与、乗船より長国江被差遣、右は全長防之御所置等ニ付、暴徒共承服之否御説得之為、御廻込相成候哉之風説御座候、依而は至極御蜜策と伺れ、一円御布告無之候得共、段々見届候者有之、顯然確証等御座候、右就而は当四五月比京撰表ニ而浮浪士御召捕相成、其内萩様^{（黒田）}・筑前様^{（有馬）}・久留米様御内脱走之者有之、御糺之上及白状候口問書、且牢中より、建言仕候書付迄も御座候由、然は右之者共ニ而は有之間敷哉ト流説仕候、依之建白之写別紙相添、為御見合

差上申候、

〔付紙〕
一 本文三人、長藩赤根武人・久留米藩脱藩浪上郁太郎

・筑前同杉村泰輔ニ而は無之哉、勿論此者共、当四

五月京撰ニて御召捕相成候節、御口問書并牢内より

建言仕候者ニ御座候由、

一 先達而申上置候通、紀州侯御人数追々参集、御家老安

藤飛驒守其外諸隊凡七百人余到着、且関東之騎馬隊・

歩兵隊等都合千四五百人、去三日来着仕、勿論甲冑又

は陣羽織・竹鎧等着し、一刀差之者共劍銃備、押太鼓

ニ而中国路より致通行、左候而、当所寺院并商家江宿陣

罷成候、右外禰原侯人数も当御城下より巷里半程東ニ

あたり、海田市上方往来
御町家宿陣之手当有之、追々出勢之賦

ニ御座候、将又井伊掃部頭殿・同兵部少輔殿ニも一昨

七日八日迄ニ相掛、上下四五百人之同勢集勢相成、掃部

頭殿ニは当御城下寺院江御宿陣相成、兵部少輔殿儀は

諸隊曳円、廿日市広島より西ノ方三
里長防往来筋駅所宿陣、追々参集之由、

いまた人数相分不申候へ共、大凡三四千位之手当と相

見得申候、

一 御目付方より芸藩江御内沙汰之趣、前段通大坂表より

追々御人数御繰出し相成候得共、決而長国江御撃入と

申訳ニ而は無之、右は当九月廿七日限長藩より出坂不

致候節は、迅速御旌旗進られ御糾問被為在との趣は、

兼而被仰出候事ニて、何れ御先鋒・御中軍之御人数被

差向不被成候而は、御名分ニおひて不被為済候処より

御出勢相成候間、長藩共疑惑沸騰不致候様芸藩共より

程能説得可致旨、御内達之由御座候、

〔付紙〕
一 本文御名分之御為先鋒御出勢之段、御沙汰ニは御座

候得共、弥其筋共着眼難致哉と、各藩より彼是疑惑

相及候形ニ相見得申候、

一 大小監察被御差向御糾問之上、時機ニ依而、御人数被

差向候段被仰発候、就而は専 幕長之情実為探索方、

当分筑前様并中津様・宇和島様・熊本侯・柳川・雲州

石州・因・備等之諸藩、追々出浮、何れも毎々出会仕

打合申候得共、此節御糺旁之儀、御気蜜之御取扱と伺

れ、勿論御伐長御進退之路、更ニ分兼、空敷曳取候国柄も御座候、然ニ中津様御内三輪彦八・恩田源右衛門、宇和島様同加幡又市・桜田大助と申者被差越、右御両藩は、御重役様方より私江被仰達候趣ニは、此節柄為御聞合旁御差遣ニも罷成候付、無隔心探索等之儀共、宜敷周旋可仕旨承知仕候故、彼御両藩江は其心得を以何篇会积仕申候、

一 此表江萩様御重役穴戸・木梨某其外諸隊従卒都合百三拾人程滞留之処、右之人數市中自便致徘徊、湯屋又は茶屋端等出張、勿論宿亭ニ而酒食等取唯し、酌婦等呼集、金錢等數多仕込、散財之振舞有之、将当所関東并諸藩入込、紛雜之為体ニ相見得申候、時機次第ニは戰爭可被及国柄、何れを敵味方と申候差別相分不申、左候而、追々參集有之候節々長藩致見物、奇兵隊等之行粧ヲ致傍觀、色々致輕蔑候口氣も有之哉ニ巷説御座候、勿論其通歩兵共、至て卑賤之者共と相見得、一隊老若不同有之、且木劍等帶し候者段々有之、尤中国筋押太

鼓ニ而隊伍相整、二里三里位ツ、の宿泊ニ而致通行、諸所ニ而米錢品々食取たる聞得御座候、然は迎当国江到着仕候て、未日數も相立不申候得共、最早商家江踏入、右体不宜所為之者不少、惡評沙汰之限ニ御座候、此上如何之事釀出候も難計哉と、芸藩等末々町家之者共始、懸念令痛心候形ニ相見得申候、右通ニ而幕長之情実、就中御糾問之事件等精々探索仕候処、条理明白分兼、併大同小異は可有御座候得共、大凡前段之趣意柄と奉存候、右付而は大小監方至極御寛大之御糺ニ而長藩半腹安堵之氣先と伺れ申候得共、渠御詰問口書を以浪華ニおひて御評議之上、重而何と欵被仰出ニ而可有御座哉、尤当分之処ニ而は、先公平之御命令被仰発候半哉と、芸藩共着眼之様子ニ相見得申候得共、脱藩等長国江御差遣相成候ニ付而は、何れ之筋承服之可否説得次第之事ニ而、万一周旋之路不開得、却而暴徒等過激之論致主張候時機ニ立至り候而は、何様變化之形勢成立候欵も難計哉と奉存候間、猶此末之機會ニ応

し、追々何分申上候様可仕候得共、当時之形行、此段申上候、以上、

但大小監より穴戸并木梨・諸隊共口問書写卷通且脱藩人建言写卷通相添差上申候、

丑十二月九日
広島滞在
土持佐平太

奥掛
書役衆

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七二九ノ
一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一四・五糎 横五七六・七糎

一四〇 土持佐平太広島ヨリノ報告

長藩ニ対スル幕府ノ詰問条目

大小監方より穴戸備後之介并諸隊江御糺問之条目左

之通、

(毛利敬親・広封)

一 大膳父子今以萩表寺院江謹慎候哉、如何之事候哉、

一 諸隊之内奇兵隊等折合候哉之事、

一 当春於長国家臣共闘争相及候節、謹慎中長門出馬且当

九月三田尻浦迄同断、

一 於馬関昨年来外夷船等近寄蜜商之聞得有之、如何之事候哉、

一 外国江使節差上候儀、如何之事、

一 蒸艦夷人江売払候聞得有之、是又如何之事候哉、

一 山口城再ひ築拵候訳、如何之事候哉、

右通ニ而彼是聊之事件御尋問之由、ケ条洩たるも可有

御座候得共、御疑惑之廉々大略前条之通ニ而、長藩共

より一々御答振等具ニ相分不申、乍然其砌程能取繕、

名義を建申濟候由御座候、以上、

丑十二月九日
土持佐平太

文書原寸 縦一四・五糎 横六二糎

一四一 黒田嘉右衛門ヨリ叢田伝兵衛へ

長州再征、幕府内訂ト薩藩ノ態度

(包紙ウツ書)

自大坂

叢田伝兵衛様
黒田嘉右衛門

極要用

封

〔乙丑〕十一月九日

一筆啓上仕候、嚴寒之砌御安泰被為成御精務大慶御儀奉存候、近来絶而御安否伺も不申上、甚不本意之至御海容可被下候、次ニ私事も十月初旬江戸より登京、于今滞京無異相勤罷在候、然処先達而幕人柴田東五郎、大坂ニ於而永井清左衛門江被会、天下之御為且御国之御為、一大事を御談話申度儀有之候間、内田仲之助欵又は私欵ニ御用序下坂いたし呉候様、都合は相調間敷哉之旨申入候由、永井より形行申上越、私江下阪被仰付、去ル五日大坂江罷下、其段柴田方江相通し候処、翌六日旅宿江東五郎入来致面会候処、方今不容易世態、閣老方ニも別而心痛被致居候折柄、御国之儀当分何も御関係無之、何卒天下之御為御尽力被為在度、各懇願被致居候次第、已前之幕役ニは色々浮説を信じ、御国を被疑候事も為有之由候得共、只今板倉・小笠原之両閣老ニ於而ハ、更ニ其等之

疑念は無之候間、何事ニ而も被仰立候筋は被行候様いたし度、其段御国江申セトハなしニ小笠原之家老多賀長兵衛より内々柴田江相咄候由、依之薩藩見込之筋は、彼両閣老江吹込、御国論被行候様、致周旋度と之趣、柴田より承候付、両閣老薩藩之見込御聞取有之度御存慮ニ候ハ、公然と重役ニ而も被召呼御聞届給度、左も無之ニ内々此方より手寄を求、僥倖し而、説之被行候様之儀は決而不致賦、且今更ニ相成、征長等之事ニ見込申立候而も最早無詮事ニ候間、適御存寄之儀被示聞候儀ハ忝候得共、何分難応其意旨程能申答置申候、然処此節討長之儀ニ付而は、内実深キ子細有之事之由申候付、何様深キ御子細有之欵ハ不存候得共、其無名之師を起し、条理之不立征討を被唱候而は、内々如何程深謀有之候共、都而欺謀ニ相成、欺謀を以天下を被制候而は、長州は勿論、諸藩拳而承服致間敷、扱其子細と申は何等之訳柄ニ候哉承度、精詰及尋問候処、右は不輕機密ニ而、卒爾曖昧之事は難申入候間、両三日相待呉度、左候ハ、詳ニ証説聞出し、

為知可申と之事ニ御座候間、其通可被成返答いたし置候
処、一昨日又候參、右子細と申は容易口外いたし兼候事
ニは御座候得共、御国は旧主父母之國之事ニも候間、不
包相咄可申、抑此節御進発之起りは一橋・会藩等より頻
ニ御誘引有之、其か為ニ御出京ニ相成、

朝廷之御廟議且諸藩之議論共被聞召、素より

將軍家ニも寛典之思召ニ候処、一橋・会津只管議論を建、

此度長州を不攻屠候而へ、

幕威益相衰、天下之号令も是限可相廢と之趣を以激励、

終ニ

勅諭迄も申下し、下坂を計り、

將軍家をし而進退ニ窮セしめ、而して一橋は京都ニ居留

り、天下之怨言憤罵を尽く幕府江摺付、己れ独り譽を取

之姦計、会も是か為ニ姑く被致籠落、(總)近頃稍解悟いたし

候由、右等之事より旗下之士一橋を惡む事最甚敷、(正)阿部・

(兼)松前之退職も表向は摂海夷舶之取扱不束と之事ニは候得

共、其実は一橋を除之策を廻らし、其謀拙し而、却而彼

之為ニ被倒たるニ而有之、今之板倉・小笠原も表ニは一

橋と合論之様相見得候得共、右は勢ひ不得已之次第ニ而、

幕吏之黜陟進退も尽く一橋之手より出、板倉・小笠原等

は只手を空して其職ニ在而已、此故ニ勝安房守其他有志

之者も一橋之忌惡を受候者は更ニ不被奉、依之長州之事

は内々既ニ和解之意通もいたし有之候付、必す穩ニ可相

濟、一橋之事は今通ニ而は不相濟、水戸江本家相統ニ可

押込宮中之密議ニ候得共、彼人其儀承服いたす間敷哉、

万一承服無之時は、其假ニ難被召置、自然其節は何様之

異変到来可致哉も難計、全体一橋之京都守護は、御国よ

り之周旋ニ因而右之命を蒙り被居候事故、若も其通之儀

相發候節、御国より一橋を御救助可有之哉と之懸念も有

之由、一体御国之儀は、長州之事ニは勿論、外ニ何様足

許ニ異変到来候而も、敢而御動キ無之、何方江も御荷担

不被成御国論ニ候哉と、東五郎より承候付、成程条理之

不立事ニ私意を以妄ニ動キ候様之儀は不致儀、勿論之事

ニ御座候、只義之在処ニ而動キ、義を以不義を征する迄

之着眼ニ罷在候間、兼而交々親疎且勢ひ之強弱を計り、予め何方江可致荷担の、可敵のと申様之事は一切無之旨相答置申候、畢竟右云々之口氣を以推量仕候ニ、

幕橋之間、大ニ相軌、既ニ争端をも開程之勢ひと被察、

是か為ニ御国を味方ニ取込、後橋ニいたし度方略ニ相違

有御座間敷哉ニ奉存候、且又御国之

(島津茂久)
太守様

中將様御間、近々御出坂御上京等之御都合は被為在間敷

哉、是以両閣老類ニ希望被致居候次第ニ而、

御国之儀は 御旧家と云ひ

(徳川家齊室)
広大院様

(徳川家定室)
天障院様御統柄と申、旁以等閑難被成置

御家ニ候間、已来御会釈振

御一門・御三家同様之御家格ニ被成進度御内評も為有之

杯と之趣迄も柴田より纏々承候ニ付、先達而撰海夷艦渡

来之砌は、不取敢

天氣御伺旁として、御上京被遊管候処、夷船も無事故退

帆いたし候付、今は別段此方より起ッ而御上京御尽力不被為在候而、難相濟程之事も不相見得、若又天下之御政体ニ付、是非御相談被為在度

大樹公之思召も御座候ハ、其形行閣老方より表向被仰

入度、左候ハ、自ら

主人之存慮可有御座、私体此儀は治定如何と御決答は相

成兼候趣致返答置申候、既ニ幕府内輪之乱階を醸出し、

今更婦女子を欺様之事を以、外藩を後援ニ取込度浅間敷

計策、何分ニも笑止之至御座候、左候而、右柴田儀御屋

敷江參、右申聞候次第ハ、何卒広く他江不相響様、至極

秘密いたし呉度申事御座候間、左様御含可被下候、尤爰

許ニ於而、右柴田江会取候形行は私より其御許江御届申

上候様、京都ニ而承知仕置候付、此段申上候、以上、

十二月七日

(實傳)
黒田嘉右衛門

養田伝兵衛様

追啓、先月廿日芸州広島ニ於而、幕役永井主水正よ

り長州之宍戸備後之介呼出し、昨年伏罪以後、大膳

父子弥謹慎有之候哉否尋問有之候処、其後今ニ至り

恐入慎罷在候旨、宍戸相答候由、然処國中一統之人

気ハ如何ニ候哉被相尋候処、是以主人之心底汲受、

謹慎罷在候、乍然大勢之中ニは間々固陋頑愚之者も

罷在事御座候間、國中一人も不残尽く皆大膳父子之

心底通慎罷在とは難申上、諸隊之内も各不同御座候

付、委細は追而取しらへ、書取を以可申上旨相答、

其日は至而穩成応接ニ而相濟候由、左候而、井原主計

は病氣ニ而引取、代りニ木梨彦右衛門と申者出張、

外ニ諸隊之内より六人程出掛参候由、同晦日又々右

木梨并諸隊六人も呼出し、糺問為有之由候得共、其

節之応接はいまた何分共次第不相分段、芸州藩士よ

り承得申候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第七三二号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六種 包紙原寸 縦四〇・五種
横五〇四・七種 横二七・八種

一四三 鹿兒島海岸砲台大砲試射届出

明十一日四時揃ニ而、祇園洲・新波戸・弁天波戸・大門

口台場御居付之大砲漂的致打試候間、此段御届申出候、

以上、

物主

丑十二月十日

川上勘解由

島津頼母

島津右門

市田右近

北郷数馬

文書原寸 縦一四・五種 横四五・五種

一四四 松平春嶽公より島津久光公へ

(包紙ウツ書) 天下之形勢を論ず

島津大隅守様 平信

親展 慶永

(朱「封」) 十二月十一日
従越前福井

一輪謹啓、敵寒之砌ニ御座候処、愈御清迪被成御座奉拜
賀候、陳は爾来彼是御疎闊罷過不本意之至、多罪伏而奉
希御海涵候、此雁近日郊外之所獲、遠路を經候事故、風
味之変も甚難計候得共、時下拜問旁致肅呈候、御膳羞之
員ニも被充候ハ、孔幸奉存候、如斯時勢ニ国許ニ索居遊
狎候処にも無之、実ハ不本意千万御さ候へ共、

勅一々出懸候へハ、却而御不為にも可相成致之形勢ニ御
座候故、兎角猶予勝ニ相成、憂漸此事ニ御座候、

幕茂何角御多難之御成行候へは、乍恐

(朝廷) 朝も亦難被安世態、津涯も見へ兼、日夜恐悚案勞之外ハ

無御座候、帯刀も又々出京之由承及候、依旧兼而之 御

国論相合周旋尽力無毫遺義と想像、依頼罷在候、扱々前

後天下之形勢転変御互ニ及御論談、兼而期したる事とは

乍申、今更驚愕浩歎之事而已、兎角は禿筆愚文之及ふ所

ニも無御座候故、云々ニ付し不能委曲候、猶御明断御確

論も御座候ハ、御垂示之程奉仰希候、扱又北場之物産運

用筋、賤隸より貴臣へ及懇談候処、追々熟調相運、全く

兼々不少御申合せ被下候故、從都合逐日相開ケ可申と、
感荷之至奉存候、先は右時候御見舞旁如斯ニ御座候、書
外期再鴻候、頓首拜、

十二月十一日

慶永

隅州老盟台

研北

一白、時下御自愛專懇念候、已上、

文書原寸 縦一六・八糎 包紙原寸 縦二七・八糎

横 二五六糎

横 三九・五糎

一四四 川上助八郎有村壮一ノ上書

安田轍藏ノ經濟策聴取ノ件

(包紙ウラ書)
一上

封 一

乍恐私共儀、度々奉煩

尊聴、誠ニ以多罪恐多奉存候得共、去月十六日伊藤彦助

江相付奉願候安田轍藏儀、經濟之道弁達仕候儀は、追々

奉言上通ニ而、公辺之密事且異国密条約等之儀も有之、

頻ニ言上仕度、毎度私共江申聞、不忠之心底毛頭無御座候、

御国家之御為筋罷成候籌策起立之基源を奉言上度存含罷

在候間、先達而奉願候通、何卒

御近習辺江被 召出

御下問被遊被下候様、伏而奉再願候、不肖之私共存慮十

分筆紙ニ奉申上儀も不相叶候間、此節又候養田伝兵衛江

相付、口達相添奉願趣御座候間、近頃恐縮至極奉存候得

共、何卒

御聞取被遊被下様奉万願候、尤自然不被為叶

尊慮儀は、いか様共 御採捨可被遊御座奉存候、当世態

飛鳥奔馬茂不及次第と奉存、

御国家之御為筋罷成儀と乍承、空ク黙止罷在候而は、適

々難有

御仁慮ニ而、下情

上達仕候様被仰渡候 御趣意ニも相反シ、不忠之至と奉

存候間、不顧多罪、又々犯死罪伏而奉歎願候、誠惶誠恐
謹言、

丑十二月十五日

有村 壯一
川上 助八郎

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦 二六・二糎

横 一一九糎 横 三八・七糎

二四五 伊達伊予守より島津三郎公へ

条約勅許其他之件

(包紙ウツ巻) 大簡英明公 弄籤

密用

(朱「禮儀」三ツ同シ)

〇 〇

〇

」

拜啓、沍寒之候候処、倍御安寧奉大賀候、其后ハ為差要
事無之、如例契闊伏仰海恕候、併是旧知己之故也、

○京様初冬初旬之一變動歎痛之至、実ニ大事去ルニ而候
処、先々鎮回、乍然尔後処置如何ヤ、

○条約も相備、先々天下得所向、議論一定可申、弥以皇国をして、五大洲中第一等強盛独立之御国威更張急務と注目、仍而航海可開時ニ而候、

○先日ハ不凶吉井參候得共、救時之大策、僕着眼無之、貴国両賢公御処置敬承之末と申置候、近日頗暴論ニ西郷怒罵化之由、尤被為於

両明公、御依然持重ト心得候、尚御容子密示被下度存上候、

否文如右、尚来陽万々可申上候、恐々頓首、

臘月十七日

弄鐮

大簡英明公閣下
侍史

二伸、時下御自愛奉專念候、

(島津茂久)
修理兄へも宜願候、僕瓦全、乍憚御省念被下度候、

已上、

文書原寸 縦一六・六種 包紙原寸 縦二八・五種

横 八八種 横三九・五種

一頁 伊集院伊膳ヨリ蓑田伝兵衛へ

筑前藩士処罰一件

(包紙ウツ巻)
一頁 蓑田伝兵衛殿 伊集院伊膳

ノ
└

福岡表御成敗は、一件ニ付三条殿より御頼之趣被為在候

折柄、美濃守様御父子様より肥後直次郎被召呼、御始末

被仰進候付、同人一事一往中戻之上、其段奉披露候処、右

御父子様江之御返辞、且又三条殿江は程能申述置候様と

之、右は御内命を奉し、直次郎又々先月十四日御国許出

立、同廿三日太宰府江帰旅、翌廿四日福岡之様罷越、当

藩応接掛森三右衛門・戸田春平江面会、一通り御返辞之

趣被為在、此節は拜謁いたす程之儀ニ無之、第一御面働

筋ニ拘ル事候間、御家法通り之場所ニおゐて重役迄其段

演説いたし置度候付、夫迄之手続可取計呉、既ニ木藤角

大夫御使節ニ而往返いたし、其砌御直ニ御上申被為濟候

程之儀ニ候得共、拙者警衛中ニ而、直様御当所江再帰い

たし候故を以不及拜謁、右式一通り之御返辭被仰進候訳合ニ付、実は夫等之御内沙汰迄茂奉承知罷越候段申入置候処、翌廿五日登城いたし呉候様申参り候付、如何様殿中ニおゐて重役対面欵と差心得罷出候得は、右三右衛門外老人招置江案内いたし、分而承候通、今日は御口上之趣重役共より奉承知積之処、唯今ニ相成下野守様御直ニ(黒田重隆)御承知可被為在御意有之、美濃守様ニ茂御同様ニ被思召候得共、次々御不例故、御一方様其通之由、案外之儀を承知仕候付、前文通一通之御返辭、御面働筋恐入候廉を以御断申上度、一往申述候得は、外ニ茂何欵御用被為在候様被窺候付、兎角茂罷出候様、強而承り、此上御辭退申上候道茂無之処より、拜謁相遂候付、此御方様より被仰進候御挨拶を申上候得は、彼御方様ニおゐて茂御同様被仰答候付、今度御家中之御所置、罪状明白ニ相分候上、御国典通之御成敗被仰付候と之儀ニ候得は、御当然ニ被思召上候、尤御国内御取締筋茂被為付候と之御様子茂御承知被為在、此上御案し被思召上候御筋合茂無御座

由之儀を被仰進候段申上置候、然処改而尋たき子細被為在候旨被仰聞候故、何御用ニ候哉申上候得は、此方足輕之内三人逐電いたし、及探索候得は、御国を志し候聞得有之、自然存居候儀は無之哉と之御尋問御座候ニ付、御国許滞在中ニは聊以承及候廉無御座候得共、此節帰旅之折肥後領佐敷駅ニおひて、筑後之者江行逢候得は、福岡表御成敗者之余党三十人計逐電いたし、薩摩を志し参候風説有之、追々捕手を茂被差出、一時騒動之御様子ニ響合候趣を承候儀は御座候由申上候得は、左様大勢他國いたしたるニ而は無之候得共、是非列婦度、親族共より願之筋有之、銘々諸方江立出候故、いか様右を取合、其通申触候半、三人ニ相違無之由之御沙汰御座候故、御国許ニおゐて、当時旅人御取締分而稱敷被仰渡、端々迄行届居候付、仮令参り掛候而茂、所詮御入付ニは相成間敷儀と相考候段申上置候、左候而、此節各藩江五脚警衛人増之儀、使者を以申入置候付、追々諸藩士大勢立込ニ茂相成、彼是別而懸念之次第故、家来共江無腹臆差因いたし、取

縮行届候様可取計筈と之御沙汰御座候故、奉恐入候段申上置候、尤御殿ニおゐて、御酒被下候上、御国製御柄糸二掛・同木綿紋二反・からすミ三腹分頂戴仕候付、引進メ等いたし候、格式頭取杉原平一迄、私之御礼申入置候、中一日滞在、太宰府江立戻、三条殿江参り候処、是又可被成御逢と之儀故罷出、此節福岡表之一条、国典を以罪人を成敗いたし候と之儀ニ候得は、脇々より否哉可被仰入筋合茂無之候付、此上は何とそ余計之世事ニ不被為差構、御無為之風姿ニ被為居候方可然様ニ被仰進候段申上候処、委細御承知被為在候と之御事ニ御座候、右ニ付、時分柄遠路往返いたし、^(正名)旁大儀ニ被思召候御挨拶有之、^(土方元)其後随従水野溪雲斎・南大一郎等を以御物見ニおゐて御酒被下候、将又前文通下野守様江足輕逐電之次第、筑後者より初而承及候筋、直次郎より御答申上置候得共、実^(正名)は同人中戻之節、高岡表江福岡者三人程参り居候由之風説承及居、左候而、佐敷駅ニおゐて前件通筑後者より承伝へ候上、土地之者共より承候ニは、筑前様盜賊方之由ニ

而相見得候付、子細相尋候得は三人之逐電者有之、追掛ニ相成候得は田之浦より足配繋り、佐敷より求摩筋江踏入候付、決而薩摩様を志し参候半と欵之事ニ而、直様跡を慕候旨相咄候付、此盜賊方より自ら御届茂申出たる積り推量いたし候付、何茂全く不存と計及御返答候而は、彼是御疑心を生し、此末不可然儀と存し、前件通筑後者より承候人数之間違候風聞を幸ニ不差障様申上置たる儀ニ御座候、右旁之次第、涯々御届申上候積之折柄、直次郎病氣煩付両三日以前全快いたし候時宜ニ而、夫故遅成申候、尤五卿方異変茂無之、先平穩之姿ニ御座候故、外ニ申上候程之儀無御座候、

右通御座候間、肥後直次郎申談、此段申上越候、以上、

丑十二月十八日 伊集院伊膳

養田伝兵衛殿

文書原寸 縦一四・二種 包紙原寸 縦二〇種
横六六三・五種 横二八種

一四七〇 土持佐平太ヨリ奥掛書役衆へ 合四通

幕府八ヶ条ノ詰問ニ対スル長藩ノ申開

(包紙ウツ書)

「奥掛
書役衆

芸州広島
滞在
土持佐平太

(朱)
「乙丑十二月廿三日」

一四四七ノ一

別紙三通御届申上候間御披露給度、此段御頼申上越候、
以上、

丑十二月廿三日

広島滞在
土持佐平太

奥掛
書役衆

文書原寸 縦一四・五糎 横一九・七糎

一四四七ノ二

一当春争鬪之砌り、慎中出之義ニ付而之事、
一破却之山口城修理、武器分配致候ニ付而之事、

一当春争鬪相濟、萩へ大膳等不引取候ニ付而之事、

一馬関江夷船来舶致候節、接待向ニ付而之事、

一蒸気船夷人江壳払之義ニ付、
(大村益次郎) (毛利広封)
村田蔵六印長門殿も応対
之事、

一大小砲夷人より買入候義ニ付而之事、

一元公卿江進物致候ニ付、諸大夫森寺大和守長州へ挨拶
(大和介、常邦也)

ニ参候一件ニ付而之事、

一淡路・監物御呼出且末家々老共之内御断之所、一向不
(毛利元善) (吉川経幹)

応候ニ付而之事、

文書原寸 縦一五・五糎 横四五・三糎

一四四七ノ三

八ヶ条之件々御答書写

一慎中役方之者共私之致騒動候趣事大行、

幕府江対し恐入候付、片時も難捨置、不願恐、山口江

大膳士中鎮静仕候儀ニ御座候、但御届書有之、

一山口城之茅屋ニ而大膳住居ニ候処、臣下之情愛難忍存

候者有之、土砂少々、運ひ、寒氣之防仕候事共有之候得共、早速差留候事ニ御座候、昨年(安慶)戸川様御見分之通仕置候、

一萩江罷帰慎可罷在筈之處、右騒動再び差起り候而は、幕府ニ弥以奉恐入候事と相成可申と苦心仕、山口ニ罷在、騒動之者共鎮握仕置、其内御沙汰相待、萩江曳取候而も同様慎居旨心を尽し撫握致居候儀ニ而、今更御疑惑蒙り候杯奉恐入候、

一昨年英吉利加仏蘭西戦争後、欠乏之品等兩三度贈候事も有之、尤兼而御触面も有之ニ随ひ贈候、乍去懇親接待致候儀は無之候、

一昨年来、外夷英江戦争後、釜を損し沈亡仕、其後曳去修覆相加候得共、何分西洋江罷越候儀は無覚束、乗組之者も上陸為致候処、右船何連候欵紛失致候間、夫々穿鑿等致候得共、今ニ相分不申、然処御糺之趣初而承知仕、左候得は、其節脱走之者共、若哉盗取候事欵と奉存候、

一右之儀は無之旨相答候、

一大膳父子ニおひては、決而使者等は不遣、尤公卿方側近く出居候者御座候間、万一私ニ罷越候者有之哉も難計、且は脱走者之内、大膳家来江相名乗罷越候者等も有之、若哉右等之儀御聞込ミにて、御疑心之事哉と奉存候、

一淡路・監物両人は家来も数多召仕候者故、主従之情愛難忍存、乍去申上候而も憚入候得共、無拋事申上候、

(正生)武田耕雲齋御所置眼前之事と存、何分田舎之者故、愚痴差迫、理義御糺之上如何様被仰付共、無拋儀と奉存なれ共、恐ながら主従之愛情ニ、両人家来共疑惑仕候て、彼是差出兼隙入候而、此度御糺問と相成、何分奉恐入候故、実事申上候儀、誠ニ恐入候、此段御賢察御憐愍を以、幾重ニも

大樹江御執成被下度奉願候、偏ニ御仁愛被成下候ハ、主従一樣難有御沙汰相待奉申上候、以上、

六戸(磯)備後之介

丑十二月

(相原治人)
木梨彦右衛門

文書原寸 縦一四・五釐 横一八九釐

一四四七ノ四

此節芸国江被差向候三監察方、去十六日一応御上坂之段は、先達而御届申上候通ニ御座候処、其後長国御所置振之次第旁精々探索仕候得共、更ニ相分不申、勿論當時ニおひ而、御再発之模様分兼候得共、芸藩等見込之処は、当所蒸艦御借入相成、当節季ニは御差返し被成候段御内約之由、然は亦々当年中ニは、右蒸氣船より御着帆相成候事ニ而無之哉、薄々推量仕候説話御座候、尤去十六日大小監方当所御曳取之節、(徳川茂承)紀州侯之御家老安藤飛驒守、(直徳)井伊掃部殿江御内命之趣、仄ニ伝承仕候処、今度長国宍戸備後之介始、諸隊江御詰問之条理、申訳は随分相聞得、乍去是迄渠之所為ニ就而は、段々御疑惑之廉御確証有之候得共、先長藩之申口ニ応られ、至極御寛大之路被為踏、

御聞届相成候御訳柄ニ有之、然は迎、右非是曲而御糺問相成候ば、一々白状ニ不及して相済問敷事ニ候得共、却而

皇国之御為筋不宜、尤御名義正敷、至当之御趣意を以御糺相成候、然ニ内実先年来 関東之御政事ニ候而も、御不行之御事柄も被為在候故、彼は深御思慮を以、前段御叮嚀之御糺問被成候御訳ニ付、長藩江御尋問之意味、具ニ建言之旨、書取を以閣老衆江御執達可被成候間、其上於浪華御評議被為懸候半哉、併此後何様御変化之御命令被仰発候欵は難得量候得共、何れ之筋不遠相分候儀ニ付、其内可然相心得、重而御沙汰相待候様、紀州殿并井伊侯江御内達之趣、右両藩より承届申候、左候而、先月廿日晦日御糺問之条目、逐一御答申上候事件、猶亦書付を以言上仕候様被仰達、其節凡紙数三拾枚位細字ニ相認、折掛ニして差上候由、然は数ヶ条御答書仕候ニ而も可有御座哉、夫は全御氣密ニ被致、(機密)布流不仕候得共、其場席詰之御徒目付・御小人頭等より、口問書大要之件々、八ヶ条

程御座候由承得、段々術を尽し探索仕候処、御徒目付等より紀州侯藩等江相洩候書取之写入手仕候間、別紙相添為御見合差上申候、將此末之機会は、何分難得伺様御座候、猶追々可申上候得共、即今之形行、先不取敢此段早々御届申上候、以上、

但宍戸・木梨・隊長之者共、申口之事件御書留之写

二通相添差上申候、且巷通は只今紀州藩より手に入、其俣差上申候、

丑十二月廿三日

芸州
広島滞在

土持佐平太

奥掛
書役衆

文書原寸 縦一四・五種 包紙原寸 縦二八種
横 二二〇種 横四一種

一四頁 京都桂右衛門ヨリ側役島津求馬等へ

長州再征之議と薩藩の態度

〔端裏書〕
一御側〕

尚々、此近日之風評ニ閣老御国江使節江相立との咄も有之、出所も不髓、全く風聞欵とも存申候、しかし柴田之咄ニ御上京をも相計候へ、書翰共ニ而不相濟、使節ても差立不申候而へ難叶などの咄も閣老辺江為有之とも申事故、右咄なとより右之説も申ふれ候哉、只承得候迄を虚実ニ拘らず申上候間、左様御汲受可被下候、以上、

一筆致啓上候、余寒殊之外強難堪御座候処、

御両殿様其外様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候、次ニ各様御揃御安寧御精務珍重奉存候、於爰許御邸中至極之静謐ニ而、当分は病疾等も無之仕合ニ御座候、扱拙者ニも不相變元氣、毎勤罷在申候間、乍憚御放念可被下候、長崎表着船以来、折角差急ぎ出帆之賦御座候処、粗夷情承候趣も有之候付、何分難差置、然る折からカラバニも横浜より帰崎之様子承候間、此方江得と承届候へ、巨細情実も相分、新説も可有之申談、御国江嫌疑之廉も致説得候へ、かた／＼可然右之趣共程能断判ニ及候処、彼之

方ニ而茂、大ニ安心相成仕合ニ御座候、右始抹巨細言上
之道、野村宗七(盛秀)罷歸候様申付置候間、最早疾ニ御聞通
罷成候半、就而ハミニストル御国江鳥渡乗込度との事件、
ちと当時柄嫌疑も有之、如何敷存候得共、右之形行申上
越候ハ、御賢慮も可被為在、不容易訳合ニ御座候得共、
漸く夷情も安し置候を、又々破断ニ相成候而ハ込入儀ニ
御座候間、程能き御所置被為在度、しかし折能岩下氏出(分平)
府ニ付、彼之方ニ而断判相成候ハ、其儀ニも不及相濟
可申哉と申談置、右式故無抛茂隙取、甚出帆も及遅引如
何之至御座候得共、難捨置次第ニ御座候間、宜敷御汲取
可被下候、彼之地去十二日出帆之処、冬海ニハ海上も
珍數平和ニ而、十六日八ツ過大坂川口江着船、一日致滯
留、長崎表御払前及過分、十万兩丈御借金相成度、いち
御付人より頻ニ歎願之事情間、留守居江申残、当分ニ
而は随分御請も出来可申との見込故、正月三ヶ日相立申
込候ハ、可然申出候付、其通達置候、右之次第ハ伊地
知歸府之節、御聞取可被下候、十九日爰許到着仕候、扱

被仰付候 御趣意、早速打寄演舌いたし候処、一統異論
も無之、恐入承知仕候間、此段 御安心之為、乍荒増申
上候間、
御聴ニ相達候儀共、宜敷御頼申上候、江戸表詰人数御引
払之一条は、彼之表事實貫徹不致候上、央よりまち／＼
ニ相成、其節致關係候者之内罷下候得は、決而御掛念之
廉も薄く御安心ニも可相成候処、其篇之処行届兼、当方
ニ而委敷承候得は、時機相当之様ニも相聞得申候、此節
上村休介罷下り候由、い細御届申上候半と奉存候、当方
過激之論も成程一応ハ世上一体之事ニ而、よからぬ事乍
時世之議論ニ依て、座中之談ハ為有之筈と被相考、壮士
暴生之枝葉ニ涉り候而ハ、能き事之様唱成し候儀欤と被
察申候、右様之儀ハ折角念を入 御深慮之趣、一統万々
恐入拜伏ニ御座候間、頓と安心いたし候、当地之形勢未
た能く相分兼候得共、得と承候得は、決而掛念之訳も無
之、相隔居候得は、何故一物異論も有之そウニ被思候儀
ニ御座候、御人数引取之儀、当分ニ而ハ日々変態いたし、

全く見留も付兼、当御邸只断然と手を引相守居候処より各藩薩之動静を伺といふ様ニ而、長州御征討ニ付而も、小藩たり共少しも不相応、大ニ策ヲ失し、頻ニ一・会より無謀之策ニ落され候との幕情ニ而、夫故一向幕府之奸策も一円不被相行、却而内乱ニ相及、既ニ一橋を落付候策も良相立候様子、此末必ず混雜を引起し可申案中ニ御座候、過日柴田藤五郎より申出候趣も有之、一橋江小松家御召相成、又会津より頻ニ相会度なと様々手を廻し、小松家ニハ先日取合相成候処、至極相喜ひ合掌して相謝候位かた／＼思ひ合候得は、奸策ニも無之、幕ハ勿論一・会辺ニおゐても策なふして、実ニ尽力を願ひ候形ニ相見得、御両殿様御上京ても有之候得は、三代以前之旧制ニ復、大坂川口迄御出迎ても相成、御信義を御尽し之治論相成居候との説ニ御座候由、其外小藩等ハ追々依頼之筋ニ御座候、右之件々ハ外々よりも申上被成候半と存候間致省略候、夫故御人数之儀ハ今暫時は見合置度、一統之吟味ニ御座候、此段も宜敷御取成置可被下候、肥後も国論相

変、是迄当地詰之留守居植田休兵衛と申者、此度追下され、是迄之周旋甚不宜、只会藩之論を信し候とて大ニ議論相立候様子ニ御座候、此度柳川藩便舟相願、右之者共より承候得は、十時撰津肥後江使節ニ相立、君候と丈之助公子との間、此比何となく情義隔絶之形ニ相見得御和熟被成度、植田を御呼下し候、二ヶ条申込被成候処、疾く二ヶ条共相決居候付、少も掛念ニ及間敷返答為有之由相咄候付、則承合候処、両三日跡打下され候由、かた／＼面白き形勢ニ押移、能き仕組を見可申と笑談いたし候、伊勢殿御暇も先暫時見合被成度、当分之人数被召置候得は、御屋敷取締も小松家外宿より掛而行届兼候訳も御座候付、是も先暫時見合候方可然哉と小松家よりも頻ニ承候間、左様御心得可被下候、私ニも最早御用も無之候得共、来月末方迄致滞留候ハ、長州一条も何とか相分可申、西郷ニも此度ハ暫時成共同伴ニ而罷下度談置候付、かた／＼愛許之模様も見合候儀ニ御座候、芸州表出張之大小監察も両日跡罷帰候由、儘ニ断判之次第も不相分、

専程能為相濟哉之風説ニ御座候得共、又一説ニハ愚弄せられたるとの咄も有之、至極秘事ニいたし候模様ニ御座候間、とても十分ニハ出来申間敷被相察申候、尚爰許之事情委敷申上度御座候得共、着涯末何も能く相貰き不申、乍荒増承得候形行申上置候、恐々謹言、

十二月廿六日

(久武)
桂右衛門

島津求馬様
(久寺)

伊集院左中様

其外様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七二三号文書ノ一部ト同文ナリ、但、忠義公史料ハ十二月六日トスル)

文書原寸 縦一六・三種 横三一七・七種

一四九 御勝手方掛側用人會計報告

慶応元年御勝手方ノ分

一四四九ノ一

(表紙)
「上」

一 当年末向々御払屯高之事、

右は御買物方蔵御臨時方并定式方御払屯高、張紙之通御座候処、此節預札并御貸上錢之内より御入付等相成候付、都而払切相成、左候而、廿九日迄之御払茂右を以皆同御払相濟賦ニ御座候、尤外御蔵々之儀は其向之御金筋を以御払相成候付、不足之訳は無御座候、

一 諸所御雇賃錢御払屯高之事、

右は諸所御雇賃錢、本手之儀は都而前条御買物方蔵より被相渡儀ニ付、此節御渡濟相成、向々ニ而御払屯は無之賦御座候、

一 諸所何そ之御本手、当年末可被相渡金高之事、

右は是迄時々被相渡置候付、当年末別段被相渡候株は無御座候、

一 何そ之御取替等之事、

右は於御当地御取替御返銀不相成候而不叶株々は無御座、大坂・江戸表之儀は、夫々御借入金茂御座候

得共、右株々は於爰元突留、取しらへ出来兼申候、

一年未迄之間、御米其外御買入等之事、

右は御米之儀は別段此涯御買入之儀は無御座、其外

御買入品之儀は、向々より追々申出相成居、右は株

立候品柄逆茂無御座候、

一御蔵々当分在金銀錢之事、

右は向々御在合高取しらへ候処、張紙之通御座候、

左候得共、廿九日迄之出入等茂御座候付、当分之納

合高ニ御座候、

一当年中上納可相成金銀錢之事、

右は向々上納相成候御蔵々相しらへ候処、張紙之場

所は取しらへ申出候得共、其外く御蔵々は当季入

払多端ニ而突留候処難申上段申出候付、追而取しら

へ可申上候、

一大坂下金等之事、

右は大坂表御産物料之内より先般三万両丈御下金申

上置候付、おのつから着金可相成哉、其外より廻着

相成候金筋は無御座候、

一紙札払錢高之事、

右は先般御出来且此節御出来ニ而御払出高、張紙之

通御座候、

右之通御座候、尤長崎御払茂相載申上候様被仰渡候付、

是又張紙之通御座候、此段申上候、以上、

丑十二月廿七日

御勝手方掛

御側御用人

冊子原寸 縦二八・三糶 横二〇・五糶 四枚

一四四九ノ二

本文

一錢四拾老万八千九百三拾老貫九百六拾三文、

金ニして四万六千五百四拾七兩余、

右御臨時方、

一錢三拾老万四千五百五拾老貫八百三拾七文、

金ニして三万四千九百五拾兩余、

式口

合金八万四千四百九拾七兩、

右は御買物方藏御払屯高ニ而、都而御払濟相成、未追

々御払株茂御座候得共、右は追而可申上候、

文書原寸 縦一四・五纏 横四六・七纏

一四四九ノ三

本文

御切封銀
一 式朱金百九拾七切、

金ニして式拾四兩式歩式朱、

右同

一 卷朱銀卷切、

一 半朱三千三百八拾卷枚、

金ニして百五兩式歩式朱ト卷枚、

一 錢拾三万五千七百六貫五拾卷文、

金ニして卷万五千七拾八兩余、

内

現錢五万七千九百式拾卷貫五拾卷文、

札七万七千七百八拾五貫文、

右御物方

一金三千三拾八兩式朱、

一 半朱式拾五万六千四百式拾式枚、

金ニして八千拾三兩三朱、

一 錢拾九万五千拾卷貫三百七拾五文、

金ニして式万千六百六拾七兩余、

内

現錢式万千九百六拾七貫三百七拾五文、

札拾七万三千四拾四貫文、

右当所出物藏、

一 保字判金九兩、

一金式千五百拾四兩式歩、

一 半朱三万百枚、

金ニして九百四拾兩式歩式朱、

一 錢六千九拾九貫百九拾三文、

金ニして六百七拾兩余、

右三島方、

現錢千三百九拾七貫八百拾六文、

札五拾貫文、

右藍玉方、

一金百三拾四兩三步式朱、

一 錢九千九百式拾三貫文、

金ニして千百式兩余、

内

現錢七百式拾三貫文、

札九千式百貫文、

右生産方、

一新錢千七百兩位、

一半朱五千兩位、

右当年中出来、

右鑄物方、

一金六拾七兩卷歩三朱、

一 錢式万六百六貫九百三拾六文、

金ニして式千式百八拾九兩余、

内

現錢六百六貫九百三拾六文、

一金八百九拾四兩式歩、

一 錢千四百四拾七貫八百拾六文、

金ニして百六拾兩余、

内

札式万貫文、

右木之実油澄方、

一 錢老万九拾七貫九百文、

金ニして千弍百三拾兩余、

内

現錢老万六百九拾七貫九百文、

札四百貫文、

右御織物所、

一金八拾四兩老步弍朱、

一 錢四千四百四拾八貫三百六拾四文、

金ニして四百九拾四兩余、

内

現錢四千九拾八貫三百六拾四文、

札弍百五拾貫文、

右寺社方、

一 錢三千九百七拾六貫五百四拾文、

金ニして四百四拾老兩余、

内

現錢千六百四拾六貫五百四拾文、

札弍千三百三拾貫文、

右御製藥方、

右之通向々御藏之納合高ニ御座候、御買物方藏御臨時方并定式方御在金之儀は、日々入払多端ニ而、取しらへ不相整候付、追而払濟之上御届可申上候、

文書原寸 縦一四・五種 横二〇六・八種

一四四九ノ四

本文

一 錢老万六百九拾貫文余、

金ニして千百八拾七兩余、

右御臨時方上納株、

一 銭老万六千五百貫文余、

金ニして千八百三拾三兩余、

右生産方上納株、

一 銭千七百貫文余、

金ニして百八拾八兩余、

右御織物所利銭上納株、

一 銭老万四千貫文余、

金ニして千五百五拾五兩余、

右御製葉方右同、

文書原寸 縦一四・五種 横四六・五種

一四四九ノ五

本文

一 銭五拾老万五千貳百九拾貫文、

金ニして五万七千貳百五拾四兩余、

右千貫文より五貫文迄、預札一昨年より出来払出相成

居候高、

一 銭八拾三万六千四百貫文、

金ニして九万貳千九百三拾三兩余、

右此節貳百貫文百貫文五拾貫文四貫文三貫文預札出来

候而御払出之高、

合金拾五万百八拾七兩余、

外ニ

沢原札、

一 銭七万貫文、

金ニして七千七百七拾七兩余、

右拾貫文貳拾貫文三拾貫文札老行之通出来払出相成居

候、

式口

合金拾五万七千九百六拾四兩、

文書原寸 縦一四・五種 横七五・五種

一四四九ノ六

本文

長崎表御弘前、

一金六万九千五百兩程、

右当年中御弘渡可相成員數候由相達居候、

一金拾万式千六百式拾兩余、

右西洋御調文品代高二而、品々相届次第御弘渡之員數

高二而御座候段相達候、

右之通先便差引総書を以、在勤御付人より申越置候間、

取しらへ申上候、以上、

文書原寸 縦一四・五種 横四一・二種

二四〇 本田弥右衛門中村新兵衛ヨリ藩庁へノ届書

人吉藩内訂事件ニ就キ

当月四日求摩着之上、態と御家老之内江致面会度、夫

々案内申入候処、同七日御家老菊地七郎左衛門面会ニ

付、表通御口上致演説候次第は、此内御使者被進候処、

右之御礼且

御両殿様御上京之儀被成御伝承御尋旁として、先達而御使者鹿兒島江被差越、被入御念候次第辱被思召候、

又其節別段御依頼被仰越候、方今之世態切迫罷成候付

而は、御当藩之儀全体御小藩、御人少ニ而迎も御独立難

被為出来訳故、何篇御指揮を被受、進退を被究度と之

趣被成御承達、方今天下之形勢ニ而は、末何れ之筋と

も御見留も不被為着事故、万端御互ニ無御等閑、追々

被仰談度と之御内慮ニ而御座候段被仰進候、右形行夫

々御披露宜頼存候段致演説、且又御当藩變動之大略は

被成御聞通、然処彼之米良小源次・米良造酒一条ニ付、

先達而御直書も相達、右ニ付而は

御両殿様深思召之訳被為在、態と御返書ニ不被為及、

御口上御直ニ申上候様御内密奉命之趣意、私共兩人被

差遣候付、明日御都合宜候へ、越前守様江拜謁仕度

候付、可然周旋頼入候段申述候処、此内より少々御不

例ニ而差而之御事ニは無之候得共、明日被成御逢候儀

は何様可有御座哉と相考候、併何分相伺、追而御返事

可相成と之事候処、翌日御用人山田造酒藏御使者ニ而御口上之趣は、

御両殿様より御直之御口上被仰越候由、依而早速被成御対面被成御承知度思召候得共、此間より寒氣ニ御痛、其上御持病之御痔疾御差起ニ而御座難被為出来、御快氣之程合分兼、右ニ付長々御留置被成候而は退屈ニも可有之、御氣之毒ニ被思召、就而は御門葉相良美作儀は、御政事向無大小と御相談相成候事故、同人并前件七郎左衛門致承知候ハ、兩人より可被成御聞取、左候得は、御直被成御承知候も同前故、其通候ハ、早目致弁別御仕合之段致承知候付、取次ニ而申上候而相濟事候得は、最初より致其通答候得共、前件通別段御隠密之御趣意を奉居候訳故、拜謁之上ならてハ難申上候付、幾日ニ而も致滞在、御快氣奉待候様可仕、尤御内輪ニ而之拜謁被仰付、御手数数ニ不相掛様奉願度、第一御趣意致貫徹候儀肝要故、夫等之趣を以、猶又可然周旋頼入候段申述候処、於其儀は形行可致披露と之事候

処、同十一日又造酒藏御使者ニ而御口達之趣は、御所勞御平快ニ而は無御座候得共、少々御快方ニ而、

御両殿様より被仰越候御口上之事情ハ、早目被成御承知度思召候付、明後十三日押而可被成御対面候、依而当日登城ニ付而は、刻限等は案内可致と之事ニ而、且其折造酒藏より内々承候は、当藩之儀御案内通山国ニ而、役々世態柄弁薄、古格ニ泥居候事而已ニ而、勿論他国使者等江被成御対面候先例も無之事情付、夫々役々席詰等之手数相省候儀出来兼候氣味合も有之、尤越前様未御若年ニ而御即答被為及候訳ニも参兼可申、依而美作・七郎左衛門御側近致侍座賦候付、其辺之処は宜汲受具候様打明承候趣も有之候付、委曲致承知、最初より御即答致承知候賦ニ無之、御趣意被成御聞届候ハ、御熟考之上、追而御返事致承知候含罷在、左候而、於御前申上候上は、猶巨細之儀は右兩人江も篤と致演説度申聞候処、於其儀は別而都合も可宜と之事ニ御座候、

一同十三日登城之刻限相待居候処、九ッ過案内有之候付、私共ニは改服ニ而家来下人召列手鑑為持候而致登城候処、辻番所其外諸所幕張等ニ而、御本門開扉盛砂飾丹荷等其外掃除旁行届、万事御手厚御会积ニ而、表御玄喚は御焼失後未御出来無之、内御玄喚より罷出候処、御玄喚江は拾人余平服上下ニ而相詰居、同所より物頭先立ニ而広間江罷通候処、家柄之人々と相見得、同様平服ニ而三拾人余相詰居、夫より扣所江案内ニ而扣居候処、御茶菓子等被成下候、無程相良美作・菊地七郎左衛門面会挨拶有之、左候而、御対面之御座席御出座、前以山田造酒藏案内ニ而致拜見置候、暫いたし御出座之由案内有之罷出候処、三之間江は物頭并御近習人数数拾人列座、同間ニおゐて脇差を脱、二之間江造酒藏義勳ニ而、中央ニ而御礼申上候処、造酒藏より致奏者候、同間江は御用人六七人席詰ニ而候、越前守様ニは御上段主居ニ御出座、御後之方ニ少曳下り、美作・七郎左衛門相詰居候、是江と御沙汰有之候付、上段座末客居

横付ニ致着座候処、御挨拶之趣は寒氣之時分遠路遙ニ嘸太儀ニ而候半、先達而より可致対面之処、持病差起及延引退屈ニ而候半、失礼之至と御沙汰有之、左候而、此内御指揮筋之儀御願申上越候処、此節被仰越趣難有致承知候、扇藩之上宜申上候様と之御口上ニ而御座候、一右御口上畢而、七郎左衛門より御側詰人数払退、私共江御近可被成御寄と致会积候付、兩人一同御膝元近ク罷出

御両殿様より御直命致承知候筋を以致演説候趣は、御当藩變動之事件は被成御聞通、御刑法之儀は夫々御家法も可有之、処置緩急之処は時機事柄ニ依候事ニ而、此節之御処置は御当然、実ニ御英談と被成御遠察候、然ニ彼之米良小源次・米良造酒一条ニ付、先達而御直書も相達候処、両士儀ニ付而は深思召之御旨被為在、御書面ニ而は碎兼候意味合も御座候付、御趣意細々被仰合、私共差越拜調之上申上候様と之御事御座候、子細は両士為討手長崎江人数御差向候処、両士は様子承

得、何様之無調法有之候歟不存当候得共、討手ニ被遣程之犯罪心覚無之、決而悪意之者共致亡命、両士江被渡置候御用金謀取巧ニ而、君命と相偽差越候儀ニ而候半と、別而不審敷相考、段々手を付、御当藩之模様承合候処、松本了一郎等御成敗相成候由ニ而、両士も討手被遣候儀、上意無相違相見得、就而は了一郎等何様之儀相企候歟不相分候得共、子細も不存ニむさ／＼被殺候而は被命置候御用筋且太分之御用金も被渡置、異人曳合之御注文品も有之、致約諾置候旁之儀、半途ニして水之泡と相成候儀、為国家死後之遺恨ニも有之、依而一命を惜脱走之所存は更ニ無之候得共、一旦嫌疑を避、野心無之旨致申開度、夫迄之間、かくまひ呉候様、尤御用金も無異儀官庫江相違候様仕度と之由ニ而、其御弥右衛門致出崎居候処、縫り来心底打明承実意其形相見得、窮鳥懐ニ入候訳ニ而難見放は於義ニ不被忍時機故、任依頼其場夫成邸中江かくまひ置、折柄蒸氣船便有之、鹿兒島江送越形行

御両殿様達御聴候上、猶又両士心事之程篤と承候処、前後勘考ニおよひ候得共、犯重科候覚毛頭無之、右ニ付長々御厄害罷成候訳無之、自然御当藩より御掛合も御座候ハ、御曳渡被下候而糺明相成候様致周旋可呉、左候ハ、野心無之旨申開いたし、其上ニ而君意ニ不叶儀有之候而被行死刑候とも聊遺恨無之、甘んじて死ニ就候所存ニ而、且御用金も私ニ可取扱ものニ無之候付、無相違送越呉候様と之事ニ而、旁之形行達御聴候処、其身共一己之申分ニ而候得共、何分御不便ニ被思召、右ニ付第一御当藩之御為ニと深思召之訳は、両士も了一郎等同時ニ御成敗相成候事ならハ、訳も無御座候得共、折節留主之事ニ而、今更被成御誅罰候而も御無益ニ而、仮令顯然たる証拠有之、同類無相違候とも最早外々之者共御誅罰相成候上は、何事も夫限ニ而、致悔悟候は不承届候而も差知候事ニ而、尤長崎表之始末も前件通ニ而脱走ニ似て脱走ニ無之、勿論右様之儀は、第一公武之御聞得も如何ニ而、自然御尋問ニも相

成候節は、一旦之事と御申取ニも可相成筈候得共、兩士今更被処敵刑候而は、又事も新敷相成、訳柄不存者は、畢竟御家政向不被為届処より、右時機之儀致到来候杯と申触候も不被計、左候得は、御外聞は素より公武之御不都合ニも罷成候半、旁よからん御事ニ而、殊ニ兩士は曆々(歴)之者ニ而、相応之職録(職)も被宛行候者共之由、当世態柄自然事到来之節は、一方之大將をも可被命身柄之者共ニ而可有之、万卒は易得一将は難得訳御座候、依而時勢非常出格之思召を以、寛大之御処置相成候而は何様可有之哉、何そ兩士御最眞ニ而御処置振御無理と被思召候儀ニ而は曾而無之、寛大之御処置相成候ハ、兩士は活命之御仁徳ニ致感服、改而無二之誠忠を尽候半、何事も御当藩御万全之御為と被思召、被仰出候御趣意、右通ニ而御座候間、篤と被為涉御勸考候上、何分思召之程承知仕度申上候処、当藩のためニと被思召被仰越候御趣意御尤ニ而、深々難有被存上候、篤と御思慮之上、追而何分御返事可被成と之御事

故、猶細詳之儀は美作・七郎左衛門江も致談判候而は、何様可有御座哉申上候処、其通候得は、別而御仕合思召候と之御事御座候、夫限ニ而御前相下り候、一右相濟、於扣席美作・七郎左衛門兩人江猶又前文同意を以、彼方御為と申趣意ニ而、古今之例を引、或は譬を取り、寛大之御処置相成度、種々利害得失を致説得候処、当藩のためと被思召被仰越候御趣意難有、おのつから越前守様思召も可被為在と計之口儀ニ而、外ニ可否之応答も無之、夫成退行、趣意染々と貫徹之程合無覚束様有之候付、山田造酒藏を相招、猶又同意申上候上、兩士御処置振是迄御治定之訳、且罪状之糸口如何様之処より致発覚候哉尋掛候処、右は松本了一郎致発言候、顯然たる証抛有之、依而兩士は御受取之上、夫々糺明之上被処死刑、尤長崎より致脱走候付而は、家系断絶被仰付候賦、乍去長崎表之次第、今日御演説之趣ニ而は致脱走候訳とも不相見得、左候得は、家系ニは無御構筋ニも罷成候半、御治定之形行右通候処、

此節

御兩殿様より被仰遣候御趣意有之候付而は、越前守様如何思召候哉、未窺知候得共、不容易罪状之者共故、何も無御咎日本通役職被召仕候而は、人心安堵も致間敷、勿論思召も其通ニは参兼候半と之口儀ニ付、御兩殿様思召左様之御趣意ニ而は全無之、於御前も申上置候通、御刑法之事は御家法も可有之筈故、此通ニ被成度と被成御差究被仰遣候訳ニ無之、乍然曆々之者を御糺明之儀は宜有之間敷、両士は御糺明相成候得は本望と相見得候得共、若御糺明之上申分相立候儀有之候ハ、又外ニ差障之廉出来、御処置難被成儀出来も難計、又顯然たる証拠を以御糺明ニ而、申開出来兼候ハ、おのつから被処重刑筈ニ候、依而態と不被成御糺明候ハ、其罪は疑敷輕キ訳ニ而候間、非常出格之思召を以、寛大之御処置相成度と之御趣意は、既往之事は無御追糺、死刑一等を被有候而、御刑法之等級は不相分候得共、罫入と欵蟄居又は慎と欵、死刑より一

等下之御刑法可有之候付、其刑ニ被処候而、折を以御赦等被仰付候ハ、御仁徳ニ致感化、無ニ之誠忠を相励候期も御座候半と之思召ニ而候と申述候処、左様之御趣意ニ而候哉、押返承度申ニ付同意、再度申述候処致承知候由ニ而退行、稍暫いたし、造酒蔵・美作を致同道参候而、先程承候形行今一往、美作江御申聞可給と申ニ付同意、細々申述候処、夫等之御趣意候ハ、越前守様如何思召候哉不被計候得共、御趣意御汲受宜様ニ強而可申上と之事候付、何事も混雜之涯は早人心致安堵候儀肝要ニ而、両士は何も無御咎日本之通役職被為復候而は、御成敗相成候了一郎等之親族共気受ニも相拘、且又御一藩中之沸騰ニも罷成候而は却而如何ニ付、一命を被有度と之御趣意、前件通之旨篤と申述候処、致落着候形ニ而曳取候上、又々美作・七郎左衛門同道ニ而参、七郎左衛門よりも美作承候趣致承知難有訳ニ而、今夜則越前守様江篤と形行申上候様可致と之事ニ而、解立候向ニ相見得申候、左候而、御料理被成下

管候得共、却而退屈ニも可有之候付、今夜於旅宿可被成下と之御挨拶致承知、日入過致退出候処、夜入造酒蔵御使者ニ而、寒氣之時分今昼は旁太儀と被思召候、御返事之儀は追而可被仰達と之御事ニ而、造酒蔵其節之内話ニ何事も

御両殿様より被仰進候御趣意通ニ八九は可參と之口儀ニ御座候、其夜於旅宿御料理被成下候、

一同十五日旅宿江七郎左衛門御使者ニ而、御口上演説之趣は、米良小源次・米良造酒事可被処死刑者共候得共、御両殿様思召之程細々被仰越候趣、深々御汲受被成、一々御尤ニ而難有被成御承知候、依而御趣意無御違背両士は不被及御糺明、死刑一等を被有家系等之儀も無御構、寛大之御処置相成候思召ニ而御座候間、形行御直ニ被成御返事候筋ニ相心得、

御両殿様江宜御披露仕候様と之御口上演説ニ而御座候付、

御両殿様御趣意致貫徹、寛大之御処置相成候儀、第一

御当藩之御美事ニ而、御使者相勤候私共ニ至り、大慶と奉存候段致挨拶、右ニ付被宥死刑候上は、何様之刑ニ被処候御賦候哉、帰藩之上

御両殿様江形行申上候節、御処置振之処承届候哉と御尋相成候は案中故、内分致承知度旨申述候処、其儀は七郎左衛門一存ニ而難致返事、同席中申談、且越前守様江も相伺、追而何分可相答と之事御座候、然処翌日前件造酒蔵を以承候は、両士御受取之上は此涯揚屋江被留置候賦之段承候付、揚屋江被留置候刑法承候処、右は士之格式不被召放者を被留置候事ニ而、座囲江召入候も同前、尤衣食夜具類宿許より差統候儀不苦、左候而、日教を經候上宿許江被差返、在宿被仰付置、又年月を越候上、世間徘徊被差免、又其後城内徘徊をも被差免、追々は家格相当之御奉公も仕候様被仰付候儀共、御慶事又は御年回等之節、時々御赦被仰付候賦ニ而、差当前件通御処置相成候儀は、人心落着之ためと思召候訳ニ御座候段承届申候、

一右ニ付、兩士儀は当年中御曳渡相成候儀を致周旋具候様と之事故、前条旁之始末

御兩殿様達御聽候上、御送越相成候得は、最早無余日事故、迎も年内ニは運兼候半と申述候処、於其儀は、年頭初ニは祝式事等も有之、右様之儀は御互ニ可諱事故、正月十五日過候上、御曳渡被下候得は仕合故、乍御厄害其内今通被召置被下度承候付、帰藩之上夫々相伺、何分可及御掛合相答置候、尤彼方より受取方ニ可参との趣も承候得共、決而護送ハ仰付候儀ニ可有之存候付、其通被成御心得可然段申述候処、左候ハ、重畳乍御面働前以御掛合被下候ハ、御国は差入口之大畑村迄役々出張居、同所ニおゐて致受取方度、尤曆々之者共故、駕籠取仕立致持参置候而、不目立様可取計と之事御座候、

一兩士致所持居候彼方御用金之儀、其假致持参、形行を以役筋江曳渡申候処、相改員教書付候日記も入付有之、相違無之由ニ而、受取書差遣候付、先達而差上置申候、

右之通御座候、以上、

丑十二月廿八日

御船奉行
本田弥右衛門
御裁許掛見習
中村新兵衛

文書原寸 縦一四・二種 横一三〇二種

一三三 長州再征ニ付奇兵隊長河瀬安四郎等殊死血戦ノ趣意書

松平越前守ノ長州再征不可論ト紀州藩栗山俊平等ノ再征逐行論及長州処分ノ朝議

以上四通一冊

〔表紙〕
上

一四五ノ一
今般毛利大膳父子御征伐として

御進発被仰出候付、私儀大坂表ニ而御待受仕度奉存候処、願之通被 仰出難有仕合奉存候、昨秋以来之京説を以及愚考候処、大膳父子降服謝罪之次第ハ、尾州前大納言殿

より委細被及言上候通ニ而、此上ハ大膳父子を以二州之御所置御裁決有之御儀と相心得居候処、今般之被仰出ニ而は、大膳父子悔悟之儀茂無之、其上不容易企を達台聽候趣ニ而、亦復御征伐として、御進発被仰出候儀、如何之御次第ニ被為在候哉難奉計御座候、元来父子之謹責を始^{本ノマ}之未^{本ノマ}敵重ニ過、一同死守之勢と相成候而は不容易事柄ニ而、天下之御為不可然候付、父子重疊服罪之処を以降命相待罷在候条々は、前大納言殿より具ニ被申上候事ニ御座候、然処夫等之筋は一切御取扱も無之、再発之趣を以御進発ニ被為及候儀、御定算可被為在御儀とハ奉存候得共、昨年ノ之処式百年来未曾有之御大儀も御威光を以不及、干戈鎮靜ニ茂相成候姿ニ而朝野共漸安堵ニ歸し候処、又々大兵を被動候儀は天下之乱階ニ而諸大名之困窮、万民之怨嗟、誠ニ以不一形方共ニ而、此上如何成不側之変可生哉も難計、乍恐

御家之御為ニ茂相成間敷欵と不堪恐懼奉存候、夫ニ付尚又種々尺愚考候処、畢竟御上坂之上、速ニ御上洛大膳

父子二州之御所置 叡慮御伺、公武御合体之御裁決ニ相成候得共、不挙干戈大膳始二州之士民ニ至迄も如何様之御謹責共無異儀、其受可仕は勿論ニ而、天下之人心茂請定ニ至可申は必然之儀と奉存候、昨年之御機会ニ候得は、迅速

御征伐御成功之上 御上洛茂御相当ニ奉存候得共、当時勢ニ而ハ 朝廷より先達而以来毎々 御上洛之御沙汰も被為在候哉奉存候承り候得は、直ニ大坂より 御進発被為在候而は御都合如何ト奉存候、何事茂 叡慮御伺之上ならてハ 朝廷之思召は素より、天下之囑目と申防長鎮^{本ノマ}庄之御運ひ茂如何可相成哉と奉存候、呉々茂御輕拳御例不被為在、尚又再度叛状之事実御糺弾之上、

朝命を被奉、天下声言して共々御征伐被為在候而、御成功之程茂万々無疑可為御儀と奉存候、実ニ此度之儀は、御名義之正否 御家之御興廢と関係仕、至重至大之御儀と奉存候付、冒^{本ノマ}万死奉言上候、尚厚御廟議被成下様、伏而奉至願候、誠々恐惶頓首謹言、

松平越前守^(茂昭)

一四五ノ二

一去夏以来、大樹公為御征長大坂迄御進発被遊候処、天下之形勢ニ因り候事歟、先御滞留と相成、其後毎々期限等相違、人心狐疑を生し、遂ニ因循と相成、天下之大軍を以誰か力を尽し可申、此方様ニ而御尽力と申は長防御処置、禍之根を絶再び萌蘗之憂無之処迄推詰候儀ニ御座候、其禍之根を絶候は、彼之兩國之内一國を削り、大膳父子江戸隠居、家族も江戸江御召登せ相成候ハ、萌蘗憂なきのミならず、他日諸侯之家族江戸住居復古之種とも可相成、旁御中興之際、御大切之場合と奉存候、此儀固より微賤私輩不奉申上候とも、在京之御方々には、疾より御廟算相立居候半と奉存候得共、又一ツ之御大患御座候、公武御一和之廉御立ニ相成候、以来何事も京師之思召を御遵奉被遊候儀故、今度之御一大事も京師御奏聞を曆^(歴)、京師ニ而故障出来

被遊候得は、直ニ天下之形勢基ニ随ひ転遷可仕儀ニ御座候、夫と申も今日敵境江臨候諸藩、日々御打入之事と既ニ相待、士氣大ニ振ひ候を以て可見事ニ御座候、扱長州御征伐之儀、最初は姦徒処々ニ潜伏仕、邪説を以て人心を惑し候故、名義曖昧たる姿も御座候得共、今日ニ至り候てハ、三才之童子も明白ニ知り候儀ニ而、実ニ好機會不可失之秋ニ御座候、又昨年尾公御惣督之節、三魁を刎、逆徒夫々御所置ニ成、夫ニ而彼伏罪相立、今度之御再征名義不相立坏と相唱候輩も有之候得共、是は大ニ心得違ニて、彼之十罪其一を挙ても、滅國は至当之儀ニ御座候、況や其罪盈候、彼之伏罪後之処為、何を以二百余日徒らに日月を送候儀、古ニなき所ニ御座候、申上候は恐入候儀ニ御座候得共、必竟御廟堂御基本不被為立候より、斯信義を天下ニ御失ひ被遊候事と奉存候、今日ニ至ては、幕府之御因循は常之様ニ相心得候様成行候てハ、実ニ長大息之至ニ御座候、是ニてハ天下ニ号令ハ迎も御行届申間敷、徳川御家日々

御威光稜夷仕候は眼前ニ御座候、乍併御譜代は勿論外様恩顧之大小名は、何卒して幕府復古可然様致方存慮は十分ニ御座候、去ながら何分御基本不被為立候侍てハ、手を束候事と奉存候、扱天下之形勢は上ニ因候儀ニ而、上之基本御立候ハ、天下ニ付候哉、尾公惣督之節、彼伏罪之廉略相立、御引弘相成候すら、今日御再征と相成候てハ、天下之笑を御招ニ相成候儀茂有之、今度此方様ニ而御惣督ニ被為在候て、何故なく無事ニ引弘候様相成候而は、乍恐御三藩は無之儀も同前、天下之笑如何可有之、誠ニ残念之至ニ御座候、始終無事ニ相濟候儀は誠ニ可好事ニて、真之無事と可申事ニ御座候得共、一旦は無事ニ相濟候ても、他日大害を生し候ハ、前之無事所謂因循姑息と申者ニ御座候、昨年無事ニ相濟候崇りニて、今日御再征と相成り、今年も無事ニ相濟、来年又々御再討之事起り候ハ、年々歳々ニて、何日欽果へく候とも不相知様成行候てハ、実ニ天下之事、是迄も大息仕り且御征討之事ニ付、数拾

万之金を米を費し、又下は輕輩ニ至る迄、妻子ニ別れ^{〔託〕}後事候を取定め、死を覚悟仕居残り之民又夥敷賦役を勤メ、実ニ天下之大事此過るハ無御座候、実ニ兒戲之様なる事ニて今度引取候而は、何之面皮ニて天下国人ニ顔を合候や、他日事有時は、何之辭有て諸侯ニ令し、諸侯も又其国人を可仕令、是ら之所思召候得は、兒戲之様成事ニてハ決して不相濟儀と奉存候、伏惟、大藩御懿親と申、御三藩之訳柄ニも御惣督とも被為在候ハ、飽迄も御尽力被為在度奉存候、此方様ニて御尽力なくしてハ御廟算通りニ參り兼候欤とも懸念仕候、若哉左様之儀も御座候ハ、此方様ニて盟主と相成り、諸藩周旋方之儀、論を一定為致、其一定之論を以、孰レ江踏出し、^{〔二条齊敬〕}関白殿下迄も申立候様仕候ハ、如何ニも異論打破り貫徹不仕儀有之間敷と奉存候、一体天下今日ニ至り候ハ、人心夫々区別致し、諸藩之論一定不仕、人々私見ヲ以建白仕候ニ付、却て上之御惑相成、何之功ニも不相成、夫迎も盟主たる者無之故、左様之

処ニ至り候節、此方様より盟主ニ相成り、論一定為致候ハ、孰レも違背不仕、此一定論を推し候ハ、公武之御間、必御一和之実相立、何事も速ニ判ひ相付可申、所謂諸藩周旋と申者斯御座候而、実用ニ相成可申此条計リニても、幕府江之御忠節一廉相立可申、況や前条申上候名義相立可申、天下之大計相立可申、幕府を助ケ御中興盛業振ひ候は此一挙ニ御座候、芻蕘之言御斟酌被成下候ハ、難有仕合奉存候、敢て日々死罪相待奉建白候、恐惶謹言、

正月

紀州藩

栗山俊平

右同

宮川六郎

一四五ノ三

正月廿二日公武惣御参内ニ而左之通

(敬親、広封)

毛利大膳父子家政向不行届、家来共一昨年七月父子黒印

之軍令状持参、京都江乱入、奉対

禁闕及砲発候段、不恐 天朝所業不屈至極ニ付、大膳可処敵科処、益田右衛門介・福原越後・国司信濃等於出先条々之主意取失、非礼非義之及暴動ニ付、三人斬首之上備実檢并参謀之者共夫々加誅戮、任用失人之段深恐入候、悔悟伏罪罷在候上、自判之書を以申立、猶其後疑敷件々相聞候付、永井主水正・戸川鉦三郎・松野孫八郎差遣相^(尚志)糾候処、弥恭順謹鎮罷在候趣ニ付、於大膳父子朝敵之罪^(安慶)名は相除候、乍去畢竟不明、統御之道を失、家来之者抱朝敵之名候段、其科不輕、雖然祖先以来之忠勤を思ひ、格別寛大之主意を以拾万石取揚、大膳は塾居隠居、長門は永塾居、家督之儀は可然者相撰可申付候、右衛門介・越後・信濃家名之儀ハ永世可為断絶、此段遂奏聞候、以上、

正月

一四五ノ四

昨年伏罪之儀、御沙汰之趣奉待居候処、何之主命茂無之、

大樹公御再討之御事、一向其趣意難相弁、 鞞下焦土之

長州奇兵隊頭

罪は、既ニ三臣を始、參謀之者悉極刑ニ被行、君臣父子

河瀬安四郎(真孝)

は旧秋以来今以長髮之假罷在、当夏人心不居合ニ付交有

井原小七郎

之、右鎮撫之為山口江出張候得共、破却之城跡を取建籠

入江嘉伝次(野村燭)

城と申ニは無之、近村湯田之別荘ニ罷在而已、外夷私ニ

和親杯と申儀は是又一向聞さる事也、既ニ此度開港

冊子原寸 縦二五・七糎 横一九糎 一〇枚

勅許有之迄ハ、幕府ニおひても同様和親私之交易也、弊

藩儀好而之通商は無之、去秋 鞞下騒乱後無間外夷襲来、

西郷吉之助ヨリ在藩ノ重役へ(蓑田伝兵衛?)

長州再征ノ件

幕府征討之御命、内外狹討之姿ニ付、無拋和親を結び、

別啓、長州談判として永井主水正等広島表江出張いたし、

食料薪水を送而已、別ニ通商致ニは無之、又奇兵隊之者

近日帰坂ニ相成候処、如何之応接ニ及候哉、至極秘事ニ

共渡洋致ストいへ共、只金を以武器類求候は兼而従来御

いたし居候故、頓と不相分、長州より書取を以申出候趣

沙汰之通、国元武備充実之外無之、不容易企有之杯とは

も有之由ニ被相聞候得共、不相洩段々承候へハ、永井等此

如何之儀ニ候哉、伏罪謹慎之者を無解ニ御攻伐ニ付てハ、

度之談判ハ、大ニ長人より愚弄せられ候世評ニ御座候、

元来君臣之幕府ニ而是無之、位階之高下ニよるといへと

夫故秘密ニいたす訳欤とも申事ニ御座候、いつれ追々相

も、天下名族之家柄として、おめくくと(虫損)致様無之、只

分可申候間、後便より委敷可申上、俗説紛々御座候得共、

死を一戦決するの外無之、依之国内之者、上士太夫、下

槌成論も不承、又々永井等も広島表江出張可致との趣ニ

草野之婦人ニ至る迄、挙て一戦を待而已也、

被相聞申候間、此度之談判ハ決而不相調義ハ相違無之、

此談判も又々長引候義ハ無疑事ニ御座候、近来細川之議

論も相変、上田休兵衛・林新九郎之兩人ハ国元江被打下、

(浅井)

井口呈助と申者交代として被差出、此人ハ余程着実之人

ニ而御座候由、上田第一会津之手先ニ而御座候処、國中

ニおひて義論相起、右之次第ニ及候由御座候、細川正義

ニ立替候ハ、頓と頼方無之ものと相成可申義ニ御座候、

人数繰出し等之義も、細川ハ御断相成候由、柳川も同断

之向ニ被相聞申候、右両藩ハ当月十日限ニハ先手繰出し

候義ハ御達御座候由、細川さへ右次第之事候得は、外藩

ハ決而動き申間敷、可討勢も無之、戦ハ出来不申事故、

此度之再討と申ハ、橋・会より主張いたし、此時機ニ及

候次第、長江説込却て長を懐込候趣と被相聞申候、実ニ

幕人恐しき術策、驚計ニ御座候、以上、

文書原寸 縦一六糎 横一五七・八糎

一〇三 御船奉行届書船頭水手切米払増減

文久三年九月ヨリ慶応元年八月ニ至ル

(表紙) 一元治元年子九月より慶応元年丑八月迄

御船頭・脇船頭・仮脇船頭役料米并船頭水手御

切米払増減総

御船奉行

一米四百七拾四石式斗三升五合三勺式才、

右亥九月より子八月迄、

一米七百貳拾壹石九升五合八勺、

内

真米三百五拾壹石四斗九升五合八勺、

赤米三百六拾九石六斗、

右子九月より丑八月迄、

差引

米貳百四拾六石八斗六升四勺八才、

右巷行前仕切より払相増申候、

外ニ

真米八斗式升八合五勺式才、

右宍行御船手船頭・水手上納前有之、差引上納被
仰付候間引、

右は御船頭より脇船頭・仮脇船頭役料米并船頭・水手
御切米払、当年分増減差引仕申候処、乍大概右之通御
座候、此段申上候、以上、

丑十二月

御船奉行

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七三六号
文書下同文ナリ)

冊子原寸 縦二八・七種 横二種 三枚

一〇三三 文久三年ヨリ表方御蔵入現米高増減帳

(表紙)
「元治元年子秋分

現高増減帳

表方

御代官所」

亥八月より子七月迄

現高拾壹万六千八百六拾六石五斗四升壹合式勺、

子八月より丑七月迄

現高拾壹万七千式拾八石五斗五升五合五勺五才、

内

百六拾式石壹升四合三勺五才、

右宍行子年休地等より起地相成候ニ付増ス、

右は表方御蔵入現高増減差引仕候処、右之通御座候間、
此段申上候、以上、

丑十二月

表方
御代官

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七三五号
文書下同文ナリ)

冊子原寸 縦二八・三種 横二種 三枚

一〇三三 大原重徳卿ヨリ島津中将公へ

長州再征將軍進発ニ付テ久光公ノ上京ヲ促ス

(包紙ウツ書)
「島津中将殿 重徳

緘

(表紙)
「愚忠」

〔^{付箋}〕
「若又進発々々ト鳴シ置、臨期所勞ト欵ニテ進発上洛セサル
時ハ、幕府ノ奸吏正サレ候コトニ大藩滞京ナレハ御都合ニ
ナリ候也」

関東之令ニ長州征伐ト云々、征伐之不可ハ言ニ不及コト
也、但シ内存ノ趣風説アリ、風説ノ真偽ハ不分明ナレト
モ、幕府從來之所置ヲ以テ量察スルニ、近比別シテ大凡
朝命ニ応シタルコトナシ、此レヲ以テ考フレハ、道路ノ
風説モ隅言ニ非ル欵、但シ隅言ニモセヨ、朝廷ニテ其
御心得方在セラレズテハ叶ハヌコト也、然ルニ恐レ多キ
コトハ云迄モナケレドモ、恥モ云ハネバ理ガ聞ヘヌ類ニ
テ、包シテ居テハ却テ御為ナラズ、止ヲ得ズ申述ル也、
朝廷、徳川氏ニ天下ノ政事ヲ御委任、此方何事ヲモ凡申
シノ俛ニ 勅許ニナル遊シ来リニテ、御否ミ遊シタル事
凡ナシ、幕府モ申シ乞フ事ハ其俛 勅許ノ事ト思ヒ込テ
居ル仕来リ也、夫故ニ外夷ノ事モ申乞ヘバ、何レ 御免
ニ成事ト心得、堀田備中守上京シテ相伺タル処、^(正體) 皇國
ノ御大事タル故ニ、如何ニシテモ 勅許遊サレズ、夫よ

リシテ、段々行違トナリ 此間ニ種々有レトモ、既ニ別紙ノ様
事長ケレバ略ス
ニ風説ス、道路ノ流言採ルベキニ非ザレトモ、從來ヲ以
テ考フレバ虚言トモ思ハレズ、ヨシヤ虚言ニモセヨ、捨
置ルベキニ非ザレトモ、彼御仕来リノ上ニ、事ニハ馴レ
玉ハズ、ヤ、モスレバ幕ノ勢焰ニ御恐レニテ、柔弱ノ御
評議ニ落入ル事ニテ、タマ／＼確乎タル御議論有トモ、
暴説杯ト御採用ニ成兼、有志ノ徒切齒扼腕スルコト也、
然ルニ此度ノ模様ハ、先日 二月廿一日 関白殿ノ御糺問ニ老中
衆当席ニテハ、至当ノ仰故ニ一言ノ答ヘ申上様モナク、
恐入テ退シナレトモ 既ニ休所ニテ関白殿ハ、荒々、内心如何有
敷テイカヌト云シト也
リシニヤ 幕府恩顧ノ者カ国事掛リノ御方ノ門ニ張紙シタルニ、豊州カ
又イカナル大奸ヲ企候哉モ難計、過慮ノ余リニ認シニト云々
此度ノ風説思ヒ、其砌リ早々帰府ニテ、此趣大樹ニ申入ヨト
合ハザル也、
命ゼラレタルニ、其御請返答モ一言モナクシテ、進発 御
満足ニ 思召ストノコトニ、御請ヲ申上タルハ如何ノコ
トナラズヤ、左スレバ何様ノ工ミ有モ知ヘカラザルコト
故ニ、弥以 朝廷ニテ此度ノ御心積リハ格別ニ御評議ヲ
尺サレネバナラヌ御コト也、然レハ愚蒙ノ小臣ト雖トモ、

急度千万思慮ヲ尽シ、獻言モ致スベキナレトモ、此度ノ事件、深ク思慮ヲ回ラセハ、中々容易ナラザル模様ニテ浅慮ノ及ブ処ニコレ無ク、然レトモ黙止ニ堪ズ、情思フニ、朝廷ニ御後楯サヘ有レバ何ゾ恐れ玉ハンヤ、此後楯ト云ハ則外藩衆ノ上京ニテ、大樹公上洛ノ砌、尊奉勤王ノ道ヲ主張セラレ候ハ、幕府何ゾ手ヲ出スコトヲ得ンヤ、然レバ偏ニ大祿ノ外藩衆上京ヲ希フ所也一藩ニテモ、多キガヨシ

然レバ大祿外藩衆ヲ 召寄ラレ候テ然ルベキ処ナレトモ

(付巻)一此度ケ様ノ御 朝議ト云ニ非ス、御平常ヲ以奉量察処、ケ

様ナル御模様故ニ、ケ様ニ書取リシ也、此度御 朝議ケ様

ト思フベカラズ

朝命ニテ召トナリテハ、何トノフ幕府ヲ向フ座ニ遊バサ

レ、相手取テ事ヲ始メ玉フ振合ニ相当リ是前条御仕来リ、御遠慮ノ訳也

幕府モ是ハト存ル意味モ生ズル筋合ナレバ、 召寄ラル

、コトノ成ガタキ次第也、願クバ藩主々々自分ト心付、上

京ナサレ大樹氣嫌導ト云ヲ題ニシテ并 天氣伺ト云、乍去自分心坂ナサレ 氣味但シ、断然ト 天氣伺欵、存意次第

付ルルト云コトガ彼因循家又ハ時宜ヲ考フル藩ハ、迎モ

出間敷考ヘラル、也、ソコヲ断然ト出ルハ薩藩より外ニ

ナシヨシ、出タ処ガ至極宜敷ト云場合ニ至ルトモ存シ兼ラル、也、右故ニ、仮ニ薩藩ノ出ラル、ヲ頼ムコト也、

薩藩断然ト出ラレタレバ、因備之類押切テ出ラルベシト

思ハル、扱上ノ屋敷ニ居ラレテ尊奉勤王ノ道ヲ彼是周但シ屋敷ニ只ジツトシテ居ラレテモヨシ

旋ナサレ候ハ、幕府手ヲ出スコト有間シ、是何より十

分ノ御後楯ニテ、幕府ノ失政モ改マルヘク覺ユ、泰平ノ

基本ト存ル也、然ルニ断然ト上京ニ付テ案シルコト有リ、

彼諸藩ガ目ヲ付、会杯モ疑テ居ル故ニ、サレバコソ薩ガ

出タ、是ハ一趣向有ツテノ事ト云フベシ、是甚困リタル

コト也、サレトモ此度ノ事件ハ風説モ実ニ道路ノ風説愚

案モ実ニ愚案ニテサシタルコトモナケレバ、真ニ無益ノ

心配、若実事ナル時ニ、其御用心ナキ時ハ実ニ大御狼狽、

(付巻)一若後悔改心ノ模様ナレハ、夫コソ重疊十分ニ尊奉ヲ行ナハ

シムヘキ機会ナラスヤ

其時ニ臨ミ誰ヨ彼ヨト 仰出サレテモ、時ノ間ニ逢ヌノ

ミナラズ、其内ニ強請ニ怖縮遊バシ、和親交易モ 勅許、

兵庫開港モ 御聞濟ト云コトニナリタランニハ、実ニ
 皇国ノ恥辱、一度 勅許之旨夷人へ申聞候ハ、遂ニ挽回
 スベカラズ、臍ヲ噬トモ及バジ、所謂瓦ト成テ全キハ実
 ニ無念ノ至極ナラズヤ、是ヲ思ヘバ、人口ハ兎モ角モ、
 至誠懇情ヲ以テ只一心ニ 皇国ノ御為ヲ尽サレンコトヲ
 希フコト也、小生等如何ニ思ヒテモ無力ノ者何トセン、
 只々歎息仰天ノミ、一橋ノ極意ノ処如何トノ事モ至極當
 リ前ノ事ナリ、然レトモ一通リ誠忠勤 王ノ積リニテ、
 不都合ハアルマジキコト也、若此人不所存ナレバ、諸共
 ニ誠忠勤 王ニスルト云程ノ心ニナツテミレバ、一橋ガ
 不所存デモ 皇国ノ大事ニハ替ラレヌコト故、カマハズ
 断然ト行フガヨイ、ソコ迄断然ト決心シテ、勤 王ヲス
 ルニ何ノサハルコトカ有ランヤ、
 朝廷御微弱ト雖トモ、カク迄精忠ヲ尽スニ、夫デモ一橋
 ノ申分ニ御随ヒニテ薩ヲ捨玉フ道理ハナキコト也、夫迄
 勤 王忠節ヲ尽サル、トモ、小藩ニテハ万事行届カヌ故
 ニ、兎角薩州デナケレバナラヌト存ル也、何卒此辺ヲ差

斟ミ、厚ク御勸弁有テ、大樹公上坂迄ニ上坂ニ成リ、連
 イテ上京祈ル処、是小生ノ 皇国ヲ思フ微忠也、

此条ハ総小子ノ心ニテ、 朝議ニは無之、思忖ヲ認
 シ故、不都合ノ文言御免可被下候、

重徳

冊子原寸 縦一四糶 包紙原寸 縦二七・五糶

横二〇糶 八枚 横三九・二糶

一四葉 長藩士某(桂小五郎?) 意見書

再征ニ対スル長藩ノ態度

(端裏朱書)
 「乙丑款」

(端書)
 「長桂小五郎書面」

御本望之次第且御脱走之御罪科も一等を被為滅、且長
 州家へも格別之嫌疑世々と奉存候、乍恐姑息之眷念ニ
 被為泥、復京之期会ヲ御失可被遊候、自然長州ニ而国
 之屋キ奉見候様相聞候、第一奉欺 朝廷候様相当り、
 但州等之暴動、皆長州より引受居候様相成、同様御為
 ニ相成申間鋪奉存候、

一 芸国ニ而幕長之弁解は長州悔悟之心無之とハ乍申、恭

順謝罪之大義ハ既ニ貫徹ニ而尾惣督開陳ニ相成、且又

(龜山書勝)

諸隊激動之義ハ、何も 天幕江関係等之義致候筋ニも
無之、全ク内輪之義、且及鎮靜候上ハ、何も悔悟等之

義ニ相関り居候事ニ無之、且不容易企蛮夷と内通、伐

幕之奸謀等ニ御疑念可有之候得共、是ハ断然至正之論、

決而左様なる奸巧可有之義ニ不相聞旨ニ而弁解、右之

通諸隊へも鎮靜第一申出置候付、万一上国筋より脱走

暗襲暴挙之者等有之候ハ、全欺キ置候姿ニ相当り、

必芸州より大患を被らせ申候様相成り、此義ハ篤と信

義を相心得、相慎居候様第一と奉存候、尤諸浮浪士上

国筋ニ而暴動狼藉致候而も皆長州ニ而相被り居候様相

成形勢ニ御座候、

一 朝敵之御名已ニ一洗之上は、逆暴挙之御名さへ引受不

申候ハ、幕之手中ニ落テ入可申事ハ無之候、唯々幕

可恐ハ所察伐長ヲ名として大兵ヲ挙ケ

朝廷ヲ擁塞し、兵庫等ヲ開港するに有り、乍併諸浪人

等万一及狼藉候時ハ、真ニ長州より暴名ヲ吹付ケ、列

藩奮然長州ヲ片付ントする勢なるへし、依而長州之急

務、内自肅然厚備へ、辺境寂然九地之下ニ潜んで毫之

所勢を在不頭、

文書原寸 縦一六〇 横二二〇

一三四七 人吉藩小川小藤太手扣

人吉藩内訌事件ニ付

覚

一 勅命ヲ奉して上京被致候主人之微忠御助被下儀、当然

欵ニ存候処、区々御疑之上、却而其志氣御敵塞相成候、

如何、

一 主人儀、御当地江被召寄、留守中家内不殘探索有之候、

如何之事ニ候哉、勿論御疑有之、

勅命 幕命ニ而之事ニ候、主人納得之上、家来案内ニ

而探索可然哉、

一 幼主事、在薩稗古見合、或は引取候様御差函ハ何之御

疑ニ候哉、

一 四人之家来罪科有之御召捕ニ候、主人江御沙汰之上ニ
而、主人より召捕所置致候方当然欵、

一 四人之者共白上之成行ヲ御知ラセ可被下儀と奉存候得
共、未タ為何儀も不承、是以何様之思召ニ而御知せ無

御座哉、其訳承度、

右五ヶ条御尋問申上候様、主人被申候ニ付罷出候、

否早々御答御待申候、

小川小藤太殿より之

手扣写

冊子原寸 縦二七糎 横二〇・五糎 二枚

一五六 五卿ノ従者氏名

(実美) 三条殿御内

森寺 大和守 (常邦)

納戸奉行

三宅 左近

太田 司馬

公平之者、一体
人物廿八九位之者
京人

京人

笠老人

京人

真木和泉守二男菊四郎於
馬関被致暗殺候者

米藩番頭相勤候而幽囚被
齋と変名、年四拾二三、諸大夫同様、御内ニテ万事与候者、
京師暴挙ニは不加、五卿方江始終付随いたし居候者

土州人也、大橋俊藏門人
公平之人、水壑助筋之者、
当分吉井幸助致同伴上京致居候

(尾崎三良) 戸田 雅楽

杉本 拙藏

山岡栄之進

小松泉四郎

(水野溪雲密) 水野 丹後

土方楠左衛門 (久志)

島村左伝次

上杉鉄三郎

山本 忠亮

盛岡延太郎

小藤又兵衛

善 普 (倉)

安芸 盛衛

武部 諫尾

芳木春太郎

土州人、本名
黒岩治部之助
同清岡半四郎、古木暗殺之一条
存候者と疑有之、余り不公平者
米藩湖上謀三
専薩江依頼之者

(季知)
三条西殿御内

(守)
安井千代国

宮原主税

藤岡彦次郎

(石川)
大山彦太郎

水府筑波山副督齊藤佐次右衛門也、子兩人、一五十三、筑波山二而賊軍困、一十八度之戰、關二て致戦死候由。
土州人、本名石川清之助、真木暗殺之策謀存居候半、是以正義中之姦と存候。

(通稱)
東久世殿御内

(彌上藤三)
伊藤忠雄

渡辺左衛門

今井左司馬

鏡五助

(幅)
幅島三郎

真木和泉守弟、本名外記、長州忠勇隊之長三而為有之由、同藩本名井上善三郎、当方三条殿為使節対州江渡海。

(兼修)
壬生殿御内

(村)
長井縫殿

藤田主水

(井上彌正)
安並直樹

(隆壽)
四条殿御内

平川和太郎

小西直記

田村豊前

三浦主税

櫛田速男

(采村琢庵)
小村琢麻呂

医師

丸茂文興

長府報国隊

惣督

泉十郎

原田準二

大庭伝七

弘中次郎

熊野九郎

熊埜直助

本塾々村勘九郎
面会不致者
惣督面会致候者共
白石兵一郎弟
応接掛
同

京師長人暴挙之節ハ、入牢いたし居候者、全体森獵と申事

輕輩より如是相成候者

長州諸隊

奥膳鎗九郎

粟屋主税

林 樵

惣督

高杉新作(著作)

隊長

桒村和作(壘)

山形九右衛門

山形小助(有朋)

佐瀬八十郎(前原一誠)

太田市之進(御堀耕助)

先達而三条殿江使節として、長州より参候而私にも致面会候者

桒村範助(泰介)

原 栄藏

対州正義之者

家老

京人、当分対州藩之処、滑稽家

奸物勝井五八郎(從弟人)
当分正義ニ服候者

平田大江

子

平田首馬(主水)

用人

多田莊藏

浜田孫三郎

北畠四郎

佐野金次郎

青柳縫殿之助

五十嵐正作

筑藩正義

月形洗藏

早川養敬(勇)

筑紫 衛

伊丹真一郎

野村助作

安田喜八郎

同

上京

一四九 天璋院付奥女中ヨリ薩摩屋敷花川へ

薩摩屋敷女中減少ノ件

〔包紙ウツ書〕
「公方様御方表使方迄御届可申出候御通りニ而

御座候、」

〔封紙ウツ書〕

花川殿

藤江

御返し

浜多

しま田」

御文之様申まいらせ候、

上々様かた御機嫌よく成らせられ御めてたく候、さやう

ニ御座候へハ、去戌年御変革仰出され候御趣意ニ付、

修理大夫様御縁女并御養御妹、其外御厄介之御女等、御

国許江御差下し成候所、其節役女中之儀も都而諸藩同様

御差下し被成候筈ニ御座候所、

〔徳川家定書〕

天璋院様ニハ別段御由緒も被為有候につき、役女中之内

当地江御残し置、是迄の御通りニ御勤させ成候やうニと

御申上被成候所、右御申之通りニ被成候様にと、御付札

ヲ以仰出され、猶又是まで役御女中其外多人数御差置被

成候へ共、兼而御申上被成候通り、海防御手当其外、御

内外御当時急務の御入費多端ニ而、追々御勝手向御難涉

被成、女中共是迄の通扶助御調兼候ニ付、此節右役女中

之内、頭役ノ者御残置、其余ハ都而御引取成、尤御勤向

の義ハ、是迄御勤来り候御廉々、御軽く成候而も、是迄

の通り御勤成度との御事、是又渋谷御輿之義御引取なさ

れ、是より表立候儀ハ、芝御屋敷内御取次御番所へ御引

請成候よし、且御内用之向ハ、桜田御屋敷御物見江花川

殿御差置、御跡式御勤させ成度、右につき而ハ花川殿一

名より御勤向等の儀、追々御伺成候との御事承知いたし

まいらせ候、其段老女衆江申まいらせ候御事ニ御座候、

なをくめてたくかしく、

めて度かしく、

文書原寸

縦三二・五糎
横四六・五糎 二枚

包紙原寸

縦二八糎
横三八糎 二枚

1860 福岡藩疑獄事件死流処分人名書

森 金作（勤）

伊藤清兵衛

月形洗造

江上栄之進

高取養巴（鷹）

今中作兵衛

同 祐十郎

伊丹真一郎（八）

安田喜八郎

海津幸一

大神老岐

佐座見三郎（健）

足輕

右拾四人打首、

右三人切腹、

瀬口三兵衛（郎脱丸）

中村哲蔵

尾崎惣左衛門（七）

森 安平

万代十之進

真藤善八

徳永源六郎

小金丸兵次郎

長谷川半蔵（寛）

浦 志摩守

林 泰

海津又八

戸田平之進（五）

三坂小兵衛

山田登四郎

野村 助作

伊藤 茂次郎

右拾式人遠島、

文書原寸 縦一六・三種 横六七・五種

一四二 筑前藩ニ於ケル加藤司書等断罪一件

永牢

播磨隠居名(二番)

黒田 暁心

其方儀、当春以來奸曲之者共ニ誘引セラレ、上を不憚所
行多、御国体ニも相拘り、重々不屈至極被 思召候、依
之屹度一座ニ可被 仰付之処、家筋ニ被為 免、御慈悲
を以於下屋敷永牢被 仰付候事、

相模隠居名

矢野 梅庵

右前条同断ニ而、重ク被召仕候身分之旨有之候と之事、

切腹

加藤 司書

其方儀、格別重ク被召仕候身分、同氣相語らひ奸計を廻

し、上を不憚所行多、

御国体ニも相拘り、重々不屈至極被思召候、依之切腹被
仰付候事、

切腹

衣非 茂記
斉藤五六郎
建部 武彦

右司書同断ニ而、被召仕候と有之候事、

遠島

河合 茂山

押而隠居
諸人応対
徘徊被差留

鎌田八太夫
河合真八郎
戸川佐五右衛門

文書原寸 縦一六・三種 横七一・七種

一四三 上海ニテ蒸気船買入ノ件

此節唐国ニ而蒸気船買入方之儀被仰付候付、四五日中
ニ当地滞在手伝老人、買入方として渡唐為仕候、精々
御国元御都合罷成候様取計候様申付置候、右ニ付、当
時上海ニ而御調文通之船無御座候節は、彼地當時在合

之船承合、一往成行御掛合可申上候、

一御調文通之船在合申候節、直段之儀ニ付、精々直安ニ

買入可申賦ニは御座候得共、先日ハ八万枚より九万枚

迄ニ而買入方可仕段を申上置候得共、自然唐国ニ而其

船新造、又は諸道具新敷船ニ而、価高料仕欸茂難計候

付、其節は九万枚より拾万枚迄は買入方可仕候間、其

段御含置被下度事、

一可成丈新造船、又は機器等宜敷船を目刺為致、買入方

可仕候、

右為念奉申上置候事、

文書原寸 縦一四・四糎 横一一四糎

一四六三 筑前藩士正奸人名録

一四六三ノ一

三通

浦上 数馬

郡 左 近

野村 東馬

用人

大目付

格式頭取

納戸頭

頭取

同

君側医師

其他少々之奸物ハ如山

監察

同

右之者共先巨魁、正邪之弁ハ追而委細記し可申候也、

文書原寸 縦一六・四糎 横四〇・二糎

一四六三ノ二

久野 一角

大音 兵部

小河伝右衛門

神屋宅之丞

小河 縫殿

石原直之丞

吉村 真

武谷 椋亭

三宅 孫作

櫛橋仁左衛門

毛利内記

林 丹後

執政

櫛橋内膳

○伊丹真一郎

△今中作兵衛

黒田大和

△江上栄之進

○江上源兵衛

小河民部

△安田喜八郎

□森安平

月成権太夫

△林泰

□万代重兵衛

用人

吉田大煩

○海津幸一

○海津亦八

斉藤義人

△鷹取養巴

△筑紫守

川村主鈴

□野邑助作

△小金丸兵二郎

納戸頭

小河縫殿

、戸田六郎

、日高小平太

山崎彦兵衛

、平野三郎

、友納郡二郎

岸田瀨左衛門

、内田良五郎

、大神九内

大塚彦右衛門

、讚井嘉助

、廣渡太助

文書原寸 縦一六・二種 横三三・二種

一四六三ノ三

○衣斐茂記

○建部武彦

○斉藤五六郎

○川合新八郎

○月形洗蔵

△同 茂山

、新野忠三郎

、新野重兵衛

、宮崎用七

、中村準蔵

、中村哲蔵

、同 勇八

、松生弥八郎

、中島伝平

、波多江市内

、平山外八郎

、坂本次兵衛

入(佐座謙次郎
牢(長尾馬之允

△野村望東尼

○印 逼 塞

□ 足輕三人番

右六月末より

□伊熊茂二郎

尾崎惣左衛門
△同 弥 介

△ 一族預

、 組合預

加藤司書

戸川佐五左衛門

江上伝一郎

山内俊郎

桑野左内

長尾正兵衛

筒井勝兵衛

岡田 稔

神代且兵衛

竹田安之進

魚住楽書

須山惣次郎

戸田平之允

中村四郎兵衛

岩永仁左衛門

西川 茂

為田 漸

高田卯八

福本泰平

長谷川半藏

長島十左衛門

久保山 久

右七月廿一日 遠慮組合

一族預之分

早川養敬

入(瀬口三兵衛
牢(西原守太郎

伊藤清兵衛

團 頼 母

一族番

黒田播磨

外町人
帶屋 次平

楠屋官五郎欵

文書原寸 縦一六糎 横一〇七・六糎

戸次彦之助

四宮孫二郎

青柳半藏

左 宅 七
右役義被免

甥 月 形 洗 藏
名前不知

浦 志磨守

中村 格

増井喜右衛門

上同

矢野相模

松屋孫兵衛

深須

一四〇 兵庫開港反對意見 筆者不明

一 兵庫港を開へからさる条件、聊管見を述ぶ、第一兵庫は帝京ニ近し、一旦事あれば京師乍騷擾す、京師紛擾すれハ 宸襟安からず、宸襟安からさる時、衆庶安からず、是其近畿に開へからさる一也、

一 此の如くなる時ハ浪華平穩なることなし、浪華騷擾すれハ淀川の運送止るへし、運送止る時は京師米価を始め諸物不融通なり、米を始め諸物不融通なれハ、上下塗炭に苦しむの最甚敷もの也、是其近(畿に開へからさる)……

……二也、

一 無異に交易する共、京坂の街道・河筋は勿論、山城・摂津の国界、山上山下等非常の御警衛なくんハ有へからず、但し、今の関門の如き、浩水(鉄)に破却の様なる手薄ニ而は相叶はず、又側之小藩にては形計ニて実用なし、大藩に命せられ、十分堅固手厚にあらざれハ其詮なし、然れハ時節柄大藩迎も自国の固めと両所ニなれハ、費用多かるへし、然れハ富国強兵の道ニあらず、

是其近………三也、

一 京師の商人共利を得ん為に、兵庫へ心を寄せ京師をよそにし、日々往反すへし、然れハ自から夷人の風俗京師に移るへし、憂ひさるへけんや、是其近………

………四也、

一 如何様に蔽禁たり共、夷人京師に立入問敷にあらず、今大坂に多く上陸す、故に即今土人に紛れ込、上京すといふ風説あり、是其近………五也、

一 仮令帝都遠隔たり共、兵庫諸国輻湊の地なれハ、事ニ差支、其難敷ふへからず、譬へハ我台所へ他所の人の入込居住するか如し、我に關係なき者と雖、用心せずんバ有へからざるに、況渠れ我に求ることあり、我渠に求ること有をや、姦吏奸商其虚に乗し、身の利欲に迷ひ、日本の恥辱をも大患をも弁知せず、只一身の利欲の為に如何なる大害を醸するも知へからず、是其近………六也、

一 諸国よりは是迄の通り荷積して来る時、夷人見付次第ニ

価を問ひ買んとすへし、船主も価よけれハ売んとすへし、此ニ於て、夷人尤高価ニ定むへし、然ハ船主売払夷人買取、夫ニて埒明、兵庫へ積上ることなるへし、然る時は兵庫受益なし、只交易の利を幕府に取のミ、此の如なれハ、兵庫・大坂・京師共ニ諸物乏敷不融通なるへし、不融通なれハ即高価ニ到るへし、これが為ニ京・坂・兵上下共ニ疲弊せん、帝都の詮なきことにて、朝廷に対し奉りても恐入たる訳柄ならずや、是其近……………七也、

一 此交易を官交易ニセば如何、内交易の罪人多かるへし、但し内の罪人ハ兎も角も、外の罪人は如何せん、若又私交易なれハ、輸出の程知へからず、然れハ日本諸物不融通の基、尤兵・坂・京甚敷こと今日に陪せん、若又是等のことを敵禁の法を立るとせん歟、仮令如何なる敵禁の法令を立る共、迷利の輩其罪を犯すこと恥も辱も思はず、利欲の為に罪人のミ多からん、此制度ハ迎も行届くことなし、是其近……………八也、

一 是腹癰の出来たる如く、是我国の害なり、今其害を醸するハいかにも求て人を塗炭の苦に陥るなり、国を治め民を育する者のなすへきにあらず、兼て人の云に、浪華海ハ内海なり、夷船ヲ内海江入へからずと聞、今兵庫ニ港を開かは徒に入のミならず、渠を肥し我を瘦しむ、乃我肉を割て虎を畜なは悲嘆限なし、深く思慮を回すへし、是其近……………九也、

一 全体外夷の情態ハ、交易さへすれハ害なきものと思へるや、已に英国より魯斯・和蘭・仏蘭等へ密使之状あり、其書に曰、今日日本上下和せず、討べしと云々、三蛮同意せざる趣一覽セリ、若各国同意したらんにハ攻来るへし、併此書の趣、真偽は知され共、先年大樹朝廷へ御理の書に、夷情難測候間、沿海の武備充実ニ致すべくと認めあり、実ニ難測故あれハなり、夷と和親を好まされハ、ケ様なる筋ニて大難あらんことを思慮する故なり、今則無事ニ交易して居れ共、前条之如きことあり、此末五年か十年、何ん／＼数十年の後ニ

もせよ、和親敗ことあらハ、兵庫ニ寄り摂海ニ数千之艦を浮め、猥りに上陸し日本を中断し、帝都に迫らんことあらんに、西国の諸藩勤王の為に馳上らんとする共、彼の連艦之連を絶切らハ、(才脱カ)登京すること難からん、丹波路より入京センとす共、山路高底不自由此上なし、何そ急速の間に合んヤ、然る時ニ臨ミ、云へからざるの大難あり共、救ひ奉ること能はじ、是其近……十也、

一前書之条件ハ、無識の短才不文なれ共、此開港は神州の大後患と思慮すれハ黙止ニ堪ず、依て愚蒙の恥をも顧ミず、十ヶ条を述ふ、尚此余数難なきにあらされ共筆紙ニ難述、皇国の御為を父母の子を保するが如く、心誠に之を求むれハ、中らすと雖遠からず、深く思慮を回らすへき事なり、我子ヲ捨他人ノ子ヲ愛シ、親ヲ捨他人ヲ敬ス、所謂孝経ノ悖徳悖礼ナラスヤ、況ヤ夷人ヲヤ、

冊子原寸 縦二種 横一五・三種 四枚

一四三 久光公ヨリ（松平春嶽？）へノ書翰草案

上京延引ノ件

一四六五ノ一

先月六日之芳翰相達拝読仕候、先以向寒之砌御座候処、愈御勇剛可被成御座恐悦奉存候、扱貴兄御旨趣之件々委曲拝聴、至極御同意奉存候、偏ニ御尽力之故を以、如此之形勢ニ立至り候、天下之為雀躍仕候、殊ニ

朝命之御事御座候得は、不待駕之義申迄も無之候得共、

御存之通旧來持病之腰痛時々発動、起居不穩、迅速登京

難仕、不得止帶刀(小松)・吉之助差出御猶予奉訴候義ニ御座候

間、

貴兄ニも不惡御汲取、乍憚御執成之程宜奉願候、

一四六五ノ二

先月は尊書被成下難有拝見仕候、先以向寒之砌御座候処益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、然は今般天下之形勢転変仕、不肖之私上京仕候様、

朝命を以承知仕、恐入難有奉存候、御尽力不一方御事と
拝聴仕難有奉存候、依而迅速発途仕管御座候処、旧来持
病之腰痛発動仕、旅行難仕、不得止御猶予奉願度、帯刀 吉之助
登京申付候ニ付、細事同人より御聞取被下度奉希候、

文書原寸 縦一七種 横五二・六種

一六六 大坂警衛巡見幕役姓名書

奥御祐筆

柳沢勉次郎

竹村讓之助

大御番頭

松平因幡守(康正)

但組頭御番衆与力同心共

御書院番頭

渡辺肥後守(孝徳)

同断

御小姓与番頭

土岐大隅守(頼徳)

但組頭御番衆共

外国奉行

菊池伊予守(隆吉)

西丸御留守居

講武所剣術師範役(信之)

下曾根甲斐守(信之)

御先手格 講武所剣術師範役

男谷下総守(信友)

同次席

講武所頭取

瀧川主殿(元以)

兩番上席 講武所鎗術師範役

奥詰

高橋謙三郎

講武所取締役同頭取勤

岩田半太郎(通徳)

講武所劍術教授方

式 人

同世話心得

四 人

同修行人

四拾四人

同鎗術教授方

式 人

同世話心得

四 人

同修行人

四拾四人

同 助

八 人

同修行人

百四拾四人

同大鞍打

四 人

御目見以下
講武所調方出役

式 人

同湯呑所之者

式 人

大目付

老 人

御目付

式 人

右大坂御警衛為御見置、一橋殿御越御人数之外、

(本文書ハ慶応元年トスルモ文久二年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一六・三種 横一〇〇・二種

一四七 中条左衛門督ヨリ薩藩ノ方針ニ付問合セ

ノ書

右ニ対スル返答書

一冊
一通

一四六七ノ一

中条左衛門督殿より
(良様)

御内談之義書取

一 御家ニ而は 皇国学御執心、御国御所置向專右御趣意之旨致承知、結構之事候、於当かも御承知之通、家学紀伝道ニ付、国家之御為正敷宜敷筋心得方教道之、家業ニ付而は職掌之義無之共、論弁可致置事は勿論、其上

天朝江拘り候筋ニは携候義、役前之肝要有之候、左候得は、方今之形勢不容易御時節と奉恐入、乍陰心痛至極ニ候、大諸侯方ニ而は、御論茂可有之儀、且は其御家皇国学御執心ニ而は、手前家業同途之儀ニ付、御存心茂大同小異と存候、就而ハ御相談申候先日 將軍家へ御差出之御書面、風説ニ及承候、右様相成候而ハ、只々無詮之議論耳ニ而費日月事件、肝要之御趣意は却而難貫通候、一体国家之御為、専防之御趣意ニ而ハ、天下之御為さへ整候は宜敷筋ニ可有之候間、信礼以家学辺誘導可致ニ付、表立無被仰入、先日之書面は御取消

ニ而、意味合を以御筋柄貫通いたし、公辺御為筋を御助勢有之、国家之真ニ 御為成就満足ニ相成候様、御着眼御別考御頼申候は如何可有之哉、

一 其御藩之儀、御疑迷ニ而茂御意存無之儀は、先日之御書面等被差出候儀、全御為を被存故ニ候趣、御意存有之候は、俱御出兵御勦被申候而茂、御出張を被企、御勞兵之後被及御工夫候得共、元來右様之無御所存

(徳川家齊意)
広大院様御間柄、且当時

(徳川家定意)
天璋院様も被為入御間柄之儀、厚御心得候付御扶助被申度、強諫之御書面被出候と申義承候、左候は、右御間柄之処深御考、 將軍家之御迷惑なく、国家之御為御精力を被竭、天下静謐之御処置速ニ成就之端を被開、(福) 聖慮不被為腦、御平安万民無揺動安堵ニ相成候御工夫御尽力有之、御守衛之兵卒非常警備之分御残、其余頓と御減、諸方懐危疑心を御消除有之度、諸藩向茂納得候様御示談有之度候、

一 諸藩鎮静之儀は、御引受御骨折之趣無相違候は、弥老

中方は拱手握權之假ニ而罷在御取扱御頼申候は、早々御取計可有之哉諸方眼前之理論、強國乱ヲ生候而ハ、彼之術、中ニ落入候処ヲ厚御舍御工夫可被下候事

一都而 將軍家を被扶助候御所存候は、信礼誘導筋取扱可申候間、御内存之趣致承知度候、大体御趣意之趣承知いたし置度、兎角何事茂十分ニ難調事は世上之習ニ而有之候得共、十分之処承置候得は可相成丈誘導可致積候、

一攘夷之義如何御心得候哉、自秩父御聞申候処、逆茂攘夷は難出来様子、一昨年之事件ニ而御感得之由、左候ハ、何様之所置之御趣意ニ候哉、攘夷無之鎖港之御所存候哉、或は鎖港茂無之、只交易之法を改、国人は致強兵ニ防守之策ニ候哉、

冊子原寸 縦二九種 横二〇種 五枚

一四六七ノ二

一書面消除之儀、万一彼れ承伏不仕候得は、速ニ御打入と之 仰出承知仕候得ハ、甚不都合ニハ可有御座候得

共、尊意ニ難奉応候事、

一御守衛兵卒非常警衛之分にて余計ニ出兵無御座候、巷説ニハ夥敷申触哉ニ付御疑ハ御尤ニ候得共、書面ニも申上候通、凶器妄不可動義、則名分大義ニ関係する事にて、無名ニ暴動可仕謂無御座義顯然たる事ニ御座候、一鎮靜之義

幕府道を御尽し、君臣之分真ニ御勤守被遊候へハ、速ニ御行届ニ罷成可申哉と奉存候事、

一幕府御鴻恩奉蒙候義は、今更無申上迄も事ニ候、天幕之御為十分之処建言可申上、着眼ハ只名分大義を御尽し被為在度との一筋にて、大綱さへ御立直ニ相成候得ハ、其余ハ枝葉之義と奉存候事、

一攘夷之義、君臣之名分大義判然御振替ニ相成、条理明白ニ相立、諸藩御徳沢ニ浴候様之御所置ニ罷成候ハ、開鎖之義ハ亦夫ニ応し、彼か悔を不受、

皇国之御武威海外ニ輝可申所ニも可立到候へとも、何分本を捨、末ニ涉候様之御所置ニ而は、逆も十分之見

当付兼、その尽す所も目見難相立、何卒大本の大典、

速ニ御振替相成候処奉希上度御儀と奉存候事、

右中条左衛門督(良政)

文書原寸 縦一四・七糎 横五五・五糎

一〇六 長崎ニ於テ会津国産種子人參売捌ノ件

(端裏書)
「会津座方一条」

一会津国産御種子人參之義、是迄長崎江相廻り、唐人江

売込方当浜町田辺屋と申人江会津より被仰付置候処、

同人義老年ニ而行届兼、此節私共江右売込方往々仕具

候哉、相談之趣キ御座候得は、当時柄之事ニ付、

御国元御差支之義無御座候は引請申度奉存候、

御種子人參

老ケ年代凡八万兩

一会津国方ニ而は、余錢安直ニ御買上之由ニ而、相応

御利潤相見得候由、

一当地ニ而は、專唐人江売込可申候、若引請候段ニ相

成申候ハ、巨細ニ算法相立御届可奉申上候、

文書原寸 縦一八・三糎 横五七・八糎

一〇七 長崎貿易ニ付專任者任命ノ件

一出保組合商法且同人異国反布大坂江為積登売捌方并長

崎会所組合商法方ニ付而は、諸国品物仕入方等手広不

仕候而は被相行不申候、右ニ付当節柄諸国海陸共ニ盜

賊之愁御座候ニ付、諸国引合金銀運漕方等ニは、足輕

才領を以送り方賦御座候間、去秋より被召付置候足

輕三人を以、右之場相勤候様被仰付置被下度、左候而、

今老人御重として被下候事、

一右同断御商法ニ付、金銀出入は勿論、時々御届向、且

又御相談旁之義、異人応援等之事茂、節々御立合ヲ請

候義共御座候間、御屋敷詰御見聞役様方ニ而は、外御

用向キ等被為在御座、且又御役所よりは外見旁差障候

義茂御座候ニ付、別段ニ御老人此商法掛一扁ニ御掛被

置被下候ハ、往々之御都合ニ茂罷成儀ニ御座候間、

右通被仰付候ハ、此度御取添地蔵所之場江御居宅茂
相備居候付、兼而右御掛役様・足輕衆御在勤被下候ハ
、第一御用心等茂行届、私共商法之弁利筋ニ茂罷成
仕合ニ御座候間、右通被仰付置被下候事、

^(付紙)一 本文ニ付、日置居住肱岡八左衛門と申者、数年爰元江

相詰人柄造成者ニ而、今度私召列候賦之処、母病氣ニ付
断申出候、同人出崎相調事候得は仕合之段、山木より
も申出候間、御着之上肝煎を以程合御糺御請仕候ハ、
早々被差越候様、若又同人出立相調兼申候ハ、外ニ
精々人柄御吟味被下度、御存通之場所、中々ひとく御
座候、

文書原寸 縦一八・三種 付紙原寸 縦一六・二種
横九六・三種 横 二二種

一〇〇 越前春嶽ヨリ幕府ヘノ建言

長州処分ノ正大、皇国一致

^(端裏書)
一越前建白「乙丑欵」

昨夏長防

御再討被仰出候砌、如何之御次第ニ候哉、驚歎之余り奉
窺候処、再発之趣有之由ニ而、天下之大兵を被動

御糺問之処、其実なく随而御処置被 仰渡ニ相成候得は
大兵境ニ臨ミ御武威を以令承服候様之諸侯も

御名義之正否彼是疑惑を抱候様相成、遂ニ今日ニ立到り
候様ニ而奉恐入候、情熟慮仕候ニ、外夷之事起しより以
来、乍恐

公辺ニ而も彼是御失体之儀も被為 在、人心不平之事情、
遂ニ長防

御征伐之可否と相成来り候事ニ候得は、広ク天下之侯伯
ニ御議シ、私政を去り公義ニ御従ひ被成候儀、大御急務
と奉存候、就中異儀ある諸侯江は早々御推問有之、御平
心を以て御聴納御反正ニ相成候様願度、左候得は、自然
公平之理明ニ寛猛至当之御処置相定り、御国是爰ニ立可
申と奉存候、近来英仏之二国各共、好とする処益親睦を
結ひ候、我國をして分崩離折せしめんとするの勢茂有之、

鷓蜂(蜂)の利を納るの術ニ陥候手も難計哉と被存、尤可懼之至ニ候、此等を以考候得は、外国の侮を禦クハ

ニも御採用被成下候様伏而奉希候、誠恐誠惶謹言、
文書原寸 縦一六糎 横一九八糎

皇国を一度ニ被成候儀御根本ニ有之、長防之事件は、諸侯之異儀御推問御講究被為 在、心志を御合せ被成候儀

一 平運丸及軍艦購入ノ件

御先務と御弁別被為 在候ハ、仮令

一 平運丸

御征伐中と雖、順序を追ひ候而も、御刃置は如何程も可有之儀と奉存候、只今之姿ニ而奉

凡五万兩

勅とは乍申、何所迄も兵力を以致屈服候様被成候儀ニ而、

一 軍艦御取入ニ付、江戸為替

正大之理ニ非れば、諸侯も各隠然と一趣向を立候やう罷

三万兩

成、仮令一長は亡候共、また一長を生し可申、且士民之

(本文書ハ慶応元年トスルモ元治元年ノ誤リカ)

困究(窮)より禍蕭牆の内ニ起り候儀等ハ、先日申上候通ニ御

文書原寸 縦一四・四糎 横一五・八糎

座候間、何分御反正大御懐懐(懐)を被為開、御政令御一新、

上奉安

一 黒田了介ヨリ西郷吉之助へ

宸襟、下蒼生之苦を被為救候様必至奉仰願候、非才浅見

薩長連合ニ付木戸上京ノ件

之私、殊ニ隠居之為身毎々大政を議シ候儀、重々奉恐入

其後不得尊意候へ共、倍御勇健可被成御座珍重奉南山候、

候得共、国家危急ニ迫り候儀、奉対

然ハ小生茂去月廿八日防州三田尻港出帆仕候処、不順ニ

照祖祖先神靈候て不忍沈黙、敢而冒万死及建言候、幾重

而漸ク今夕方ニ着坂、御第へ罷在申候、就而ハ木戸氏ノ

外ニ上下八人同船仕、右御第内へ罷居られ申候、扱木戸

外ニ上下八人同船仕、右御第内へ罷居られ申候、扱木戸

氏儀、実ニ先生而已偏ニ被相慕、此節上国相成申候ニ付、願くハ乍大儀伏見御第へ同伴仕度御座候間、右へ御待迎ひ被成下儀相叶間敷哉、明五ッ過爰元出帆之筈ニ御座候ニ付、少々宵ニ入可申候間、為御案内申上置候、尤其御許御都合も可然様奉頼候、先は以大略要用而已如斯御座候、謹言、

寅正月七日

黒田了介



西郷吉之助様

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第三二号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一・二六・五種 横六・六種

一四七三 山階宮晃親王ヨリ島津中将殿へ

長州処分ノ件

〔包紙ウツ書〕

「島津中将殿 晃

玉机下

〔封紙ウツ書〕

「島津大隅守殿 晃

玉机下

昨夜退 朝夜丑半刻、今日御会始ニ付参 内午後

勅題 青柳風静 晃

梓弓春の朝風長閑にて

落もみたれぬ青柳の糸ト

御一笑可給候、

春寒熾盛ニ候、益御安穩令賀候、晃無事乍憚御安心可給

候、昨日ハ国事御評定参 内候処、国事掛一同両役、一付

・会・桑・板・小参 内、柳営より決議の上以書付、長

州沙汰申上候、

〔毛利敬親〕
大膳塾居隠居

〔毛利弘封〕
長門永塾居

十万石上地

三大夫家名断絶

末家ノ小兒毛利家相統ト申事ニ候、

奏聞通り 勅許ニ候、菊桐御文・寮御馬ノ処ハ先々御沙

汰なく其假ニ相成り候、尤京坂ノ武吏

朝廷ノ各位、例ノ々々異論紛々ニ候得共、先々件ノ通り

御沙汰ニ相成候、柳宮帰東之風説甚候故、尹宮之思召ニ而、以伝奏被止置候、此上ハ国是ノ一大事ト存候、先々御安心ト内々申入候也、恐々謹言、

正月廿二日

二白、桂右衛門始而面会候、帰国候ハ、宜御一声（久武）

希入候、小松以下無事御安心可被下候、此節ハ高崎（正風）

・井上、和州月ヶ瀬江梅花一見ニ壮行候也、

文書原寸（折紙）縦一七種 包紙原寸 縦二七種

横四八種

横三九種

三七四 山階宮晃親王ヨリ島津中将殿へ

年賀状及国事関係

「包紙ウツ書」 島津中将殿 晃

「朱印」 机下

「封紙ウツ書」 島津中将殿 晃

机下

早春迎も呈祝札候管之処、公私多用多端、加之和歌

御人数ニ被加、廿四日初参等甚不本意之御不沙汰御海容可給候、不備、

新年之慶賀不可有際限候、益御安福ニ而御加寿目出度存候、小子無事越年御安慮可給候、旧年は不相替御懇志、

深々忝存候、大和帰京之節は御細書忝存候、此節は摂海辺り之風評も起り、長州も又々少々混乱之よし、東北之方田沼如何所置候哉、近々ニは老中兩人も上京、大樹公ニは甚

朝廷御崇敬の美意ニ承り候へ共、大小吏之中ニハ心得違之人体も候由、殿下以下御心配之事、一橋・会・桑共御心痛之由、何卒ノ御無難ニ納り

天氣麗様偏ニノ奉祈候事ニ候、尚又宜々御賢考伏而希入候、書外承り候令書略候也、恐々謹言、

正月廿六日

（本文書ハ慶応二年トスルモ元治二年ノ誤リカ）

文書原寸 縦 一七種 包紙原寸 縦二九・五種

横四八・五種

横三八・五種

(包紙ウツ書)
「口上覚」

一四七五ノ一

口上覚

昨廿六日川上助八郎ヨリ承知仕候得は、先達より薄々致風聞候銀札、弥定矩を不被為踏、於此処御仕向替被仰付候段、内実は既ニ伺済ニモ相成候由、忝々苦々敷奉存候、実以御国家之御大事は国家之大権節々不当、人心動揺仕候儀ニ相極リ候、抑国家之大権は、刑法之權ト財要之權トニ相限リ候処、財要之權相乱れ候得は、御困窮益被為募、終ニは、乍恐

尊慮ニモ不被為在候御政態共相成、人心不和之機會ニ陥リ候而は、方今之世形無限歎息之儀ト奉存候、尚又奉申上候モ重々奉恐入候得共、天下国家之權、正不正之怪界は、刑法之權乱れルト不乱ルトは賞罰之明不明ニ始リ、財要ノ權乱れルト不乱ルトは通貨出入之枢機ニ発リ候儀

は、誰モ能承知罷在候儀ニは御座候得共、右両權之内、何れ之方相乱れ候而モ、国家栄盛可仕、先轍一切私見聞不仕候故、旧冬赤心を以御国害相成候通貨被為除、御国益ニ相成候銀札目論見書奉建言候得共、右は乍恐尊慮ニ不為叶候儀ニ御座候哉、御用ニ不相成候故、此度松岡十大夫目論見候由ニ而、銀札之機運相付候而已を被為開候段、乍蔭密聞仕、悲泣之余リ尊公様迄極密助八郎相談を以奉申上候心得ニ而相認メ候儀ニ付、御一覽後火中可被為下奉願上候、右御国害差見え候儀、大略左ニケ条を以奉申上候、

一 一時眉を蹙之急を被為凌候御策ニ、例外之銀札を以通用被仰付候故、人心銀札を相嫌ひ候処、尚又数条之銀札を被為出候故、尚更銀札之内ニモ価位種々御座候故、此度右御改革被為遊候儀ト奉恐察候、忝々様御改革被為遊候銀札通用、譬ひ被為思喰候通り、御国内通用相成候而モ、物トシテ首尾無之儀は有之間敷候処、右銀札は、譬は今日ヨリ来ル何年何月迄

ニ而銀札都而相除候法則、始メニ相定リ不申候而は決而不相叶儀ニ御座候事、

一 旧冬琉球通宝之巨害、慥ナル証拠を以事件奉言上候通り、他国通用不仕候故、物価頻リニ登貴仕候段、

數ヶ条奉言上候処、右琉球通宝之巨害被為除候儀ニ付、無拠暫時天下通用之財貨ト御国害相成候通宝ト

ノ中間ニ銀札之策を以、六拾九ヶ月一機転ニ而、凶変而忽吉ト被為遊候様奉言上候処、右様慥ニ見留候

儀無之、銀札通用被為開候得は、琉球通宝は地金無之候得は、何様之急御入用被為在候共、如何共致し

方無御座候故、自然ト扣エ気味ニ而相成候処、銀札之方はスルニヤスク除クニカタキ物ニ御座候上、紙

札ニ而は慥ニ引替不被為遊候共、可也通用相成候得は自然御急入用之節々、益而不除銀札ト相成候得は

無是非通用相場下落可仕候、尤左様無之候共、因ニ銀札正金銭ニ引替不相成候得は、旧冬奉言上候琉球

通宝之御国害ニ百倍致し候儀は、自唯今現然仕候事、

一 銀札を以御国内之産物を被為買上、是を都会ニ御廻

し被為遊、右御払代銀を以諸物御買入相成リ、右品物御国内ニ御下し相成候而、御払被為遊候ニは、銀

札通用運転之定格を不被為賂候得は、是非往々旧冬助八郎・壯一兩人ヨリ私島元ニ而口上手扣相認メ罷

趣候、草稿を以奉建白候、文中奉言上候通り之御国害、如何被為遊候而被為除候哉、御神策アラはホシ

ク奉存候事、

一 銀札之金高私海老原宗之丞ヨリ始メ承知仕候ニは、金六拾万兩程と申候上、尚又去冬六万兩程モ御払出

シ被為遊候由承知仕候処、先達而同人より尚又申候ニは、五拾万兩程ト申決候処、別紙助八郎を以奉建

白候考ニ而、宗之丞江相談及候得は、銀札之御払數相違致し候間三拾万兩ト申決候、然ル処此節ニ相成

候而は御払銀札惣高拾五万兩と申候儀、世上之者より承知仕候ニ付、宗之丞江相尋候処、同人モ此儀不

審罷在候、其儀は助八郎・私同座ニ而宗之丞より承

知致し候儀ニ付、助八郎より巨細御聞取可被為下候
様奉願上候、右様現在財貨出入、御国産物出入之要
路会中之諸人口上サエ纔ニ百日不滿之内ニ変化仕候
儀、抑如何ナル事ニ御座候哉、既ニ今日之銀札拾五万
兩と申候儀、万一虚唱ニ御座候得は、現錢引替於中
途金錢御払底相成、御引替万々一差支出來相成候節
は、忽チ諸人之銀札を嫌ひ候儀、尚今日二十倍可仕
候上、至極御払底之現錢は、散シ而不返財トナリ候
而已ナラズ、財貨之信を乍恐、如是御国内ニ被為失
候而は、復事如何様之慥ナル儀を以、其節真之銀札
御起立被為遊候共、諸人信用仕間敷奉存候事、
一 財貨之信を四民ニ被為失候而は、此上慥ナル誠之銀
札を起立仕候而モ、諸人信用之程如何可有御座候哉、
然は乍恐如何方今御困窮之糸口被為開候而は、湧出之
財降下之貨ニ無御座候而は、俄ニ御富國之御基本相
立申間敷奉存候、右故先哲モ銀札錢札を以降下之貨
ト唱エ、米札・証札を以湧出之財ト申候儀ニ御座候、

右湧出之財・降下之貨之実策画餅ト被為遊候而は、
如何ナル財要之道ニ妙を得し輩モ、急速御富國之基
本相立可申見留相付可申哉否、

一 財貨を得ル之道を不被為踏、手ニ可取之宝玉を被為
捨、眼ニ不可見財貨を被為招候共、乍恐木ニ登リ而
魚を求之笑をまぬかれず、徒ラニ心神を困勞スル而
已ナラズ、至極御払底之金錢を是を得シ為ニ散出シ
テ不返、益御困窮被為募候外無御座奉存候事、

尚此儀ニ付種々奉申上度儀御座候得共、兼而助八郎能存
し候通、至極筆を以奉申上候儀は不調法ニ御座候故、乍
残念差急キ大略而已右之通拙筆を以、不文之愚条奉申上
候、書外助八郎江篤ト申合候間、同人ヨリ御聞取可被為
成下候様奉願上候、誠恐誠謹言、

慶応三年寅正月廿七日

安田轍藏

文書原寸 縦一五糎 横二一〇・五糎

一四七五ノ二

口上扣

一 銀札之策御起立被為遊候ニ付而は、

上様より一文之御本手金不被為出候共、私工夫を以別

紙奉申上候通、琉球通貨有丈は屹と引替為致、可奉入

上覽候事、

但私之是迄策意を奪候者は、如何様可申上哉不奉存

候得共、海老原ニは尤ト申居候事、

一 今日銀札ニ似たる楮符被為作候儀、乍恐甚不宜奉存候、

此惡札前条御起立被為在候得は、私方寸之工夫を以、

雪霜之旭日ニ向候ことく忽消失為致、可奉入 尊覽候

事、

一 弥前条之策御起立被為在候得は、此外ニ忽チ余程湧出

之財を被為得候愚策、可奉言上候事、

此外ニ私深ク存込罷在候大策御座候得共、少々存含候

儀御座候故奉言上兼候、其上此程心胸疼痛仕候間、尚

更奉言上兼候、乍去何レ可奉言上心得ニは罷在候、

文書原寸 縦一八糎 横七三・五糎

一四七五ノ三

手扣

一 別冊之内、御疑之ケ条又御故障之ケ条は、何卒御下問

被下様、私より口達を以願上呉候様申候事、

一 一万一願通被仰付候ハ、四五ヶ年相掛御製造相成候鑄

錢、老年位成丈半年位ニ而も鑄替、奉入 御覽、手柄頭

度内含ニ被察申候、最初七拾五万両全御益上納仕筋之

由御座候間、其通り相出来申儀も可有之と奉存候事、

一 鑄錢方諸掛役々之儀は、至極公平成鎚成人柄、且同氣

ニ而尽死力御奉公相勤候心得之方、当人見込ニ而奉願、

御扶持米等は格別之事ニ御座候得ハ、御心付等之儀ハ

請負錢之内より差出度と咄為し事、

一 弥御免許相成候ハ、別段御益金五拾万両位ハ湧出之

工夫有之候と咄し候事、

一 六部・八分積金、且巴組と申仕法等は公刃至極之秘事

二而、誓詞迄も仕由御座候間、其思召ニ而御聞取被下
様願上置具様申候事、

一別冊目論見通之儀、隨見留申上事御座候間、若哉相違
仕候ハ、何様御咎目被仰付而も不苦、又通り出来
仕候ハ、

上様よりも決而御褒被下候半、左候ハ、是迄之悪名
相反候半とは計心願案相考候と咄申候事、

右同人内分申聞候咄別有之、又推察ヲ以申上候儀も
御座候間、何卒尊公様迄内分御聞置被下様願上候事、

文書原寸 縦一八糎 横九九・五糎

二〇三 京都ニ於ケル豊前中津藩探索書

長州再征ニ付紀州侯ノ建白及一橋公ノ奏聞等

(表紙)
一豊前中津藩於京都

探索書写

上

去夏 紀州公建白

御進筈以来、(後川)茂承不肖之身ヲ以辱義惣督之命蒙り、國中

を傾ケ敬徳ヲ尽し、当地江出張罷在、旧冬迄殆巨万之横
費有之候得共、実ニ不容易時勢効忠尽力之秋と奉存候ニ
付、右等費弊を不顧多方経綸仕候而、今日迄相働罷在候
義、唯々此御一挙ニ而幕府之御威稜茂相立、就而は海内
久安之基も可被為在事と、日夜奉願望候儀ニ御座候、然
ル処此度御糾問も相済、追々御手続も相付御処置振り一
条ニ相成候義ニ御座候、右は無此上大事ニ付容易ニ決論
いたし難き儀ニ候得共、窃ニ愚考仕候処ニ而は、此度之
御一挙、実ニ海内治乱之機

幕府御興廢之境ト奉存候、如此大造

御進筈ニ相成候義、一勞永逸之為之御長策ニも奉存候得
共、何分ニ茂此度は嚴然之御処置御座候而、天下之耳目
を一洗いたし、防長之外諸藩之内ニ茂、万々一覬覦之意
ヲ抱き候者有之候得は、此御一挙ニ而并処、右之禍心と

も消滅いたし候様、恢豁之御処置有御座度事ニ奉存候、

若又万々一日夜苟安を計り、曖昧之御処置等有之候而は、

今日海内諸藩之誹嘆を招き候而はならず、引続又々干戈

を動候而は不相濟候成行、天下之禍患年々深相成、詰り

幕府之御威勢御氣力を茂尽果、糜乱鼎沸之世とも可相成

と深憂仕候、他藩は不知、弊藩之如キは最早引続再挙は

無覚束候ニ付、何分此度之御一挙ニ而御盪平ニ御座候様、

若シ彼之敵命ニ抗拒仕候義も候へ、弊藩費弊之余りと

いへとも、直様弊甲凋兵を進め、諸道之実手と力を戮セ、

天朝幕府之御威光ニ依伏し、義旗を建、朝敵ヲ征伐仕候

事ニ候得は、必定虜胆を奪ひ、微功を

奏し可申、何分ニも此度は効忠之秋と奉存候ニ付、兼而

死力を尽し可申と覚悟いたし罷在候、願くハ目前姑息之

御処置無之、海内蒼生之為、久安之御深策御座候様、奉

深禱懇願度、此段伏而奉建言候、頓首敬白、

正月

茂承

一長州一件ニ付、去ル廿二日

(徳川慶喜)
一橋様御参内 奏聞ニ相成候次第、

一昨年激徒為鎮靜、三家老江軍令状為持、上京為致

禁闕近く及暴発、奉腦(徳)

宸襟候ニ付、尾張前大納言ヲ以及糺明候処、大膳父子(毛利敬親)

ニ而為鎮靜指登候処、家老共一己之取計ニ而、致暴発(広封)

候段奉恐入候之後如何之趣も相聞候ニ付、尚又監察永

井主水正ヲ以為致糺明候処、一々答申出、分明ニ相成(尚志)

候、尤大膳父子ニは不存事ニ候へとも、一昨年致暴発、

奉腦 宸襟候ニ付、拾万石減地、大膳ハ永蟄居、長門

は蟄居申付候也、

右之趣意ハ書取ヲ以、去ル廿一日 関白様江一橋様(三条實敬)

・閣老衆御持参有之候処、関白様ニ而、右は御届

欵御伺かと御尋有之候処、御届と被申上候、兼而

御委任之事、御尤ニ被思召候由、

但御伺卜有之候得は、

御所より被仰出候儀も可有之哉事、

一廿二日

一橋様初、会・桑・閑老衆御参内、前書之御処置振り御書付ヲ以奏聞有之候処被為聞召、右之所置ニハ又々動搖被為腦

宸襟候様之儀無之様、取計いたし候哉と被仰出候処、決而動搖等仕候儀は為致申間敷と被仰上候、右所置ニ而、御請不申上候節は、如何取計候哉と被仰出候処、左様御座候得は、是非ニ不及と

一橋様御答有之、御序御披キ、尚又伝奏ヲ以是非ニ不及ト申は如何取計候儀哉と、押而御尋有之候処、御請不仕節は是非とも征伐仕候より外無之と被申上候処、左様有之候得は宜と御挨拶有之候由、

一御処置被仰伝ニは、閑老衆之内御老人、大小監察、長州境迄大膳父子御呼出か、又ハ長州迄御越、大膳父子(毛利敬頼・広封)江直ニ被仰渡有之候との御事、

右御請不申上候節は、夫より閑老衆御帰坂之上、軍事御取懸ニ而ハ事遅々ニ相成候ニ付、直ニ御討入之御手合ニ相成候様との御計被成、長州へは(長行)小笠原様御越ニ

相成可申、(勝勢)板倉様御在宿ニ而、自然軍事御計之事ニ御座候節は、忝岐守様御在坂可然、しかし長州江当分忝岐守様御越被成候由相聞候事、

正月廿六日

芸州表江為御用早々

罷越可申候、

小笠原忝岐守

芸州表江為御用

永井主水正

老中之内軍艦江乘込罷越候節、付添分指遣候間

内意申置候事、

軍艦奉行(利義)

木下大内記

大坂町奉行(義斐)

井上備後守

御目付(信憲)

松浦越中守

同

小林甚六郎(政憲)

時宜ニ寄筑前行、外ニ御使番老兩人被罷越候由、

御出立之儀、巷説ニ而ハ明廿八日とか御発途と申事茂
承り候得共、其実之末々探索出来不致候事、

正月廿七日

本文御比合之儀、只今木下大内記様江相伺候処、弥来
月朔日二日兩日之内、御出立之筈ニ御治定之由、尤蒸
氣船三艘ニ而被為入候趣、御人数等巨細之儀未タ相分
不申候、

冊子原寸 縦二五種 横一七種 七枚

一四七 長州処分ニ付幕府ヨリ奏聞

十万石削除其他ノ件

写

正月廿二日惣参 内、、、、、父子家政向不行届、家来

共一昨年七月、父子黒印之軍令状所持、京都江乱入、奉

对

禁闕及砲発候段、不恐

天朝所業不届之至ニ付、、、、、可処殿科候処、益田右衛門(親施)

介・福原越後・国司信濃等於出先条々趣意取失、非礼非

義之儀暴動ニ付、三人斬首之上備実檢并參謀之者共夫々

加誅戮、任用失人之段恐入、悔悟伏罪相嘆罷出候上、自

判之書を以申立、於其後疑敷件々相聞候ニ付、永井主水(前志)

正・戸川鉦三郎(安慶)・松野孫八郎遣シ相糺候処、恭順謹慎罷

在候趣ニ付、前々父子朝敵之罪名相除候、乍去畢竟不

明、統御之道を失、家来之者抱シ朝敵候段、右其科不

輕、雖然祖先以来之忠勤を思ひ、格別寛大之趣意を以、

高之内十万石被召上、(毛利敬親)、(同広封)、、、、と蟄居隠居、、、、ハ永蟄居

家督之儀ハ、可然者相族可申付候、右衛門介・越後・信

濃家名之儀ハ永可為断絶候、此段遂

奏聞候、以上、

正月

長州処置之儀ハ祖先より勤功も有之候ニ付、寛典被処候、

思食之処、屹度決議言上之趣聞食候、猶両国安穩可奉安

宸襟御沙汰候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第七四六号

文書ト同文ナリ、但シ本文書ハ慶応二年トスルモ慶応元年ノ誤リカ、「忠義公史料」ハ慶応元年トスル

文書原寸 縦一八・五極 横二二九・五極

〇二四六 長州処分ニ付幕府ノ令達

一四六 京都桂右衛門ヨリ蓼田伝兵衛へ

長州再征、英仏及幕薩關係、石垣銳之助、関

研蔵ノ書状三通添 但三通ハ別記ニ在リ

〔包紙ウツ書〕
「蓼田伝兵衛様

平安要用

桂右衛門

二月六日発

自京師

〔端裏書〕
「蓼田氏」

猶々、喜入家江其外い細不申越候間、御序を以可然

御演舌被下度御頼申上候、御同席中江も此度ハ何も

不申遣候付、是又宜敷御伝声御頼申上候、

拙遠行両氏より相達候書状三通相添申候、

依幸便一札致啓上候、不順之氣候御座候処、先以

御両殿様其外様益御機嫌好被遊御座奉恐悦候、貴所様弥

以御安寧御健務奉珍重候、小生ニも無異条碌々消光罷在

候間、乍憚御放念可被下候、当方先万事至極之無事ニ御

座候得共、長防御処置之一条、決議言上ニ及び、既ニ小

笠原閣老芸州江罷下り、裁許申渡相成候様子ニ御座候、

右言上之次第等ハ、西郷方より巨細申上賦ニ談置候間、左

様御心得可被下候、長防人心如何候半、別而難涉之訳と

相考へ申候、とても幕府戦争之はまりとハ更ニ不相見得、

幕府ニハ極寛大之御所置と見込候様子欵、畢竟尾老侯御

建議之跡をふまへ候筋欵と申事ニ御座候、よもや只今ニ

而ハ千万承諾之処無覚束、若哉其通不参候而ハ、実ニ大

変ニ御座候、一度戦ひヲ初候而ハ、此末いかんとするこ

と不能ニ立至り可申、慨歎至極ニ御座候、扱御国嫌疑之

一条ハ、幕中大ニ沸騰いたし居候由、乍然此度大久保

越州登坂以来、委く説得被成、今ハ何之訳も無之由、右

本朝貞

ハ越前之中根雪江より小松氏直咄御承、右之形行ハ御申上越候而可有之候間致省略候、将亦此度我々共長崎滞留之節、英夷兩名江致面会候砌、京都建白一条之儀、岩下(方平)氏・伊地知申談、再度断判ニ及び、最早致氷解、乍然此未尚又

拜謁いたし、兼而御見居之御趣意致承知候得は、当分之ミニストルも日本江ハ昨今之事故、情実も能く不致貫徹候故、頻ニ拜謁仕度所存山々之由、全く彼より押々踏付罷越候趣意ニハ更ニ無之、弥御親睦を相結度との好意中より出候賦ニ相見得居候間、当節柄嫌疑も有之、不容易事ニ而

御許容之程ハ無覺束候得共、御先代様太平之時さへ、磯江被為召候儀も有之候付、往々蜜盟之訳も有之候間、可相成ハ鳥渡

拜謁被仰付候儀も難計候間、何分形行を以野村罷帰言上仕候ハ、思召も可被為 在哉と申談置候次第ニ御座候処、先御見合之段、先度致承知、御尤之御儀と奉存候、

然処、伊地知方江建白一条断判致替候様、就而ハ初之断

判も無難程能く相濟、最早我々共ニハ不案之廉も有之間敷見居引別れ、幸岩下氏ニハ江戸表出府ニ付而ハ、横浜ミニストル江も直談相成候得は、尚更安心ニも可相成申談置、岩下氏江相託し、長崎表断判之趣意ニ而、建込被

及候処、余程ミニストルニも受込宜敷哉ニ、未い細之儀ハ不被申越候得共、此度木藤市助便より大略承候、尤仏之ミニストル代カシヨンと申者江も面会相成、是以同断、右之次第ハ自木藤罷帰候上、乍大略御聞取被下度、是迄外々よりも英同様疑ひも為有之由候得共、当分ニ而ハ各国共却而薩之処ハ一統信し候との咄ニ御座候由、最早右一条ニ付而ハ、何も後難ハ有之間敷、此度長崎江伊地知方迄被仰付越趣有之、案内ニ存候付、何分不容易事故、

致相談度申越候間、先只今通ニ而、少しも掛念之廉無之、勿論初より之断判ニ而致得意候上ニ、今更ニ相成、改而申込候而ハ、却而疑惑ヲ生し可申ハ案中ニ而、横浜ミニストル江も同断之返答ニ相成居候上ニ而、かた／＼如何

と申談候間、

御厚慮を以被仰出候上、御趣意背戻仕候場ニ相当、如何敷奉存候得共、同席中申談、此段奉願度御座候間、能々御汲取、吟味之形行宜敷御披露被下度御頼申上候、就而ハ右一条も有之候付、我々共引取之儀も致承知居候間、指急ぎ申賦ニハ御座候得共、大久保より御聞取被下候半と奉存候、仏之カシヨンと申者ハ奸物ニ而、夷人中間さへ不宣、専幕奸吏江結込、權威ヲふるい候者ニ而御座候由、然処近頃幕之奸吏国元但馬守と申者初退職ニ相成候折から、当分カシヨンも便り少く相成居、薩より致面会候処、大ニ嬉しがり、何事も致世話候賦ニ御座候由、右幕吏国元始之者共退職相成候始末之儀ハ、大久保より御聞取相成候半、柴田東五郎を以、小笠原閣老侯江建白、新聞一条類ニ難し候処より、国元等も右之時宜ニ相成候半欵と申事ニ御座候、将又此節遠行人数より之書音、長崎より相達、実以 皇国之至難、中々不容易時機ニ相及候半と、苦心之至ニ御座候、得と御熟覽被下度、尤

御両殿様江も御上ケ被下度儀と奉存候、書面通色地ハ不相分候得共、大策うまく被行候得は、此上なき御国家之大幸ニ御座候得共、如何候哉と実ニ待遠く御座候、遠行人数一条之儀、幕江申立之趣意、尤ニハ候得共、此内より御治定之通、断然先只今形ニ被召置可然儀と申談候間、是以左様御汲取可被下候、外夷之情態、横浜辺説之通、大體相変儀も無之様ニ相見得、右辺之処、木藤心得候分ハ御聞取可被下候、先ハ乍毎龜相之至ニ御座候得共、宜敷御賢覽被下度所仰候、恐々頓首、

二月六日

桂右衛門
(久武)

蓑田伝兵衛様

人々御中

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第五四号文
書下同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・五糎 包紙原寸 縦二七・五糎
横 二五四糎 横 四〇糎

一〇〇 御納戸蔵出入金品取扱方改革条々

御納戸蔵御改革付、以来左之通取扱被仰付候、

一金銀錢直成被召替候節も、其当日三・八月御蔵改同様詰御徒目付・御納戸書役立会現物相改、即日払替手形差出候様被仰付候、

一御蔵御在合品痛損御不用相成候節は、御徒目付承届、蔵役取しらへ、片付方申出候へ、猶又御徒目付立会、我々見分之上形行申出、何分片付方可被仰付候、

但諸品長々痛損、夫形召置候得は、何れ焼捨被仰付外無之、看々御費之事情間、専蔵役手伝氣を付、

右仕抹不相成様取扱第一之事情、右付而は、毎年

四月九月此両度、我々共御蔵内都而可致見分候間、兼々等閑之取扱有之間數候、

一砂糖・焼酎類御払之節、焼酎之儀は頭計例いたし、風袋掛改置、其上相払候得は、へり欠・払欠明白相分候間、御徒目付見分証印ニ而銘々帳面ニ相記、右を挙立欠払等は迄之通被仰付、尤砂糖之儀も右ニ準致取扱候

様被仰付候、

但御蔵御在合品之内何そニ付、奥向之面々申受願付

而は、一ヶ月二十日之日取しらへ相伺候様可致、

無左候而、願ニまかせ時々相伺候而は、外御用向之差障可相成、尤砂糖・焼酎之儀は、三月節句前

并盆前まで申受被仰付候、其余は願出候而も申受

不被仰付、勿論荷作具之品は御用ニ付旅行之人迄

申請被仰付、御徒目付之儀は定式人数迄ニ而、諸

向掛江は申受不被仰付候、右ニ付急速旅行之人は

十日不可限候、

一御目見等之節、中紙・太刀・馬代其外進上物は勿論、

何そニ付申受品・御買入品等ニ至る迄、都而速ニ払替

手形又は引付相渡、時々首尾為相済候様被仰付候、是

迄右様之首尾延々相成居候処より不締も難計候間、以

来右通ニ而、進上物等相納候日より日数五日より内、

引付并払替手形等之首尾為相済候様被仰付候、

但御鷹方之儀も可為同断候、

一月拳払帳之儀も成丈ヶ其月末ニ払切之首尾相成候様、

自然月末ニ首尾成兼候節は、翌月五日より内、是又致首尾候様被仰付候、

但月拳帳我々共承届候上、御用部屋江差出候様取計、

其外何そニ付而も都而可為同断候、

一御蔵入払相成候総、月々御用部屋江差上候様被仰付候

間、算違等一切無之様旁入念取扱可有之候、右ニ付而は、八月中之入払は九月七日より内取仕立、九月中は

十月七日より内取仕立差上、月々右ニ準シ致取扱候様被仰付候、

但総帳認方ニ付而は、此節取仕立相成候通ニ而、以
来右江基不連続之儀無之様可致取扱候、

一御用部屋并御小納戸上り品之儀、羽書御座印相居被相

下候付、我々共致見届印、是迄之通速ニ払出相成候儀
は勿論、万一八ッ後等相成、我々退出之上、右様御用

之節は御徒目付承届払出置、翌日其首尾我々共江致引
合候様被仰付候、

右は御納戸御改革ニ付、御用部屋江掛被仰付、追々
取扱向何篇綿密被仰渡、此節御治定相成候付而は、

以来等閑ニ心得、不連続之儀は無之筈候得共、尚又

永年為心得、此旨致壁書置候様御側役勤島津求馬よ

り致承知候事、

慶応二年寅二月八日

御納戸奉行

文書原寸 縦一四・五糎 横二九九糎

一頁一習書頭取助兒玉利蔵ヨリ久光公へノ上書

高祖忠久公高倉王ノ王子説確定発表ヲ請フノ

件

(包紙ウツ紙)
一上表

習書頭取助

兒玉鉄矢

封

臣利蔵誠惶誠恐頓首百拜上言、臣謹惟、自古聖帝明王之
治國也、必先在正名分明義理、今天下騷擾、動諸侯各有

為割拠之勢、当是時堂堂三国、幸上有公在以正名分、臣嘗聞於之侍臣、

公博聞強識、夙夜聞政、日勉勉不怠、政務之間則誥和漢之史、常不怡玩器焉、臣愚昧、方今有所不解如何、則

大祖公之事跡、實可歎息痛恨也、熟閱國史怪說紛紛、何是何非、至於甚以至於八文字某之為孽子、嗚呼為臣豈不

慷慨乎、天下之人或称鄙人之子、或唱姦人之子、豈不大恥也、臣常慨憤痛恨、不安寢食、

公幾許奉

勅至 京師、然未聞敢歎願之及於此、是臣所不解也、臣謹按、公断然速建言、以可明其事跡於天下、而其所以建言則使

大祖公称

高倉王之王子、而王贈一品親王、以永祭其

神魂、

祖公亦贈官而使其錦裔島津源氏如斯奉

勅、則大義皓然於天下、而名分亦正乎、若然則足慰在天

之

神靈、今

公孝義御下而有察於茲、断然速建言而使慰

祖先先公之

神魂、則衆皆靡然而興於孝、若夫如斯、雖使臣就鼎鑊、踊躍而受之、伏希憐察於鳥鳥之情、臨表展轉不知所言、臣利藏誠惶恐懼、

慶応二年丙寅二月八日

臣兒玉利藏百拜

文書原寸 縦一六・五種 包紙原寸 縦二八種

横七六・五種 横二〇種

一頁ニ 沢勘七郎ヨリ本田弥右衛門へ

將軍上洛ノ件

拝啓、此間御尋問之

御上洛 御発興日限、御聞込之通、海路差支ニ付、当月

十三日陸通東海道筋御上洛之旨、十日出次飛脚を以被

仰付候、右為御知得御意候、以上、

二月十七日

猶以英夷軍艦六七日頃渡來、追々諸夷軍艦可參旨茂

申越候、此事件ニ付、海路差支之趣御座候、以上、

沢 勘七郎

本田弥右衛門様

文書原寸 縦一六糎 横五〇糎

一六三 土岐新兵衛小倉ヨリノ報告

長州処分五ヶ条

(端裏朱書)

丙寅二月十八日

小倉より

土岐新兵衛

長防御所置承得候次第左ニ申上候、

今度長州為御所置、閣老小笠原(長行)老岐守様、当月四日大坂

出帆、去ル七日芸州広島江御着船相成、其外幕役別冊之

人数都而、去ル十一日御着芸相成候由、尤御所置振り、

左之通承得申候、

一大膳父子剃髮入寺、

一封土十萬石被削、

一他国より入込居候浮浪輩、不殘本国江引渡、

一昨年正月再発之激徒悉科戮、

一毛利家血食之儀は末藩中より可然拳人材、

右五ヶ条、大膳父子芸州広島江被召呼、御達相成候賦

之由候得共、父子病氣等ニ而不罷出候ハ、末藩之者

共被召呼、是又同断ニ候ハ、家老之者共被召出、何

日限御受之御届可申出被仰渡候上、異儀ニ相及候ハ、

則より御人数被差向候哉ニ相聞得申候、尤昨年十一月

大目付永井主水正殿・御目付戸川鉦三郎殿(安斐)・松野孫八

郎殿、芸州ニ而長州家老穴戸備後之介始、其外隊長之

者共被召出、御糺問之形行は追々申上置候通ニ而、其

節八ヶ条之御答之件々、書取を以可申出旨御達ニ而、

右穴戸其外より書付を以致申分候文言之内ニ、左之通

書認為有之由、

右条々御答申上候次第ニ而、別段齟齬仕候儀は無御

座、依之此上は御寛大之御所置を以、大膳父子本之

通官位御称号被成下、三都之屋敷茂如本被下置候ハ

、参勤等も仕、幕府江御奉公茂仕度奉存候、勿論

尺寸之地茂御切割御取揚之儀は、更ニ存茂不寄候、

右文言丈は至極之御秘事ニ而、御受取之上御上坂相成候由、然ニ今度五ヶ条之御所置相成候ニ付而は、戸川・松

野之兩人論説致齟齬候処より、兩人之分は芸州表之御用

御免相成候哉ニ相聞得申候、尤此上は何れ御所置被仰渡

候上、畏と違背との二ツニ而、治乱之兩端相決候場合ニ

而、井伊侯御人数五千人計、榊原侯三千位、其外大垣戸

田侯・紀州侯御人数迄、都合一万人計は、昨年十一月よ

り芸州江出軍相成居、日々幕大之雜費ニ而、何迄之限り

も分兼候処より相苦ミ、只管御打入を相待候向ニ相聞得

申候、

長州藩

赤根 武人

久留米脱藩

(郁太郎、祐広)
洲上幾太郎

本名石沢茂一郎

当分変名
生国不相知

峯 郡之助

筑前脱藩之由

柴 輪兵衛

右四人事、長州より昨年三月、町人体ニ姿を變、大坂表

江為探索方致流浪候処、幕府之手より被相捕、大坂江入

牢相成候者共ニ而、昨年十一月永井氏杯芸州江被列越、

長州江為説得被差遣候処、赤根は山口城ニ而逢死罪、外

三人は今ニ行衛不相知向ニ致取沙汰申候、

戸川鉾三郎殿家来

今川忠治

松野孫八郎殿家来

安島順介

右兩人事、長州奇兵隊中之者共ニ而、子細は不相分候得

共、致脱走江戸江差越、片書通混と致奉公隨身之者共ニ

而、是以昨年被召列、長州表江為説得被差廻候処、右兩

人は先達而馬関より小倉江致渡海、当所より戸川氏杯江

差送り相成申候由、右次第ニ而何様之説得欵、其辺は探

り付不申候得共、当時防長形勢、右体之説得共ニ致承服候様之勢ひとも相聞得不申候、

右通承得申候間、為御見合、別紙探索書三冊相添、此段申上候、已上、

寅

二月十八日

小倉滞在
唐物締横目

土岐新兵衛

生産方掛
御裁許掛衆

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第四卷第五九号文

書ト同文ナリ

文書原寸 縦一六・五種 横二七二種

〔只四〕 西郷吉之助ヨリ 養田伝兵衛へ

長幕ノ関係

〔包紙ウツ巻〕
「養田伝兵衛様

要詞

西郷吉之助

〔朱〕
京より

〔丙寅〕 二月十八日

御向殿様益御機嫌能被遊

御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ御当地之形勢も格別相変

候義も無之、芸州表之談判もいまた不相分、当月八日比

着之賦ニ而御座候由、弥伺通之所置を以參候へハ、決而

承服ハ不仕事ハ、幕府ニおひても疾存知之訳と相考申候、

乍然戦を始候様子更無之、就而ハ何そ細工をいたす賦欵

も不知事ニ御座候、先此所置ハ表通之訳ニ而、大赦と欵

何とか申ものを以て、至極寛大なる所置ニ出候茂不被計

事ニ御座候、いつれ当月中ニハ様子相分義ニ御座候間、

相知次第、直様急飛を以申上候様可仕、天下之形勢も此

一挙ニ変替可致事と奉存候、諸藩之模様も余程相変、

幕威之衰弱を真ニ知、嫌疑を被掛候而も畏敷なりものと

合点いたし候様子と被相伺申候、大道之相立候所、いつ

れ心服可致世態とハ相成、人心之帰向、是より外ニ無他

次第ニ成行申候、具眼之人ハ大ニ道ヲ起し可申時と奉存

候、若哉戦相始候ハ、諸方ニ蜂起可致、甲信二州之辺

ニ茂其萌相頭候由、一度動言候ハ、瓦解可致事と奉存候、

大坂ニおひても大久保越中守屢建言いたし候得共、頓と相行れ不申、最早病と称し御暇願出候由、東婦之含と被相聞申候、板倉侯ハ随分御宜敷、小笠原侯も今日之事ニおひてハ、是と申御失ハ無之候得共、何分御断シ被成候処、両侯共乏敷込入との趣、越前中根雪江江相咄候由御座候、其上板倉侯ニハ服心之臣ニ奸智之者有之、此人專事を任シ居候由、是か第一之邪魔を致すと申居候由御座候、勝安房守如き之人物ハ只今天下ニおひて上等之人ニ可有之処、却而氣違之様ニ幕人ハ申居候由、大久保之建言も、一向不通由ニ被相聞申候、是位之急難ニ迫候而も人物を欲せざる事ニ御座候へハ、衰運極候事ニ御座候、御苦察可被下候、江戸表ニおひて岩下君二度談判も有之候由、英人ハ余程解ケ候由、仏人之処、至極幕吏と結居候間、いまた十分ニハ参兼候半、乍然仏より大ニ信頼之向相見得居候間、必やり付可申との趣申来候、何分近来幕吏大ニ横浜夷館江立入候義を相禁シ

御国人ハ尚更付添居候由ニ而、存分之咄合出来兼候向ニ御座候、必御世話被遊訳ハ有御座間敷と相考申候、此旨荒々奉得御意候、頓首々々、

西郷吉之助

二月十八日

菱田伝兵衛様

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第六〇号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一五・五糎 包紙原寸 縦一六・七糎

横 三一五・五糎

横 二一・五糎

一四五 肥後藩士岡田榎蔵ノ西洋見聞録

肥後藩岡田榎蔵外国渡海致シ、彼地之風聞国司より御尋ニ付、逸々申上候写

御尋ニ付、逸々申上候写

一今般西洋滞留中、彼方諸生之嘶或ハ開港之風説等、日本之事ニ係候儀は、心を留承候ニ、兎角日本を惡敷様ニ申者、十二七八にて、間ニは、公辺ニ対恐多事も不_レ少候得とも、筆記仕候儀ハ相憚、以前差出申候航西小

記中ニは認入不申候処、尚彼方内情見聞之次第も有之候ハ、認出候様御内沙汰ニ付、周彼方政府之内情は職密ニ而可被知様も無御座、唯道路之風説之事ニ付、実否何様ニ可有之哉、承り候俟録上仕候、

一方今歐羅巴州ニ而、英吉利・仏蘭西・魯西亜・プロイセン「ステンレーキ」、五強国と唱、其他イタリヤ・和蘭・テ・ネマルカ等皆文明之政事稠、互ニ定約を押し立、信義を以相交居申候、然れ共其政府々々之内情は相互ニ異心を挟ミ、若交際之間、定約ニ背き信義を失ふ国あらハ、猶予なく討伐して、其国を取ん事を望、英・仏・魯は其志最甚しく、仏政府ニ而英国を亡さん事を希望する故ニ英国之過ちを見出し、是を十条ニ取罪せんと企をなし、英国も仏ニおのゝくも同様なり、魯も日本信義之様ニ唱候得とも、日本・支那を取んと欲する内情は無之もあらず、然シ一度条約を取替したる上は、罪なきに其国を伐候事能す、仮令魯ニ而も英ニ而も、私ニ日本を討んとする時は、仏米等より日本

ニ応援して妄ニ伐して一致せず、若歐羅巴諸国内、日本政府之為す如き所置あらハ、決而猶予せず、向ヶ各国申合、日本討伐すへし、近来も已ニ英之ミニストル官より日本討伐申出せとも、諸国一定之返答なし、多分日本討伐之儀ハ此俟にして押移へしとの風聞なり日本速ニ即国強兵之政を出し、各国と交るニ信義を以て定約ニ背かざる様無之而は、実ニ危き時勢也と語り申候、

一 亜米利加シヨンメルと申者ニ、巴理府ニ而逢し時、同人之話ニ、英吉利・仏蘭西之両国は、頗る日本を取ん事を希望するの模様なり、夫故今薩州と幕府ニ討幕之企をなすといへとも、英国人は不知体ニ而、薩人等之英国ニ至り、諸器及軍艦を求、或ハ諸學術伝習杯する、懇切ニ取扱置て、夫を幕府江ハ何之沙汰も不致、又幕府ニも懇切ニ交り、此節横浜ニ於て、日本より海陸軍伝習を願候処、英仏相争、伝習せん事を望める人ニ物を教る事ニ相争て教る之理なし、英仏日本をなつけ、

終ニは吾者と為さんとの遠謀なり、又ハ幕府と薩との間ニ事あらハ、其勝負の模様ニ寄、必勝利之方ニ応援すへしと語り申候、

一 亜米利加シヒルと申者ニ出会、其話、日本人ハ其性鋭敏ニして、物事ニ合点する事速也、又国民士随分貿易する事ハ好めとも、政府ニ而ハ国民ニ貿易ハ不好と外国人ニ申向レとも左ニ非ず、凡宇内人民欲なき者あらず、皆金銀を得る事を欲するハ人情なり、金銀を得んと欲するにハ、貿易なさずハ不能、然ニ德ニ日本^(特)人鎖港の説と唱、或ハ外国人を殺害する事有、此事実を考るに、外国人を惡むニあらず、是ハ幕府ニ怨ミある者、政府に迷惑せしむる者ならん、若外国人を殺害する時ハ、政府より莫太之過料を出さるを得不得して、終ニハ幕府疲弊して、日本国諸大名を指揮する事不能ニ至らしむる^(マ)述なるべし、左なくして外国人を嫌ふのミニ而殺害するならハ、日本人ハ世界中之尤痴愚なる者なり、其故ハ幾千万之外国人を五人十人切殺たるとも

人種尽べきや、又外国人其勇氣ニ恐怖して、再び日本に行ぬ様ニなるべきとの存念ニや、何とも笑へき事なりと語り候、

一 仏蘭西之シャルト申者之嘶ニ、日本ハ氣候、世界ニ未富国強兵之場ニ至らざるハ全其国政之不宜故也、其政事何事ニよらず御老中之意より出て、万民之心服するとせざるとニよらず所置を為す、依て人を用るに、門閥を以て人材を擧ず、一度人材を擧用ると雖、重役の意ニ背く時ハ、忽ち廢して再用る事なし、故ニ人材多くハ下ニあり、上ニは愚蒙之人多し、是其国之一致せざる所以也、又外国人ニ接するも、諸談判之時、理ニ過る時ハ逃れし返答ニ及び、後日再其末を押守る時ハ前日の説を齟齬するニ至より大ニ困而、終ニ費と成様之事多し、且又古より貿易せざる国ニより貿易ニ暗く、商人等今日之利のミ争て、吾々さへ利徳あれハ、他人と後之人之事ハ思ハざるか故ニ、日本國中許多損失となり、終ニハ吾身之利徳も遂ぬ様に成行ニ心付す、西

洋ニ而ハ幼年より商売学校ニ入、商売之學問をすれども、日本ニ而は町人之子弟ハ教なし、只算術・手習を稽古して、目前之利を得る事を知之ミなれハ、於日本商人を賤む事甚し、尤日本商人ハ學問を成す事疎き故ニ、賤む之理もあるへけれハ、士官之其位ニ有て、其位を失ニ比すれハ、町人の今日之活計ニ困らす、他之助を請ざるを見てハ、又士官ニ劣ざる事有、然れとも日本ハ往古より風習ニして士ハ飢食粗服して、其家貧乏且其人材なしといへとも、是を充分として商売を賤むもの多し、今日本をして富国強兵ニ至らしめんと欲ハ、産物を開、功者ニ商売を為さするに非ハ不能、且商人にも商売に係る學問を為さしめ、政府ニ而も貿易に心を用て、諸産物を輸出して金銀を得、其金を以武器を備るに非れハ、強兵たるを得へからすと語り候、

一 英吉利ニコトルと申者之嚙ニ、方今世界之模様を見るニ、国を治め民をなづくる事之容易成ハ、日本の如ハなし、日本ハ数百年來昌平打続き、殊ニ往古より高貴

之位ある人を見てハ賢愚ニ不拘尊敬する事甚し、故ニ高貴之人、其臣下ハ勿論、町人・百姓等ニ些少之物賜る時ハ喜悅して、親族・朋友打寄相祝し、其品を終身之重宝と成す、如此なる故ニ、今上ニ仁を施し、公之政を為す時ハ、國中忽ち一致して、國民等其恩を報せん事を競ふ欤風ニ成る事ハ、又掌を反す如くなるへし、若歐羅巴ニ而、日本之如く平人ハ国帝を仰見る事を不許、宰相重役之通行ニは人を払退く事を為さハ、忽ち人氣沸騰して、不日ニして其国可亡、故ニ国帝より人民を取扱ふ事至て親切也、已ニ昨丑年、仏良西國中コレリヤ病流行之節、国帝自ら病院ニ至り、病者之安否を懇ニ尋問する事、英國同様なる故、仏国女王之恩を報せん民ハ日々仏帝恩沢を仰ぎ、英國之民ハ又女王之恩報せん事を忘るゝもの無之、蓋

日本と歐羅巴と、往古より其政事・風習之異なるに依て也と語り候、

一 巴理府滯留中、薩州人石垣銳之助(新納久備) 本名新納某、此度参り居候内之大身之由、重役

関研蔵本名五代才助、此外考人名前失念仕候、以上三人ハ役人ニ
者ハ長崎ニ而親友ニ渡海仕候諸生十六人、都合十
九人、又外ニ長州人八人、土州人貳人参り居、何れも遊
学生ニ御座候、併面会ハ新納以下之三人迄ニ御座候 此三人は
英国を本旅館として、仏蘭西等之近国ニ懸り何欤周旋
之様子ニ御座候処、兩三度面会谈話之節、何故ニ事を
公ニして渡海不被致哉、ケ様私に忍ての渡海なれハ、
公辺より異心を挾て之事かと疑念懸し間敷ニも非すと
申候得共、五代ノ曰、今日本之事情薄氷を踏如くにし
て、一日も因循し難く、幕ニ而速ニ奮発し、日本国欧
羅巴各国之交り同様ニ相成候ハ、豈幕之臣下たる薩
より許多之金銀を費し、斯之如き事を為すへきや、然
ニ依然たる幕吏之因循深故、是を嘆く之余り、物入も
不厭、ケ様ニ遠海を隔て是迄罷越候は、日本之為にて
日本之為ハ即幕府之不為哉、唯々日本欧羅巴に劣らさ
る様との寸志ニして、敢而幕府ニ異心を挾て之事ニハ
毛頭無之候へとも、ケ様之事を幕府江申上候而も、決
而聞済可成勢ニも無之故ニ、差当て日本之危急を維持
之為之渡海也と申候間、私より、貴君久敷此地ニ遊ヒ、

固より波濤弁昔日より又歩進メリと申候得は、五代よ
り、左ニ非す々々と是又笑申候、

一帰帆之節、船中にて乗合之諸西洋等之噂には、今英吉
利より薩州江心を寄、薩州と幕との間ニ事有ハと希望
する模様成故ニ、龍動にて薩州人を懇切に取扱事、幕
府之使節より丁寧也、丑年ニ島津(島津久逸)三郎二男、龍動江渡
海ニ相成候由、依而欧羅巴之風聞ニは、薩州ハ却而幕
府よりも權有之、不遠内日本国中は薩のものト可成抔
と申唱候へとも、此儀は決して行われざる事也と心有
んハ疾知、薩と幕と之間ニ事あるを待ハ、幕府を疲弊
せしめて、終ニ日本諸港を英之物との事なるべしと、
取々の嘶ニ御座候、

右之外、諸人の諸話、間巷之風説、日本之事ニ係り
候事件、前文ニ大同小異、別ニ録上仕候程之事承り
不申候、以上、

慶応二寅二月下旬

岡田榎蔵(撰)

一四六 小田村素太郎ヨリ芸藩へノ歎願書

長州処分ニ付

〔表紙〕
「小田村素太郎より芸藩迄差出候歎願書」

内々演説

〔裏行〕

此度御当藩迄小笠原公御一達御到着、弊国結局御処置可被仰渡由ニ相聞、尤御沙汰筋ハ未発ニ承知可仕様も無御座候得共、道路之説ニハ云々之被渡仰可有御座由ニ茂承り、何共取留之儀ニは無御座候得共、億万一も弥右様之御沙汰被仰出候而ハ、誠に驚愕之次第、備後之介ヲ始、諸隊重立候者より申上置候主人父子誠意并闔国士民一統臣子之分無余儀情実之件々、巨細被聞召届、御落意御承知被成下候御甲斐も無之、素より主人父子ニ於てハ、恭順謹慎

天幕之御沙汰を大切ニ奉存候得共、士民一統無余儀情実申立候節は、主人父子心底ニ不任勢ニも可相成、扱々主人父子従来之赤心二国民情ハ連々尊藩迄及陳述ニ、尚

〔尖戸邊〕
備後之介・永井殿迄、十一月廿日御応対席ニ而御直ニ申

〔尚志〕

上置候通、京師暴動之始末、主人父子不存儀とハ乍申、兼而示方不行届ニも相当候故、東西藩邸御取揚、官位御称号等被召放之旨茂、尖ニ御請申上、三年掛り之今日迄も恐懼謹慎ニ引籠居、暴動之巨魁ハ速ニ嚴重申付、余謀之者も夫々令所置、一昨冬尾州督府之御検証ニ迄、相備候儀ニ候得は、暴動之罪は已ニ帰着仕候処有之、主人父子示方不行届之御譴責ハ、藩邸御取揚・官位御称号被召放候所ニ而被為濟、此余ハ最早平常之御沙汰可被仰出哉と計、国内一統奉渴仰之砌、今般云々之通被仰出候而ハ、乍恐過刻之御扱振と悲歎泣血、孰レ茂鬱塞之下情開散可仕期茂無之、此末如何可相成哉と、役方之者共痛心此時ニ御座候、畢竟攘夷期限御布告等、列藩江之御信儀も瞭ニ相貫キ

公武御合体之御姿は、何迄も御勸捻被為在候得は、京師

暴動之可起様も有御座間敷候、現在馬関攘夷、

天朝よりハ監察使茂被差下処、幕府ニおゐてハ御齟齬之

御沙汰をも被仰達、主人父子東西奔走国力を罷らし人命ヲ損し、大敵之鋒先ニ立候儀も、乍恐

幕府之御籠絡ニ縁り、御愚弄遭候形と相成、いかにも迷惑奉存候次第ニ而、達智明方を以御照覽被下候へば、其是非曲直之由て判るゝ所ハ御洞察も可被為在、但大樹公ニハ江戸御城并ニ二城御城ニ於て、主人江御直ニ上意被仰聞候旨も有之、乍恐御代被為替候儀ニも無之、根元之参り懸りハ可被知召御事ニ候半と奉怨慕候次第、畢竟根元之所江御反省不被為在、只管京師暴動之枝葉而已江御着眼被成候故かと、頑固愚直之民心、兎角疑惑仕居、扱々民口難壅ものにて、上巳上元之大慶其外、幕府重立候御役向、毎々御進退茂有之、何角と不穩御模様ニ茂被相伺、尚外国人御取扱之御始末、近々ハ京坂御混雑等、乍恐如何之御次第ニ候哉と偶語仕る模様ニ茂相見へ、何分ニも京師暴動ハ、不一形奉恐入候次第ニ候得共、前文之通、其巨魁・参謀等敵刑、御詫之次第とも相立、主人父子不行届之儀は、已ニ御謹實も被為在、三年掛り謹慎罷

在候得は、此余弊国御所置柄ハ、京師暴動取計御着眼不被為成候而、其由て来る所江御反省茂被為在候ハ、於幕府御忠恕之道も相立、御寛典之

叡慮も、尖に貫徹可仕事ニ可有御座、左候得は、鬱塞之下情も一時ニ開散、無此上難有次第ニ候、士民一統懇願罷在候、此段乍毎々国内情実不得止事所を以て、又々委細ニ陳列仕置候間、永井殿ニハ、下地之御手続も有之、且申立置候次第、いづれも巨細被聞召届被下候儀ニ候得は、此段御耳江被入置被下度相願候、尤情実は切迫之余、言語文字等ニハ忌諱ニ触候義も可有之哉と、可成丈ヶハ差扣候得共、先達ツツテ而衷底意無腹藏申立候様ニと御達も有之、情実在体不申陳候而ハ万一意味違之儀可有之も難計、左様候而ハ、最早取返しも六ヶ敷候間、尊藩御含迄ニ申陳置候、此余永井殿方御役向思召も被付候ハ、御当地滞在之者被召寄、御直ニ被聞召度候、旁可然御取計可被下慎而奉頼候、以上、

寅二月

〔讀表紙ニアリ、卷〕

「丙寅二月 長州」

冊子原寸 縦二四・五種 横一七種 六枚

一六六 川上助八郎？ヨリ久光公へノ上書

藩士賞罰ノ件

〔包紙ウツ書〕

乍恐天下之形勢而已ならず、御国家人情之紛乱ニ付而は、幾重ニも被遊 御配慮御儀と奉恐察候、御政事之上ニおひてハ、御仁慮之不至所茂無御座、且人才ニおひても、段々と 御擢用相成、近代未聞と奉存候、ケ様 御美政之処ニ、ケ様之紛乱、如何ニ茂愚意落着仕兼、日夜勘考仕候得共、指而着眼之処も無御座、実に御賢明を不奉憚之ケ条茂御座候得共、事情見聞之形行、且は文義之統合等々奉申上事ニ御座候間、御賢察被成下候様、始に奉拝願置候、

一人心時勢ニ応し自然強暴に罷成、奸俗共に昔日之奸俗にあらず、粗天下之形勢等ニ通し、今日之物咄に御政事之批判、人物之評論等を事とし、嘗て我身之省察も無之、唯利口にして、邦家を覆すの弊風稍相生し、人心之折合何分ニ茂六ケ敷罷成申候、恐多茂、余り御仁政之過たる訳ニ而も被為 在候半欵と奉存候、真実時勢を憂るの輩は、難有奉感服時節ニ御座候得共、姦俗之輩ニおひてハ、左まで感情之程も相見得不申、姦勇は却而増長いたすの勢ニ而御座候、且又當時之説に、両立と申儀承候得共、時勢相当筋合之正敷御趣意を奉汲受候処より他事有間敷奉存候、万全之人は聖人より外ニは無之者ニ御座候得は、微細之事は存知不仕候得共、彼西郷・大久保等之輩は、随分御趣意を奉汲受、実に 御国家のため忠勤之者と存申候、此等之者さへ矢張誹謗いたす者も有之哉ニ承り及申候、ケ様なる輩ニおひてハ、真実時勢を憂る者とも相見得不申、勿論趣意相立候処有之哉ニも相見得不申、唯人

物之誹謗等を猥にいたすの処よりして、自然人氣を損ひ、夫故不折合ニも罷成候事と奉存候、此等之輩は、畢竟高位高官を臨むの心よりして、自身不被用を憤り私怨のいたす所ニ而茂御座候半、誠に卑劣之心底ニ而婦人之情ニも等しく、逆茂決死之御奉公出来可申者ニ而茂無御座、如何様沸騰仕候而も、決而

御懸念被為 在間敷奉存候、將是まで

御趣意を奉汲受居候者も、此節之紛乱よりして、此涯姦党のため趣意不達之氣合ニ罷成候哉、追々他出之含ニ茂有之候半と相見得申候付奉願候者を篤と 御吟味之上、御許用被為 在度奉存候、 京師等へ御差出相成居候人数罷下候ハ、重き御役場之処ハ十分之事ニ御座候得共、輕き御役場之処茂無人ニ而は何分下情實徹仕兼、且は其虚に乘し、姦党蜂起いたすの勢ニ而御座候、ケ様に罷成候而は、何れ之時奉安尊慮機限、更に目当無御座、実ニ奉恐入事ニ御座候、兎角時勢ニ応し、一涯御賞罰を明白に御法則の屹と相立候様被仰渡

度奉存候、何分公平之

御処置を以、 御国家根元之堅固たる処を奉仰願事ニ御座候、

一 当時非常之 御処置を以、段々人才御採用之上ニ付、

一 弊相生し候訳も有之候半と奉存候、ケ様之人才勤功御採用之処ハ難有奉存事ニ御座候得共、自然何之功劳

も無之者、早く御採用相成居候者も有之候半と奉存候、

夫故重き御役場等之処江、以前ニ代り人数相重居申候、

畢竟

御仁政之処とは奉恐察候得とも、内実ハ相互に吹擧いたす様之風俗自然と相生し候半と奉存候、此儀は、指而奉申上程之事茂無御座候得共、自然其萌見聞仕候付、御賢察被成下候処奉恐願候、勿論 御賞罰之筋合ニ茂關係仕事ニ御座候得共、第一当時之処、中以上之士分ハ余程宜敷、中以下ニ罷成候而は、極々難渋仕居申候、右様高禄之御役者人相職し候而茂、平士之数人ニ相及申儀ニ御座候間、位階等昇進被仰付儀迄茂成丈 御褒

美等ニ而相濟候様被仰渡度、乍恐奉存候、

一世変に随ひ、追々人心之變動御座候半、何分人品之鑑定は六ヶ敷者と奉存候、利口発明なる者もあり、愚直なる者もあり、段々等級も有之事ニ而御座候得共、

御信用被遊上ニ付而は、兎角憂国誠心之深切なる処を御洞見被為 在度奉存候、当時五拾歳前後以上之処ニ

人才無之、畢竟老体等ニ而、旅行等茂無之、自然時勢迂遠之処ニ而も御座候半、適誠実之者は独学固陋と申

様にて、只俗説等に恐れ、我身の省察而已ニ而、壮士の切齒に逢申候人物も又有之、此等之者ニも随分望ミを

掛、古風をのミ仰慕いたすの輩も有之、此者よりしてハ、又時勢相応之人才ニは申分茂有之哉ニ承及申候、

乍去道を知て邪悪を工む大姦之者は、何分忠臣之様ニ而可恐者と奉存候、其余之者は、姦氣は有ても俗物なれば、大概可見処有之候半と奉存候、

右之事件、至而重大之 御事ニ而、私式奉申上茂恐多奉存候得共、兼而奉蒙 御高恩居候事ニ御座候得

は、見聞思慮之事を黙止居候而は、却而不忠之儀と奉存、恐れを不顧事情を專一にして奉申上事ニ御座候間、実否之処ハ乍恐何分

御賢明を以 御用捨斟酌被成下度奉拝願候、恐々敬白、

寅二月

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦二八・五糎

横二二七・五糎 横 四〇糎

一六六 防長一致勇戦ノ藩令

写

此度閣老小笠原^(長行)寺岐守殿・永井主水正殿其外、近々芸州発向之由、到来有之候処、旧臘於芸州永井主水正殿其外応接之節、御国内之情実委細聞届相成候事ニ付、御寛大之御沙汰振も可有之候処、却而存外之幕令有之哉に相聞、素より請込も難相成、其期に到り候得は、右軍勢四境に迫り候ハ必然之事ニ候間、兼て御手組被仰付置候通り、

諸手規律を相守り、御指揮に随ひ、不墜御武威候様、孰れも一致、義勇決戦之覚悟可有之、此段相達候事、

寅ノ二月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第三四八号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五種 横五一・五種

一四九 西郷吉之助ヨリ大久保一藏へ

品川弥二郎京都潜居ノ件

御別以来不能御音信候処、弥以御安康可被成御座珍重奉
存候、大坂之御用も被為濟候而、今日乗船仕居候処、村
六(大村益次郎)(純勢)・川村之両土着船相成、太体蒸艦之談判も相決シ候由、
細事ハ御直々御聞取被下候半、省略仕候、又々黒田了助(清盛)
品川同道ニ而登坂いたし候付、彼方之事情ハ粗承、此方
之形勢も荒増ハ申聞候得共、今暫之間ハ何分片付模様ニ
も無之、何卒上京いたし度との事ニ御座候間、差遣申候
付、如何様とか御潜置被下度奉合掌候、譬へ何様募来候
共、必過激之振舞無之、従容として条理を踏、何迄もこ

らへ居候ハ、必幕中ニ異変到来可致候間、其処ハ万々
相合候様申置候、遠識無之俄ニ疎暴ニ変シ候而ハ、不相
濟旨申聞置候間、左様御得心可被下候、細事ハ御直々御
聞取可被下候、此旨荒々奉得御意候、頓首、

西郷吉之助

三月四日

大久保一藏様

文書原寸 縦一六・二種 横一一三・三種

一五〇 長岡良之助ヨリ島津久光公へ

天下之形勢を論ず

「包紙ウツ書」
「島大隅守様」

長良之助

密用

乞親展

春暖之候益御堅剛奉敬賀候、過日は両馬被贈下、別而辱
奉存候、僕も無事罷在候条御放念可被成下候、扱字和島
長面公より華墨被報急用候間、便御廻達申上候、御返翰

被成下候は、又々弊邑幸便も有之候ニ付相達可申候、
扱長防之義も兎角余炎難消、畢竟五卿御呼登杯、関東無
謀之御決断よりと被相考申候、両閣老上京、兵威且賄賂
を以

皇都ニ逼り候様ニ相聞、人臣仕主之道を相失、徳川家之
御為のミならず、為 皇国如何候と深杞憂任候、今般拙
价

皇都より内密之御沙汰も有之、帰邑仕候ニ付、官武之
御間、又関東諸有司之模様、一々相尋申候処、驚愕之至、
小子之見込ニ而は、実以危急存亡之秋、会・桑杯之尽力
位ニ而は不可救勢と被相考申候、付而は越中守參勤之期
ニ当り候処、病氣勝不申、御断申上候稜々も不尠、程々
より小子東行可仕も難測、何様ニも

御上洛有之、一橋公其他有名之諸賢、天下之基本を被建
不申候而は相成不申、且諸有司之邪直愚賢をも洞察仕度、
橋公三諫之書、好機会と存申候間、兩三日中発程之飛脚
ニ書状差立申候筈ニ御座候、尤東行等之義は、未急決は

不仕候間、密々御承知可被下候、何様ニも内鎮群盜外撫
諸戎之基本、天下不拔之政令相立、武威赫然

皇州を以五大洲を撫する之勢相立候様、為

神州懇禱仕候事ニ御座候、国議且定算不日可申上候、付
而御良考も被為在候は、奉伺度、平生之御知己所希候、
何も不日万々可申上候、早々九頓、

春晚十五

(細川護美)
長良野生

呈(島津久光)
南海橋上老公

玉机下

二伸、御自愛奉專祈候、万事期不日可申上候、其間

御密覽奉願候、不聲、

文書原寸 縦一七・五糎 包紙原寸 縦三〇・五糎

横二五六・五糎

横四四・五糎

○一見一 幕吏岡田撰蔵ノ航西小記ニ見ユル薩英

関係

一四九二ノ一
二月一日 大原野祭
大久保一蔵ヨリ両丸側役衆へ

禁裏御神事等ノ件

（包紙ウツ巻）
一両御丸

御側役衆

大久保一蔵

合四通

奉行職事

甘露寺頭弁様（勝長）

右

二月廿四日 泰宮御入寺

扈從公卿

広橋大納言様（定男）

野宮中納言様（長徳）

葉室中納言様（言成）

山科宰相様（顯光）

北小路左京権大夫様（隆昭）

前駆ノ殿上人

榎 筥 中 将 様（隆昭）

武者小路少将様（公善）

園 中 将 様（基祥）

豊岡中務権大輔様（隆實）

野 宮 侍 從 様（定數）

錦小路丹波権介様（頼言）

北小路 極 藤 様

右 辞

參議 久世 通熙卿
右近衛権中将等（智成親王）

二月九日 聖護院泰宮親王

宣下評儀

上卿 広橋大納言様（胤保）

弁 葉室弁様（長訓）

右

関白様、以来御役料年々五百俵ツ、被進候所、御斟酌候得共、畏御請候、別段七百五拾俵之儀は、固被

辞候事、

聖護院泰宮

勅別当

野宮中納言様

二月十八日

春日祭

上卿

一条左大将様(実忠)

弁

甘露寺頭弁様

近衛府使

山科(言繼)少将様

奉行職事

葉室 弁様

右

任

三室戸

参議

陳光卿

転

山科

左近衛権中将

言繩朝臣

任

頭如旧

左馬頭

大原重朝

叙 從三位

四辻公賀朝臣

正四位下

三条公恭朝臣

從五位上

慈光寺和仲

從五位下

樋口静康卿男 忠康三才

右二月十日 勅許

来四月 松尾祭

御再興被 仰出候事

松尾祭御再興

御用掛

広橋大納言様

奉行職事

清閑寺頭弁様(盛厚)

右被 仰出候事

叙 從五位上

千種有任朝臣男 有冬

右二月十五日元服・昇殿等

勅許

三月八日

神武帝山陵奉幣使発遣

使

上卿

飛鳥井中納言(雅典)

参議

梅溪宰相中將(通善)

弁

万里小路弁(通房)

奉行職事

清閑寺頭弁様

右

三月十七日より三ヶ夜

内侍所御神楽被行候事、

任

左近衛権少将

水無瀬
経家朝臣

大宰大貳

慈光寺
有仲卿

叙

従三位

山科
言繩朝臣

右二月十日 勅許

任

大僧正

一乘院
心眼

右三月十日

勅許

叙

従五位上

岩倉具綱朝臣男
具定

右三月十四日

元服・昇殿等 勅許、

兼

侍従

伏原
宣足朝臣

右近衛権中將愛宕

通致朝臣

叙

従五位下

高倉
永則三才

右三月十四日

勅許

岩倉大夫様近習出番等、三月十五日被 仰出候事、

三月廿三日

石清水臨時祭

勅使

植松少将(雅意)

葵祭

勅使

愛宕中將(通教)

四月より六月迄、京都夏詰御警衛、

(山内豊範)
松平土佐守様

(幸教)
真田信濃守様

(直博)
溝口主膳正様

右

禁裏御所

模様摺鳥子紙

親王御方

硝子御華筒

准后御方

色鳥子紙

右従

大樹様、二月分御献上、由良侍従様御使被相勤候、

竹田街道御警衛、本多美濃守様被 仰付

松平大和守様御用有之、上京之旨先達而被 仰出候

処、未御病氣難快、御上京御免御願、則御願之通被

免候事、

禁裏御所

藤細工御文匣

親王御方

硝子御小皿

准后御方

御風爐

右三分分 御献上、御使由良様

(山内豊範)
松平土佐守様家老老、芸州表江可差出旨、大坂表

ニ而御達、則家老福岡宮内三月朔日高知出立、彼地

江罷越候事、

昨丑年分貢獻ハ当夏中献上仕切、

当年分ハ当秋冬之内献上仕切御治定

(二条齊教) 遠所有之候如
関白様御内実御叔母、去月二日逝去、依之三月廿四

日より十日迄之間、御子細御所勞御引籠候事、

長伐御供之面々は貢獻順割として被免候事、

右三月廿五日

文書原寸 縦一四・五糎 横二九五・五糎

一四九二ノ二

叙

從五位上

姉小路故公知朝臣男
公義

右三月廿七日元服・昇殿等 勅許、

東照宮奉幣発遣日時定

上卿 日野 大納言 様

一弁 勘解由小路權右中弁様

奉行職事 清閑寺頭右大弁様

四月七日

松尾祭

上卿 葉室右衛門督様

弁 葉室左少弁様

奉行職事 清閑寺頭右大弁様

任

少将

花山院
藤原家理男
家威朝臣

右今日元服・禁色・昇殿等 勅許、

四月一日 日光例幣御使、櫛笥中将様御出立之事、

徳大寺右府様御息女、西園寺故三位中将様為御養女

松平土佐守様御縁組、御願通相濟候事、

任

侍從

広幡忠礼卿男
忠朝朝臣

右四月六日 勅許、

三月晦日、上杉様・稻葉様御暇參 内被

仰出候事、

但稻葉様御所勞ニ付は不參、

日之御門前
御警衛被免

南部様

右同所
被仰付

土州様

朔平御門前
御警衛被免

稻葉様

右同所
被仰付

真田様

南御門前其儘
右

上杉様

上杉様三ヶ月詰御濟候得共、暫滯京被 仰出候事、

戸田大和守様是迄御頂戴之式百人扶持ハ御返上、此

度ハ本家土佐守様高之内七千石・新知三千石、合一

万石分知、御願之通被 仰付、席は菊之間御縁類と

可相心得と被 仰渡有之候事、

文書原寸 縦一四・五種 横一〇八種

一四九二ノ三

大樹様より月次為

御機嫌御伺、御献上二月分、御使由良侍(貞時)殿被相勤、

禁裏御所江

一 模様摺鳥子紙

親王御方江

一 硝子御華筒

准后御方江

一 色鳥子紙

右同断、三月分

同

藤細工御文匣

同 硝子御小皿

同 御風爐

右

竹田街道御警衛出番、(本多忠民)美濃守様被 仰付候由、

(山内豊範)松平土佐守様

当四月より
六月迄

(幸教)真田信濃守様
(直漣)溝口主膳正様

右

近来市中於所々乱妨者不相止、別而此頃猥殺戮ニ及之趣相聞、甚以不法之至、如何之事ニ候、且未炮発も不相止、右様之儀無之様可被穿鑿候、尤諸藩心得違之者無之様、嚴重可被示事、

右之趣其筋江被相達候也、

(徳川昭武)松平民部大輔様

大樹様江御対顔被成候付、去ル六日御下坂之事、

松平大和守様御用有之、先達而被召候処、依御所勞

御上京御免御願、則御願之通被免候事、

当地浮浪輩出入徘徊之儀、嚴重ニ取締可有之候、

一昨年、毎々

御沙汰も有之、各心得之儀ニは候得共、当節柄猶懈

怠無之様下知可有之候旨、其筋江被相達候事、

松平土佐守様家老耆人、芸州表江差出置候様大坂表

ニ而御達ニ付、則家老福岡宮内(孝忠)と申方三月朔日高知

出立、彼地江罷越候旨届有之候事、

来十七日より三ヶ夜、

内侍所御神楽之事、

任 左近衛権少将 水無瀬 経家朝臣

太宰大弐

叙 從三位

右三月十日 勅許

任 大僧正 一乘院 応眼

慈光寺 有仲卿

山科 言繩朝臣

右三月十日 勅許、

叙 從五位上

岩倉 具定

右三月十四日 元服・昇殿等本ノマ、勅許、

兼 侍從 伏原 宣足朝臣

轉 右近衛権中將 愛宕 通致朝臣

叙 從五位下 高倉 永則三才

右三月十四日 勅許、

一条左大將様江近衛前関白様御息女雅君御方、先般

(実忠) 御入興被為濟候処、今十五日表向御弘メ相成候事、

右三月十五日

(容保) 松平肥後守様支配京師見廻頭松平出雲守様組見廻役

高橋与一郎と申人、久世様御通行之節、酒狂之上御

不敬仕候段、今更奉恐入、如何ニも御申訳難相立と

深悔悟、去ル八日割腹仕相果候段、届之事、

文書原寸 縦一四・五糎 横二〇〇・五糎

一四九二ノ四

別紙三通、爰許御留守居より差出候付、差越候間、被達

御聴候儀は、何分も宜被取計候、以上、

四月十一日

大久保一藏

兩御丸

御側役衆

文書原寸

縦一四・五種

包紙原寸

縦二八・五種

横 五二種

横 二二種

〔三〕 征長ニ付幕軍旗本備ノ令達

〔端裏朱書〕

一乙丑四月征長

四月十三日

〔本莊朱書〕
伯耆守殿御渡触書ニ候

大目付

江

御目付

覚

御旗本御後備

〔徳川茂承〕
紀伊中納言殿

御先手惣督

〔茂徳〕
徳川玄同殿

御旗本御先手

〔直憲〕
井伊掃部頭

〔政教〕
榊原式部大輔

〔忠礼〕
松平伊賀守

〔謙成〕
牧野河内守

〔頼直〕
内藤若狭守

〔長明〕
稻垣信濃守

〔台田光則〕
松平丹波守

〔政孝〕
内藤備後守

〔大河内正實〕
松平彈正忠

〔正波〕
内藤志摩守

御供

右之通被 仰付候、此段為心得相達候事、

〔本文書ハ慶応二年トスルモ慶応元年ノ誤リカ〕

文書原寸 縦一五種 横四〇種

〔三〕 大久保一藏ヨリ島津伊勢等ヘノ報告

長州再征ニ付板倉閣老トノ談判

追々御届申上置候通差出置候処書面、何分板倉侯より御

沙汰可相成ト之事ニ而相待居候得共、為何儀茂無御座候

間、一昨十七日黒田彦右衛門差出候処、今朝御呼出可相達賦ニ而、御差出之書面、御落手被成兼候間、致御返却候様差図ニ而候旨、公用人より御書付相下り候由ニ而、同人持帰候付、再応差出候趣ニ候、押返シ為差出候処、既ニ御登城跡ニ而、公用人預置候之事ニ而、昨十八日私罷出候処、又々公用人より右書面之儀、既ニ御決議を以御下ケ相成候間、御落手被成兼候付、相請取候様承候得共、御落手被成兼候趣ニ而は、決而御受取不申上候、就而は今一往拜謁御願申上度段申入候処、色々故障申立断ニ相成候得共、何分国家之急事ニ付、御逢被下候迄は、何時迄も御待申上候段申入候処、左様ならハ御逢被下と之事候得共、段々拜謁人も多く、御登城御定刻相成候迎、御出相成候、明朝參候様御沙汰之由候得共、尚又昨晚致推參候処、是非今朝致參上呉と候間、今朝罷出拜謁相調候、扱致言上候趣、御届之書面御落手難被成趣ニ候、御下ケ相成候御趣意、更ニ不被伺候、出兵之儀勝手ニいたし候様と之御趣意ニ候哉、又は言路を御閉塞、

下より言上不相成と之御趣意ニ候哉、相伺候処、夫は尤之事ニ候、併先日茂篤と嘶申入候通、只今御所置、凡而奏聞上

勅許を受、今日之運ニ相成候、勿論是迄御糺明之廉は、御了解相成候、最早本ニ帰順シ、御裁許と相成候、御受さへ相成候得は、決而御討入可相成訳ニ無之、若御受無之候得は、不得止御討入可相成御趣意ニ候、乃而天幕御一定之上、今日ニ立至り候間、右書面之趣意ニ而御落手相成兼候、言路を塞く出兵勝手ニいたし候趣之御趣意ニ無之段承候間、左様ニ候得は、尚又委曲可申上候、今日之処

天幕御一定と難心得次第は、長州御征伐後神速御上洛之朝命御受無之、機会を被失候より今日ニ立至り候事、御趣意御奉戴無之第一ヶ条、加之大膳父子出府、五卿護送等之暴令御達相成候事、御奉戴無之第二ヶ条、朝廷寛大之御趣意を以、内外危迫之砌、長州御所置之儀、至当を失シ、禍乱を生候而不相濟、大膳父子招呼之儀、

暫く閑き、何分早々致上洛候趣、重而 御沙汰相成候得共、終ニ御再討御進発と被 仰出、大軍を引き御出張相成候事、

御趣意御奉戴無之第三ヶ条、御進発之序、御上洛御参内相成候処、御内実寛大之御趣意を以

御真翰被成下候御賦之処、推而御拒ニ相成、大樹公江勅語を以云々

御直達、尚 関白様御書ニ而被相渡候を、終ニ閑老より御返上相成候儀、上下顛倒、不敬之大罪

御趣意御奉戴無之第四ヶ条、御下坂之上軍勢を張、諸侯江御出兵之手当を被仰渡候儀、

御趣意御奉戴無之第五ヶ条、昨九月廿一日長州御征伐勅許御申受之節は、折柄摂海江異人致来船、内外未曾有

之御大事ニ付、賢侯を被 召、天下之公評を以、御至当之御所置被成度御趣意ニ候、

御評義相成候得共、是非御拒被成、強而 勅許御申乞相成候条、 御趣意御奉戴無之第六ヶ条ニ御

座候、右之通大本大義を被失候付而は、今日之御運

天幕御一定と御沙汰承知仕候而茂、中々安心難仕、乍恐脅 朝廷、矯 勅諭と申御断ニ茂相当候間、御奉戴之廉

天下ニ顛れ候様無御座候而は、当分ニ而は天下之人心ニおひて難安、全体此節差出候書面ニ而御弁解不相成候ハ

、逐一申上候外無御座、長州御所置ニ付、御失体は前条之通ニ付、其外条々無限候得共、御進発以来一事之御

失体を申上候得は、兵庫開港之一条、龍動府之約定通、御開之御書面御渡相成候よし、

朝廷より御書付顯然被差留候御趣ニ候処、反覆之次第ニ而、御重罪無此上儀ニ無御座哉、何分御反省被為在、言

上之趣虚心を以御聞取被下候様、逆も御落手難被成趣ニ而、御下ヶ相成候共、決而御請取難申上段申切候、再三

天幕御一定と申事致承知候得共、前意ニ候押一円動き不申候、終ニ御落手ニは難相成候得共、先ッ御預り置被成

候と之趣ニ而、御返詞相成致退出候、右今日迄之形行御届申上候、以上、

四月十九日

大久保一藏

島津伊勢様

岩下佐次右衛門様

町田内膳様

追而、何分不容易大事件付、度々京都詰重役共江、

今一往及評議候様致承知候得共、不容易大事ニ候間、

篤と熟許之上、致決定言上仕候訳ニ而、仮令申聞候

而茂、相変候趣意無御座段申切り置候、条理さへ相

立候得へ、無二念御趣意致奉戴候儀、当然之儀ニ而

主人おひて異儀無御座候得共、何分名分大義ニおひ

て致相違候而は、天下後世之恥之次第、実ニ不得止

御断申上候、趣意能々御了得相成候様と之趣、再応

及言上候、決而御呼出相成候模様ニ候間、誰様御名

前ニ而御達致も不被凶候得共、先日茂申上候通、板

倉候ハ岩下様委曲御存知之事候間、御下坂被成候方

可然致と奉存候、

〔(来) 丙寅款〕

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第一一五号
文書ト同文ナリ〕

冊子原寸 縦二九糎 横二〇・五糎 四枚

一四九五 長岡良之助より島津久光へ

馬の件

〔包紙ウツ書〕
一島津大隅守様 長岡良之助
用事

封 自熊城

封

梅霖未全晴候処、益御堅剛奉恭賀候、野生依旧碌々罷在
候条、御放念可被下候、扱過日申上候通、

皇上烏安、大樹公ニも近々御准発之旨恐慶此事ニ御座

候、然は頃日御馬拝受之節伝承仕候処ニ而は、御殿外之

馬相互之相談ニ而御座候得は、随分宜敷御都合と承知仕

候ニ付、越中守何卒五六疋計も直相談ニ而買入申度、井

上喜太郎列差立申候事ニ付、可相成は御操合奉願度候、

尤檜原幸五郎は井上喜太郎と於京都面識之趣ニ御座候間

馬之相談等御都合宜敷様ニ奉願度候、拙兄登京之義も愈

暫見合候方ニ決議仕候間、得貴意申候、余は後首ニと聞

筆申候、要用申上度、恐々謹白、

首夏季浣

長良野生

南海老公

玉机下

二伸、御自愛奉專祈候、早々不備、

文書原寸

縦 一七糎

包紙原寸

縦二六・五糎

横 一四九糎

横三九・五糎

〔表紙〕 將軍征長進発ニ付諸藩へノ幕令

〔米〕 「乙丑五月七日」

關東仰渡之写

四月十七日松平伯耆守様御渡

大目付江

覚

此度 御進発被仰出候ニ付は、參勤之面々国邑発足之儀

は暫時見合罷在候様可被致候、

右之趣本多美濃守様御渡

大目付江

〔酒井忠棟〕

雅楽頭事、今度

御進発之節、

御供被仰付候処、

当節不

容易折柄、

水戸殿ニは御慎中、

〔徳川慶篤〕

紀伊殿ニは御復帰、

元千

代殿ニは御幼年ニ而、

深御心配被為在候ニ付、

御留守被

仰付候、

〔徳川義直〕

都而御政事向御委任被成候而、

年寄共申談、

万

端厚相心得精勤可致候、

右之通被仰出候間、

万石以上之面々江可被相達候、

四月

四月廿一日松平伯耆守様御渡

四月

今度 御進発被遊候ニ付而は、

中国・九州筋之面々、何れ茂国邑江人数備置候様可被致候、

右之趣早々可被相触候、

四月

御先供十三日立、

〔本多、(藤原カ)〕

周防柳、

若年寄増山

対馬守様・

阿部様

〔松井康直〕

〔松井康直〕

〔坂野忠義〕

〔忠良〕

〔徳川義徳〕

〔松平春嶽〕

〔皮昭周防様〕

伯耆様・備前様・本多様・玄同様・越前様御父

子、於京師 御伺之上ニ而 御供 (大村純徳) 丹後守様 御参府掛

朝覲御上京、御伺之通被 仰出候、去ル十二日御着京、

十九日御参内、被拜 龍顔、天盃御頂戴、首尾能御暇被

仰出、早速御参府被成候処、今度従 関東被 仰出候儀

茂有之候ニ付、御届置ニ而、昨廿三日京都御出立、播州

路御通路、室より御乗船被成婦邑御渡申来候、

四月廿四日

大村

一 瀬伴左衛門

世二日松平頼聰) 讃岐守様為御参勤、去ル十五日御在所表御出帆之由、天

氣合ニ付、播州明石湊江被成御滞船之処、此度 御進発

被仰出候ニ付而は、中国・四国・九州筋参勤之面々、国

邑発暫時見合候様、尤国邑発足致候ハ、引返候様可仕旨

於御達之趣、於石湊被成御承知、依之御出帆引返被成

候、

四月廿四日

久保田千助

周防守様御儀、去ル八日五ツ時、御登城被成候様、御衆

中様方御連名之御達書、本多美濃守様より御到来被成候

ニ付、則御登城被成候処、下野国宇都宮江御所替 被蒙

仰候、

去ル八日、御所替 被蒙仰候趣、於芙蓉之間御老中様御

列座、本多美濃守様より左之通被仰渡候、先代周防守儀

諸勤心等厚相心得候ニ付而は、家来共ニ茂格別勉励相勤、

其上常野浮浪輩追討之儀茂骨折候之趣平常心得旁宜敷被

思召候ニ付、今般出格之訳を以、所替被仰出候儀ニ付、

其旨相心得、猶精勤仕候様可相達御沙汰候、

毛利大膳(敬親・広封)父子征伐之儀、塚原但馬守(昌義)・御手洗幹一郎を以

被仰出、御趣意相背候ハ、急速進発可有之旨、先達而

可申出候処、右御模様は不相分候得共、不容易企有之趣

ニ相聞得、更ニ悔悟之体無之上、御所より被仰出候趣

茂有之、旁以征伐可有之旨被申出候、仍之五月十六日進

発可有之段、御申出之旨年寄より申越候事ニ候、此段申

述候事、

御先供井伊様・柳原様(柳)

此度進発之節、紀伊殿御後備御心得被成候付而は、大坂御城御守衛被成御免之旨、紀伊殿より届之事、

右伝奏より御沙汰之事、

四月十九日

美濃守様御渡

毛利大膳父子始御征伐之儀、先般塚原但馬守・御手洗幹一郎ヲ被仰出、御趣意相背候ハ、急速 御進発被為遊候旨、先達而被仰出候処、未タ右之模様不相分候得共、不容易企有之候段相聞得、更ニ悔語(悔)之程茂無之、上御所より被仰出候趣茂有之、旁以御征伐被為遊候旨被仰出候、依之五月十六日 御進発被為遊候、

四月朔日

先達而 御上洛之儀被仰出有之候処、今度長防之形勢諳静ニ茂不相聞得、既ニ激徒再発之趣茂有之、今般京都ニ而茂、深被相惱(為)宸禁被仰立候茂有之、且先達塚原但馬守・御手洗幹一郎兩人差遣候趣、若相背候ハ、急速 御進発被仰出候間、御日限被仰出候節は、聊差支無之候様可致旨被仰出候、

当月十七日日光

御神忌御法会被相濟

御進発被為遊 思召候、尤此度之儀は、御軍事之儀ニ付、御武備之外先規ニ不抱格別御少略御手輕申聞候、

右之通被仰出候間、向々江可相達候、

四月十二日

四月十二日

伯耆守様御渡

此度御進発之節御休泊之儀、都而去ル子年被仰出候通可被相達候、来ル廿一日、於駒場野御勢揃、其上行軍御揮

家御試被為遊旨被仰出、人数悉賊等発之分は、其假罷在不苦候、且廿二日雨天候ハ、来ル廿五日被仰出候間、此段向々江可被相達候事、

(本文書ハ慶応二年トスルモ慶応元年ノ誤リカ)

冊子原寸 縦二八種 横一八種 八枚

二四七 山階宮晃親王ヨリ島津大隅守殿へ

京阪ノ形勢報告

(包紙ウツ書)

「内々」 島津大隅守殿 晃

玉机下

(封紙ウツ書)

「島津中將殿」 晃

玉机下

時下随分く御加養專一ト存候、修理大夫殿ニも宜

(兼防基六)

々御一声希入候、島津伊勢永々在京苦勞千万奉存候、

(島津久治)

同人より京坂之事々、委曲申入候事ト存候、凶書・

(忠鑑)

備後両賢息ニも宜々御序ニ御一声希入候、乍筆末

(近衛忠輝・忠房) 陽明御父子ニも各御安全ニ被為在候間、御安慮ト存候、又々後便ト令書略候也、

(梅) 榎雨中濛々敷候、益御安祥哉、尚承度候、晃無事、乍憚御安慮給候、

廟堂も一向く静謐、随而国事御評定も御間遠哉ニ令恐祝候、(祝) 撰海之一件は更ニ申出候人もなく候、定而大樹公在坂、閹老以下諸有司在坂の事ゆへ

天朝御安穩之妙算有之事ト存候、防長之件も小笠原出陣候而、次第く降伏ト申事而、是亦令恐祝候、何分一(徳川慶喜・松平容保・定数) 會・桑江御信頼、万事柳宮江御委任ト申候へは、官辺は御安心御閑暇之形ニ候、風説ニハ何儀く

(朝彦親王) 殿下・尹宮・一・會・桑甚心痛之件もまゝ伝承候得共、人間ニは不漏事ニ候、方今形勢御心得も可相成大事候ハ、可申入存候得共、更ニ無之候、任幸便呈一章候也、

恐謹言、

五月四日認め置候

文書原寸(折紙) 縦一七種 包紙原寸 縦三〇種

横四九種

横三八種

一六六 京都伊地知正治ヨリ西郷吉之助等へ

備中倉敷一揆及薩藩ノ評判

(端裏朱書)
「寅五月十五日」

正治」

尚々、上封御海恕可被下候、

暫時は不鳳音候得共、御一同様御揃御連勤之筈奉大慶候、

二ニ野生無事在勤仕居申候間、乍余事御放意可被下候、

去ル十三日堀直太郎(為影)着京、筑表之儀巨細承及候処、其後

既ニ幕より表通り御達ニ茂相成居、尤当地之形勢旁之処

茂御座候段は、自然向々より相通候半欸、仍而私状ニは

態と不申上候、

備中之国倉敷一揆之儀ニ付、其時分諸方より承及候事共、

先日万年丸便より申上候処、果而其頭取は長州人立石孫(雜)

一郎と申ものニ而、南郡屯集人数之内ニ而、逆寄せ之企(敬)

致し、不同意之頭役一人を殺し、官之兵器を盗而出奔し、

初は都合百人位ニ而出立、彼仕合ニは相成候由、委曲ハ

右立石死骸懷中ニ残居候浮沈日記に相記御座候ニ付、自

ラ御高覽ニ茂触候事と奉存候、其中御見合共可相成儀は

備前より御届之趣とは天地黑白之違ニ而、実ハ備前より

は旁致都合呉候上、退帆之節に至り、船手当茂世話仕候

段、是ニ而当時之人氣茂少しは被察事欸と存候、右一揆

人数長へ立帰リ候而被誅候由、可惜次第ニ御座候、

其後当地至而静ニ而、近比は外方之評判大ニ宜敷、偏ニ

薩ノ周旋ニ仍而長州無事、生民四海沸乱之苦を免れ候筈

抔と、外方ニ而は申居候由、人氣之趣何より能キ事ニ御

座候、今日海江田出立ニ任セ、不取敢一左右如斯御座候、
(信義)

再拜敬白、

寅五月十五日

い地知正治

西郷吉之助様

吉井幸輔様

伊地知壮之丞様

侍史

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第一三七号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・三種 横一〇三種

一四九 伊達伊予守より島津久光公へ

西洋事情聴聞ノ件

一島大隅守 (冠紙ウ邊)
密用 伊々予守

封

拝啓梅天不爽之候、先以益御清康可被成御揃奉恭賀候、

如例御無音恐悚、近日如何御動履候哉、専ら富国強兵御

戟勵ト奉遙羨候、家僕出崎便より伺度及呈書候、長州方

モ結局御処置御座候処、如何御請可申哉、六ヶ敷モノニ

御座候、且又極密洋行之新納始、先頃帰国仕候由、各国

事情詳悉、弥以万端御都合宜敷ト遙羨此事御座候、御家

臣航海より之筆記何卒御密示被下度、可相成ハ(弘安、寺島家)松木御差

越相成、左候ハ、直ニ伝承、少シハ井蛙之見モ啓ケ可

申、伏而奉希候、五代出崎(友厚)と申事故、家来遣候得共、何

分徹底無寬束、才介ナラ別而仕合候得共、同人ハ御国用

務多端と察候故松木ヲ希候、匱文而已、草々恐々頓首、

五月既望

弄鐵

大簡老明公閣下

例文不贅可申上候、

文書原寸 縦一八種 包紙原寸 縦二八・五種

横七一種 横 三九種

一五〇 市来六左衛門等ヨリ御家老座へノ申請書

藩札及新銭製造ノ件

一五〇〇ノ一

写

今般楮幣御製造ニ而、半朱并琉球通宝大銭・銅銭・預

札引替之御趣法、安田轍藏建議之旨ニ被成被召建候付

而は、左之通同人引請取扱ニ可被仰付哉、

一楮幣製造

右大坂ニ而製造等之取扱、

一大坂両替屋引結

右江戸・長崎并下之関江茂両替屋無之候而は、商人不

弁利之由ニ付、大坂ニ而惣両替屋引結之致取扱、江戸

其外は右両替屋より引合相立候様、

一半朱大錢鑄替

右牡丹・錫は御物御構ニ而、其外本手・炭一切之雜用は轍藏計ニ而鑄調、差出候新錢老枚ニ付、錢拾六文ツ、御払、

一 国府・甌島・大島・鹿屋五之原・屋久島、右五ヶ所銅山御試堀、金山方又は支配人被仰付置候得共、都而御取揚、同人取扱之自分山ニ被相渡度、左候而、出銅は都而御国用ニ召仕、聊たり共他国ニ不差出様、
一 屋久島ニ而新錢鑄調、右五ヶ所銅山出銅は勿論他国銅買円、錫・牡丹迄茂打込、前文同様同人計ニ而鑄調、
差出候新錢老枚ニ付、六拾四文ツ、買入、
右之通吟味仕、此段申上候、以上、

寅五月廿一日

松岡十太夫
伊地知壯之丞
税所竹兵衛
市来六左衛門

一五〇〇ノ二 (一五〇〇ノ一号ノ行間ニアリ)

本文申出通被仰付候旨、右衛門殿御口達を以被仰渡候間

轍藏江申渡、左候而、札会所掛御役々并金山奉行・屋久島奉行江茂申渡、大坂御留守居・大島代官江茂申越候様、金山奉行江申渡置候事、

寅五月廿四日

市来六左衛門

文書原寸 縦一四・五種 横一五六・五種

一〇一 長崎ニテ入手ノ海外新聞

南部弥八郎ヨリ鹿兒島へ

(表紙)
「海外新聞」

慶応二年五月廿七日西洋の五月十七日より仏蘭西飛脚船入港あつて此新聞紙を得たり

日本四月三日ノ部

イギリス国の部

此国評定所ニおゐて、分散の新法の事を二度読んでのちに定まるやうすなり、○支那・日本の方へ遣ハしてある役人の給金速に定まりたる事なり、○今月十日、ロント

ンの町におゐてヲボラシゴウネ組と云大ひなる商人が戸をしめたる故に、町中大にさわぎ、両替屋のこらすへ願出した金を取りに行もの多し、其中にもイギリスノ両替屋と名づくる内より出したる金子総高、大凡弐千百万トルラル、其日の内に出せしなり、是によつて、金子日々右の如くいては統兼候事を、政府江申立候処、政府にて通用の金は前々評しおき候高よりも札を多く拵ひ、通用致さするなり、○右の大なる商人戸をしめしにより、モートンピトン大なる請負人戸をしめる、夫に續てイギリスのジョイントウストクと云両替屋、或はインビイヤと又カモシヨロと云両替屋、ヲマネ組并にワイキヘール等初め悉く戸をしめしなり、是によつて売買の事甚悪敷借貸し、到々不通用なり、

相場の事

茶すこし宜し、綿 同断、生糸 此品ヤウロッパにて専ら宜敷見込なり、直段へ前の新聞と替る事なし、

フランスの部

此国の国王、ヲノヤリと云所にて何か仰られし事あり、其仰の事を後に此国中江張札ニ可致趣仰出されたりとの事なり、○ジョルモネヤ国の乱によつて、此国御城下のパンスにおゐて、諸方の重役立会、乱をしづめんと相談致す模様なり、○メキシコより此国の港センナゼリイ飛脚船入港あり、其船に積み来りし金の高凡六十万ドル仏の政府へ送り来ルなり、○近き頃此国の国王へ日本大君より書翰をおくりしとの事なり、

フロイス国の部

此国の政府におゐては、大に軍の用意を致し居なり、其上ラーストリアと益々書翰の取遣りあり、○此国よりはハイバルと云国をよんで云ふ、彼か方の軍の用意如何の旨問合あり、○此国の風聞をヲロシヤの国王も乱を起す事をナダメントする趣なり、

オストリア国の部

此国におゐては、もはや軍勢をとり揃ひ、フロイス国との境まで趣し模様なり、○此国より外国へ軍器或は兵糧

類ハ持出ス事一切不相成との御触れなり、○此国の人民いさぎよくして能伏従し、ことごとく日々政府へ力をもちゆるなり、○諸大名或は大金持などハ、此節銘々金銀家財等外々へ持運ぶよしなり、

フロシヤの部

此国の王子^{ワカギ}ゴチカウフト云君、フロイス国へもふし遣ハしたるには、若彼ノオーストリア国と戦争及び候節ハ、我国王ハかならず貴国の加勢致すとの事なり、尤是は風説まで、慥のことは期しての新聞にいたすなり、

和蘭陀の部

此度の新聞へつになし、

イタリヤ国の部

此国政府より仰出されには、ピニシヤト云所の手をはなさするには、逆も兵端を開らかすんは治る事難し、しかれとも各々は今廿日迄に書翰取遣りの模様にて如何なる事に相なり候や、まつのみなり、○右様次第なれば、軍勢催促致し居なり、其内ニ茂千八百四十余人のもの共ハ

聖王政國ノ圖



廿歳前後のものばかり撰り集め、軍兵と共に加勢にいづる模様なり、最早軍艦ハツレースタと云内海の口までくりにいたし、命を待受るよしなり、

メリケン^{アメリカ}の部

評定所におゐて、此国の国体重き箇条を改革したる模様

なり、○南の大棟梁今ハとりこになり
牢屋に住める人也の妻、北の大棟梁の
隣ミを受、夫婦同所に居る事を許されたり、○ニューヨ
カと云処の大なる両替屋戸をしめしよし、其外にジョン
スロースと云人同し町にてさいとりをいたせしが、凡三
拾万ドル質を拵ひ、正銀とすり替持逃したるものありし
となり、

南アメリカの部

此国バラパライソと云港におゐて、イスハニア国の軍艦
此港を利不尽に焼払ひし趣なり、此処ハ元より軍用の備
ひ無之場所ニ付、アメリカミニストル并にイギリスミニ
ストルの外、兩國の軍艦奉行共々、イスハニアの軍艦奉
行に懸合に、此港は軍備聊も無之場所ニ候間、外港と違
ひ勘弁致し呉候様、再応申遣し候へ共、更に聞かれずし
て焼はらへしなり、是によつて、此地にあつまり居る処
の諸国のもの、夫々政府へ書翰をもつてイスハニア人無
法を致せしにより、莫大の損毛たちしゆへ、此段敲重取
調被下様申遣し候事なり、

是迄新聞に世界開闢の荒増差出し候得共、一二部の
間繁雜ニ付、脱するなり、重るハ引続出す事なり、

引札之部

薬種類を求むと要する諸君子
ハ、運上所の脇なる第二十七
番を問給へ、若し持合なき品
詠を得ハ、早速本国より取よ
せ可呈候、
アレン謹啓

病の治療を受むと
望む人々ハ、尔後
九ツ半時より七時
迄に第百八番をと
ひ給へ、
バダール啓

長崎に於ハワラス組、横浜にてハワラスホール
組、我等ハアメリカ国の商人にて、日本開港以来店
を開きて、日本の品も買入れ又舶来の品も売る、若
し帆船・蒸気船其他蒸気の器械及び軍用之諸器と日
用の器物など詠たき諸君子ハ来り給へ、無相違本国
又ハ外国よりも取よせ可差上候、我等の右二軒ハ、
日本政府及び大明へも聞へ、江戸・大坂の町人へも

聞へ居れり、住宅は海岸第二番なり、 ホール謹啓

入歯を成らんとなさる御方ハ御尋被下、所持之細工
齒御覽、其上にて御用被仰付度候、之ハ尋常之骨或
ハ象牙・蠟石にて造りしに非ず、せとものに類セシ
金にて造りし故、持甚宜敷つやなど天然の齒に異な
らず、
三十一番レスノ一謹啓

アメリカの商人オールマンブラウ組ハ、当地開港已
来店を出し居候、蒸気船・帆船・海陸之大小砲・
玉薬類等御望ニ候ハ、御尋被下度候、プライキレ
ーもと込所持いたし居候、随分直段相働差上可申候、
私し宅ハ之等を造り出すところの支配故、別してけ
っこうに差上可申候、其他之品も持合有之、又日本
品も買ひ申候、何ニなりとも御用之御方ハ御尋被下
度候、以上、
六十七番 オールマンブラウ

〔付紙〕
「本文彦蔵新聞紙写取候間合無之、其仄差上申候間、

御覽濟御家老座江御廻し相成候様奉願候、以上、

八月三日

南部弥八郎

冊子原寸 縦二四・五種 横一七種 七枚

III 平玄道等ヨリ島津茂久公へノ上書

祭政一致神祇奉齋ノ神道ニ依リ天下諸侯伯ノ
盟主タランコトヲ望ム

〔表紙〕
言上書

謹而奉言上候

僕等草間小人ニ御座候得共、幼少ヨリ神典ヲ聊講習仕、
惟神ノ大道ヲ略管窺仕候処、方今

神州剖判以後、未曾有之大変眉睫ニ切近仕候テ、徒ニ宴
安トシテ偷生、傍觀仕候ニモ忍兼候故、聊猷芹ノ微志
ヲ録シ猷納仕候、伏願クハ

電覽ノ上、万一 御大政ノ小稗ニモ相成候筋モ御座候
ハ、重々難有仕合ニ奉存候、恭ク承候ニ 御藩祖様

(島津)
忠久朝臣命ハ実ニ天潢ノ御余流ヲ以テ大封ヲ筑紫ノ方

面ニ御受被遊候テ七百余歳屹トシテ

皇室ノ藩屏ト被為成候御事、寔ニ偶然ニテハ無御座候、

蓋日隅薩ハ

皇御孫尊以來 三柱天皇命ノ大宮敷カセ給ヒ、天下御統

馭被遊候ハ勿論ニテ、且御神靈ヲモ留置カセ玉ヒ、振

古天府用武ノ国ト申候地ヲ御治被成候ハ、実ニ惟

天皇祖神ノ叡慮ニ出候御事ト奉恐察候、天正・慶長ノ間

ニ至候テ、(島津) 義弘卿ニハ鷄林ニテ屢明兵ヲ剪滅シ玉ヒ

(島津家久) 忠恒卿ニハ琉球国ヲ服從セシメ給候テ、稜威ヲ海内外

ニ御張皇被成候テ、四夷モ為ニ胆ヲ寒シ、氣奪ハレ息

ヲ屏メ、覬覦ノ端ヲ相絶候テ、三百年ノ少康基ヲ御開

被遊候、無前ノ御功績ハ小人輩ノ敢テ称賛ヲ待候事ニ

テハ無御座候、然ニ方今十余年来、赫々タル

神州、蠱タル醜夷ノ為ニ欺罔セラレ、四海困窮、万民殆

塗炭ニ委候ヨリ、志士扼腕憤懣ニ堪ス、遂ニ京和常但

四処ノ擾乱モ醸成仕候、サテ諸侯伯中ニモ有志ノ人無

之ニモ有御座マシク候得共、実ニ能憤然トシテ、上

天朝ヲ牽翼戴シ、下諸侯ニ連和シ、厚ク民人ヲ親撫シ、

醜夷ヲ掃攘シ、万国ヲ裁定仕候程ノ人モ御座ナク候フ

ハ、職トシテ

皇朝ノ大基本ノ処ニ眼目ヲ注候事ナク、徒善徒法ニテ事

ヲ行候ヨリ中途ニシテ相廢候モノ多ク御座候ナリ、サ

テ大基本ト申候ハ、他ニ求ルニテハ無御座候、古人ノ

祭政一致ト被仰シ如ク

先聖ノ御政事ノ根本ハ御祭事ニテ御座候故、先ニ御祭事

ヲ御興被遊候カ即大基本ヲ御立被遊候ニテ、此則当世

ノ一大急務カト奉存候、サテ中古以來異端ノ教法相弘

候ヨリ

皇国ノ正氣モ追々ニ相衰、方今醜夷ノ辱ヲ受候モ

国体ノ基本ヲ忘レ候故カト奉存候、サレハ

神州ノ神州タル所以ヲ天下ニ示教仕候ハ、自然正氣モ

相振可申奉存候、其基本サヘ相立候ハ、他ノ枝葉節

目ハ随テ相奉可申ハ必然ノ勢ニ御座候、恭承候ニ、

(島津齊彬)
順聖公ニハ夙ニ不世出ノ御靈資ニテ、水府源烈公ト西

(徳川齊昭)

東ニ御崛起被成、御心ヲ

神州ノ大基本ニ留サセラル

神聖大道ニ御順考被成、尊攘ノ鴻典ヲ國中ニ御布告御座

候等ノ御善政難縷述、彼ノ徒善徒法ノ類ニハ不被為在

候テ、天下ノ志士仁人皆刮目、風采ヲ觀望仕候処、不

幸ニシテ世ヲ遺給ヒ候得共、

閣下亦聡明叡智ノ御性ニ被為在候上、(島津久光) 中将公経文緯

武ノ御才徳ニテ御賛成、御先業ヲ御継述被遊候御事、

周代姫且氏ノ成王ニ於カ如シト輿称仕候、苟如此ニ御

座候得ハ、

神州ノ事ハ杞人ノ憂慮ヲ懷候ニハ及申マシク、翅ニ江左

仲父ノミナラスト窃ニ御慕ノ至ニ奉存候故、遼豕ニ御

座候得共、欲罷不能聊誓言ヲ録シ驢電囑申候、何卒

閣下天下ノ首唱ヲ御成被遊候テ

叡慮御遵奉本邦ノ大基本ノ処ニ御心ヲ用ヒサセ玉ヒ、先

ニ

先聖ノ大道ニ御循由被遊、大祭ヲ御奉行有之、親ク天下

万生ニ

神皇惟一祭政一致ノ大道ヲ御示シ被遊候様有御座度奉存

候、其大祭ハ先ツ御府下ニ於テ

大神宮及

天朝ノ遙拝所ヲ設サセ給ヒ

此上代ニハ國司行ニテモ天神宮司ニテモ元正ニ天朝ヲ遙拝セシ事物等相

見工申候テ別其中ニニ記置申候

天皇祖神ヲ始奉リ、神代ノ三柱・天皇命ノ御靈代、又五

元大神歷代ノ皇子皇孫聖公賢相等、大功勲勞御座有シ

ヲ悉皆御配祭ニテ 其一ニヲ申サハ誠所大神・出雲粟島大神・鹿島香取大神・五伴精神等及、大祖ヲ佐奉リ給ヒ

シ道臣命・建角見命・天日方奇日方命・天日別命・椎根津命・天種子命・天富命・可美真手命・高倉下命・崇神天皇御代ニハ大彥命・吉備

津彥命・豐城入彥命・武渟川別命・道主命・彥國尊命・垂仁天皇御世

ニハ野見宿称八綱田命等、景行天皇御代ニハ倭建御子命・大伴武日連

応神天皇御代ニハ武内宿禰命ハ腹氏武振熊命・多那古呂命・中臣伊賀

津命、其後ニハ大伴室屋金村・大連物部尾守屋・大連中臣鎌子・大

連大織冠公和氣公・齊部広成宿禰・天満宮・藤原保則卿・小野右府・小松内府及南朝ノ諸名公、サテ織豊ニ公ノ類

ニ有ユル八百万神等ヲ扁ク御招請ノ上、四季ニハ大祭、
一月ニハ小祭ヲ為シ玉ヒ、大小祭トモニ
御自御盛服ニテ神主ト為ラセラレ、御饗祀有御座度奉

存候 上代ニハ天皇ニ親ク祭政ヲモ文武ノ二柄ヲモ御執被遊、且又國々ノ国造モ、國中ノ政ヲモ神祇ノ祭祀ヲモ、天子ノ御手ニ代リテ執行ハレシニ能、爰ニ本学養ト申テ御設置被遊、御城下及國中ノ人ヲ上人・中人・下人ト様ニ三等ニ階級ヲ分テラキ、先横目ノ人ト生ヲ受候者ハ

神皇ノ大道須臾モ離ルベカラサル所以ヲ深ク教誨仕候様有御座度奉存候 上人ニハ近クハ人倫ノ道ヨリ一切物皆天神地祇祖神及歴世天子ノ深仁大次ニ因テ、人間ニ親息教候事トテノ御政務ノ梗概庶民庶物ノ原始及軍國ノ政古今ノ沿革ニ及ヒ、遠クハ天地日月星辰ノ実理及万国ノ形勢政体万物ノ綱理ヨリ大兆易トノ教玄家儒仏胡人妖教ノ端倪、サテ身後ノ事ヲモ詳論シ、畢竟此現身ハ皇美麻命ノ御政令ニ從ヒ、身後ニハ必出雲大神ノ幽冥、政ニ伏從奉ルヘキ天皇祖神ノ神隨ナル大御量ノ大義ヲモ懇懇ニ諭告シ、諸教ノ中ニハ其根元ハ道ノ大原天ニ出ツト申ル如ク、天皇祖神ニ出シニハ相違無御座候テ、古道モカツク遺居候得共、世々ノ事識人ノ邪智モテ數妄説セシ故ニ、互ニ利害得失モ御座候事ヲモ相示シ可申候

中人ニハ天神地祇、歴代聖皇ノ御功德ヲ略承知仕ラセ、修身齊家治國ノ理身後ノ事、文武ノ大事ヲ説示シ、下人ニハ内ハ父母ヲ孝養シ、兄弟ニ和順シ、妻子ヲ保育シ、出テハ君上ヲ奉戴シ、朋友ヲ信睦シテ、各夫々ノ家業ヲ出精仕ルヘク、又天地万物及我人ノ原ハ悉ク皆天皇祖神産土神ノ御賜物ニ因ルコト故、伊勢向大神宮ヲハ片モ怠慢ナク崇敬可仕候事、サテ我天皇命ハ即其御正統ニ御座被遊候テ、其尊サハ天地間ニ又比フベキモノ無ク、御即位ノ後ハ大神宮御同体ト奉仰ヘキ御事ニテハ、天皇命ハ其祖先ヨリ數千年來ノ大君主也、本親也、教師也ト相心得サセ、我人ハ御臣也、子弟也ト心得サセ可申候、サテ皇國ニテモ蕃種無ニテハ无御座候得共、元ノ下ト探索仕候得ハ、十二八九ハ世ニ源平藤橘ヲモテ口実ト仕候通リ我天神地祇聖皇明王ノ御子孫ナラヌハ無御座候事故克ニ此処ヲ自反猛省為仕候テ先祖ノヨク忠

誠ニ仕奉ラシ、法ヲ以テ長ク勤勞シテ奉仕ヘキコトニシアレハ、畢竟忠孝一有ニナキヨシヲ論教シ、サテ死後ニハ幽冥ニ歸シテ、我氏神産土神、殊ニ出雲大神ノ御政令ニ隨ヒ候事迄モ能々肺肝ニ徹底仕ラセ、身前後ノ守護神ト申ハ此大神等ノ事ニテ、ユメク邪教ニ誣惑セヌ様ニ教誨可仕候、右三等ノ博士モ亦三等ニ相立置ノ御前ニテ夫々講説セシメ候テ、英敏ノ才俊ヲ召集シテ、閣下ニ諸老臣ノ御前ニテ夫々講説事ハ無之様ニ演舌セシメ、サテ目付役ヲモ相付、万一右講中ニ異端ニ涉リ、枉曲ヲ相加エ候様ニ御座候ハ、屹度嚴科ニ所シ可申候儀ヲ兼テ御設置被成度候、サテ右三等ノ講書ハ神典類ハ勿論、本居宣長・平田篤胤・伴信友等ノ著述類ノ内ヲ相定置候テ、丁寧反復シテ提撕訓督為仕度儀ト奉存候、サテ博士ハ勿論ニテ本学ヲ篤ク信シ、出精參詣仕候徒ヘハ、金銀諸幣ヲ以テ厚ク褒賞ラ賜ヒ、且又此ヲ誹謗仕モノハ、少モ板貸無之様兼テ御嚴令御座候ヘ、旧染汚浴風俗モ一時ニ變易仕候テ駭々乎トシテ上代至、治ノ化ニ相溯リ可申候

将又宮中ニ貧院・幼院・教院、宫外ニ病院ヲ御設被為遊 此等モ上代ニ先聖ノ御設被遊候御事ニテ、今事立候ニテハ無之候貧院ニテハ艱寡孤獨无告ノ者ヲ養ヒ、幼院ニテハ兼兒无齋子ノ類窮乏稚兒ヲ育シ、夫々分ニ隨ヒ職業ヲ教ヘ、又婦人ヲモ扶持シ可申候、教院ニテハ夫頼ノ子弟ヲ教導シ、病院ニテハ病者ノ病者及廢疾克治療ヲ加ヘ、生々ノ功ヲ相逐候様仕度候、講武場ヲモ相成候ハ此ニ移建申度儀御座候、左候得ハ、文武ニ、ナキ先聖ノ御典刑ニ相協可申候

閣下ヨリ御自御勉勵御強行シ被遊候ハ、國中ハ草葉ノ疾風ニ偃候如ク、靡從仕候事、之ヲ掌上ニ目撃仕如クニテ御座候也、カクテ

閣下御入

朝ニ相成候ハ、前件奉申上候儀、早々
紫宮上へ奏

聞ヲ被為逐、第一ニ

天庭ニテ右ノ大宮祀ト大学校ヲ御造立被遊候テ、何卒
至尊ニモ時ニハ行幸ノ上親ク御禊祀被遊候テ

聖上御自上

天皇祖神ニ御大孝御敬礼ヲ尽サセ玉ヒ候テ、惟神ノ大道

ヲ以テ、自然ニ天下億兆庶民觀感仕候様有之度奉存候、

将又学館ノ長ニハ 親王・大臣ノ中、御人品ヲ御簡試

ノ上ニテ補任シ賜ヒ、将其四院・武場等ヲモ是ニ前

文ノ如ク御経始被遊候テ、群諸候ノ中ヨリ次官ニ補シ、
(候)

上中下ノ三科ヲ設候テ日夜教導有之、講学ノ節ハ大臣

以下諸公卿モ時ニ御聴聞有之候様有御座度奉存候、且

四時毎ニ大祭月毎ニ小祀一度ト定置候テ、大祭ニハ天

下ニ酹飲ヲ賜ヒ、老幼ニ物ヲ賜フ等ノ制度ヲ御立被遊、

講学出精ノ徒 本宮本学篤信ノ者ニハ幣物ヲ以テ厚ク

深ク御褒賞有之、或ハ大臣拜謁、或ハ帶刀御免、或ハ

諸役及地子等蠲免、或ハ位記拜領ト申様ニ、科条ニ從
テ御勸誘被遊度奉存候、カクテ

朝廷ニ御建立相成候ハ、六十余國ハ勿論、蝦夷地・琉

球迄モ右ノ如ク御建立有御座度奉存候、此又其侯伯ヲ

以テ館長トナシ、國中ノ俊才ヲ以テ登庸黜陟仕等、此

モ万ツ

天庭ノ御制ニ襲由斟酌可仕儀ト奉存候上代ニハ天下ノ官社及諸社總社ノ御制国学及

学政モ有之候、當時ハ諸藩國ニモ各私ノ学館モ、且京ハ

皇土御膝元ノ御儀ニ御座候得ハ、何卒

閣下ノ御独力ヲ以テ、夫々御経造有御座度奉存候又畿内ノ

博士ニハ、出雲國造・紀伊國造・伊勢大神宮司祢宜氏・山城賀茂氏

・宇佐宮宇佐公・筑前宗像社宗像氏・肥後阿蘇公等ハ皆歴々タル上代

ノ神胤ニテ、万姓ノ神明ノ如ク敬服仕居候事故、此又勅裁、

天地神祇

天朝ヲ尊崇シ下ハ父母ヲ孝養シ、妻子ヲ慈育シ、天下匹

夫匹婦ニ至迄、各生々ノ功ヲ相遂候様ニ相成候ハ、

謳歌拊舞シテ

閣下ノ御盛徳ヲ領替シ、海内外夷人ニ至迄、皆領ヲ引テ

閣下ヲ相望候事父母ノ如ク纏負シテ、子来臣服可仕候、是ニ於テ天下衆庶上一身ト相成候テ、実ニ膠漆ノ如ク凝結可仕候、此上ハ謂ユル何事力成サラン、何功カ遂サラント申モノニテ御座候、恭ク古ヲ稽候ニ

皇祖天神モ各其功神ヲ御用被遊、且又国造大神ニハ粟島大神相副ハレ、鹿島香取大神相并ハシ

皇美麻命御降臨ノ時ハ、五伴緒大神等アリ、大祖ヲ佐奉ラシ、諸名公モ心ヲ一ニシ力ヲ戮セ衆思ヲ集メ群力ヲ御展被遊候テ、天業ノ昌運ヲ御佐、不朽

ノ大勲績ヲ御建被遊候事ト奉存候、乍然世ニハ幽堺ニ荒振ル禍神トモ多ク、顕世ニハ五月蠅ナス讒邪小人寡カラス候テ、初ハ断金トシテ甘苦ヲ同シ候者モ貝飾蒼蠅遂ニ間隙ヲ生シ、一簣功ヲ欠候類青史ニ前後櫛比相見申候、サテ方今ノ醜夷ハ先世ノ醜夷ニハ無御座候、我国家ヲ争鬪セシメ、上下ヲ閉塞仕候テ、下莊漁父ノ

功ヲ収候ハント謀候奸策御座候事ハ

閣下ノ一速ク御支覽被遊候事、嘸々ヲ費ニ及不申候漢人モ天下有事意ヲ將ニ注トモ申候、後漢ノ光武ハ二將宿怨ヲ积候事モ御座候故、何卒

閣下ノ御明移ヲ以テ諸藩鎮ヘモ 神代ノ幽契ノ事御諭告被遊候テ、方今ハ北条・足利代ノ如ク、天下相呑噬スヘキ時勢ニ非ス、只管ニ一片丹衷ヲ以

皇室ヲ鎮衛シ奉リ、忠誠ヲ

天皇祖神ニ致シ肅テ天威ヲ用ヒ残ヲ去リ暴ヲ除キ禍乱ヲ

戡定シ、終ニ四夷八蛮ヲ征討シ、区宇ヲ混同シ、我威

武ヲ四方ニ炫耀シ、皇風ヲ八紘ニ恢廓シ、以テ

聖天子ノ峻徳ニ対揚シ奉ラント、親ヲ牛耳ヲ執テ天下侯

伯ノ御盟主ト御成被成候様奉仰望候ノ逆罪ヲ御正シ被遊ヘク候、其節ハ先聖ノ御軍制ニ奉從預、國中ニ号令シ、夷狄ノ相犯候罪ヲ鳴シ、不得止征代スルヨシヲ、能々御布告被遊其將領ヲシテ御軍政ヲ公明正大ニシテ、人民ヲ水火ノ中ニ相救所ニ心ヲ用ヒ、カノ紀律嚴肅秋毫モ不犯、東面シテ征スレハ西夷怨、南面シテ征スレハ北狄怨ト申様ニ有之度候、カクテ其寸地ヲ得候ハ、即吾本官ヲ建候テ本教ヲ以テ教諭ヲ加ヘ、刑罰ヲ省キ、稅斂ヲ薄クシ、孝子有徳ヲ頭賞仕ルナト、一ニ吾故國ノ民ニ異ラス御施行相成候テ、則寸地ヲ取得候ハ、則皇國ニ寸地ヲ益シ、一州ヲ取得候ハ、則皇國ニ一州ヲ相増候

ニテ、万世ニ至マテ其民、苟モ如此大基本サヘ相立候ハ、人ヲ失フ憂無御座候

其他ノ小節目ハ追々ニ相興可申儀ト奉存候尚追々論述、可申上候

是ニ於テ一ハ

天朝無窮ノ鴻恩頼ニモ

天神地祇ノ大恩沢ニモ奉答シ玉ヒ、二ニ随神ノ大道ヲ四

夷ニ弘廓シ、三ニ

神州ノ威武ヲ震揚スベク、四ニ天下人民ヲ水火ノ中ニ救

フニ足リ、五ニ異國ノ邪教ヲ防禦スベク、六ニ御祖先

様ヘノ御大孝ニモ相当リ可申候欤、於是也、

閣下ノ大勲偉績ハ光前絶後ニテ、御家ノ隆盛モ此ヲ丘

嶽ニ比シテ千万世迄御動搖无御座事、龜蔡ヲ仮申迄モ

無御座候、千里ノ行ハ足下ニ始ルトモ諸隗ヨリ始ヨト

モ申候得ハ、前件奉申上候遙拝所及本学校等御設ノ儀

ハ、

皇都御府下前後緩急之事ハ、トカク御賢慮ニ任セラレ

度奉懇願候、伏シテ天下ヲ泛観仕候ニ、御門閣ハ勿論

邦内殷富武器充実、加之御英明ニテ古道ニ御心ヲ用サ

セ給ヒ候ハ、

閣下ヲ舎テ更ニ無御座候間、余リ嗚呼カマシキ事トハ

自承知仕候得共、仰止ノ余リ敢テ鄙人誦陋ヲ相忘、謾

ニ譬説ヲ献納仕候、古人モ芻蕘ノ談モ尚取ヘキコトア

リ、庸夫ノ思モ徒ニ棄易カラスト申語モ御座候得ハ、

何卒篤ク御仁願ノ節ヲ以テ御採覽ノ程宜願上候嘉永五

玄道友人六人部是香ト申合セ、先公ヘ奉献度箋ヲ記置申候故付呈仕候

辱ク御覽ヲ賜候ハ、古道ニ浸淫仕候事モ且大藩ヲ欣慕仕候事モ一朝

一タノ故ニ無御座候、輕威敵ヲ冒瀆シ奉リ、戰汗恐懼ノ至

ニ堪不申候、平玄道等誠惶誠恐敬白、

慶応二年丙寅五月

平 玄道
藤原正道
紀 頭教

藤原至邦等謹上

冊子原寸 縦二六・五種 横一八種 八枚

南部弥八郎ヨリ西郷養田ヘノ報告

弘国博覧会出品規定

一五〇三ノ一

仏国博覧会主意并規則書

仏国都府博覧会之儀は、各国ニ生産天造人工之差別なく、広く宇内之産物を一所ニ相集、観覧を広め、智識を増候を本旨と致し候趣ニ有之候、

一 西洋千八百六十七年第五月朔日開局、六ヶ月相立閉局之積候事、

一 諸品物之儀は、開局より閉局迄飾付、右品之内望候者有之節は、相對ニ而直組いたし、閉局之後ニ至り差引致候規則ニ候事、

但差出候品物は都而無税之事、

一 展観場中ニ而手細工ニ致し候品々は、望人有之次第、即時ニ売払候而も不苦、尤無税之事、

但職人は蒔絵師・塗物師・金銀細工師・紙師・陶

器師・大工・指物師等宜趣、尤諸雑費等都而自

分賄ニ候事、

一 大神楽・手品・独楽廻し等之芸人罷越候儀、勝手次第

之事、

但願出候者有之候節は、諸入費は都而自分賄ニ候

事、

一 品物は新規之物ニは不相限、旧き品ニ而も不苦候間、

可成丈宜敷品差出候事、

一 品物は一種一品ニは不相限、敷品差出候而も不苦候事、

一 品物差置候場所借請候ニは敷金等差出ニ不及候事、

但飾付方入用は差出候事、

一 品物は当五月中ニ取揃、六七月頃より仏国軍艦渡来致

候趣ニ付、着次第積込、シュエス迄差送、アレキサン

デリー迄蒸気車、夫より他船ニ而、夫より仏国都府迄

差送候様、尤横浜よりシュエス迄之船賃は差出に不及

候得共、同国より仏国都府迄運送賃は、銘々より差出

候事、

一 差出候品物之内、最上之分候は、仏国政府より褒賞差

出候積、右褒賞請候品は、各国之品より相勝候儀ニ付、

追々万国より注文請候事、

右之通、町会所より名主江相達、願人取調相成候事、

文書原寸 縦二八糎 横四〇・二糎

一五〇三ノ二

一筆啓上仕候、愈御勇健被為成御勤務奉恐喜候、然は風聞書老冊差上申候条、宜御取成奉仰願候、此段申上度如斯御座候、恐惶謹言、

六月七日

南部弥八郎

養田伝兵衛様

西郷吉之助様

参人々御中

文書原寸 縦一六・六糎 横三〇・五糎

1501 桂小五郎ヨリ京都品川弥二郎へ?

長州再征ノ件

(封紙ウツ巻)

「春狂盟兄

御直披

木圭

弥御清適ニ引つゝき御尽力大賀此事ニ奉存候、さてハ先

日黒田先生新港まで御出之由承知仕、不得拝話候ハ残念

ニ奉存候、頓ニ御帰京と想像仕居候、芸国近況ハい曲御

直に御承知之通、何事も暴ニ押付ケ、所詮人心之折合思

もよらざる次第、不弁是非ハ不珍儀ニ而、終ニ拒絶と相

成候事ニ付、弥々之手切ニ立至り候間、日々砲声を而已

相待居候処、已ニ如別紙彼より弥及干戈候事ニ付、拳而

進戦之覚悟ニ罷居申候、就而ハ兼而御都合之趣其之御運

是非正邪は成丈ケ天下ノ判然致候様、成否は関、天下後

世之為御手を下し被置候様奉存候、於爰元ハ一統精々尽

力仕候事ニ付、御厄害ニ被預候儀ハ、いかにも御氣の毒

之訳ニ候得共、暫御滞京之方可然欤と奉存候、いづれ戦

ハ早々に片ハ付申間敷と被相察申候、現場之儀ハ黒田先

生其外御知己之諸君ニも得と被仰合、往々之御都合克御

決定奉祈念候、先ハ為其不取敢得御意申候、其中時節御

自愛申も痴と奉存候、匆々頓首、

六月十日夜

尚々、幕船なども例之暴動同様ニ而、なにも不知ル
島々之漁家民屋へ暴ニ発放などいたし、浮浪之暴動

ニ而もケ様之行跡ハ無之候、先日孝助罷上り候処、

到着仕候哉、同人ハ御地之用事相濟候ハ、一応速

ニ帰国仕候様御申聞け可被下候、遠藤音二郎英国よ

り先日帰り申候、幕より

朝廷へ言上仕、天下江布告いたし候ハ大偽譎ニ而、

已ニ来卯ノ十二月ニハ於兵庫屹度開港之約条いたし

居候由、実ニ可惡之甚敷ものニ御座候、此度取急候

ニ付、真之一筆申上候、諸先生へも可然御致意奉願

候、
拜

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第四卷第一六八号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五種 横一五七・五種

長州藩ヨリ小倉藩へ海岸砲台造築ノ場所
借用ノ件

一五〇五ノ一

此度拙者共蒼立し参上致義、別事ニ無御座、先達而以來

追々得貴意候貴領内^(内)田之浦間、砲台ニ可然場所を

見立拝借仕度、尤御返答次第時宜ニ寄而ハ、推而借用可

仕存念ニ御座候、私義失礼ケ間敷可被 思召候得共、

朝議ニ攘夷之被為決候事ニ御座候得共、幕府は勿論、諸

藩一統戮力同心、叡慮貫徹可仕様働候こそ肝要ニ存候、

先達而以來、数度之戦争衆目之所見、兎角貴領近海江備

ヲ致し、^(船砲)砲方ヲ専ラニして^(警備)警領ニ敵対致候模様相見、

毎々撃漏し候之段、不堪切齒候、切迫之分日々ニ至リ、

猶網納危、攘夷之御手出無之ニおめてハ、天下後世貴藩

を如何可議、実ニ

神州之大恥辱ニ存候、猶不知鈔之犬羊、自然貴領を攫掠

致し候事も有之候時ハ、兼而借用之砲台ニ寄、聊御力ニ

り被申付候間、御承知可被下候、一昨日以来、賊鑑四五艘近辺海岸相窺候模様、片時茂油断不相成時節、然ニ此御許御相對御一樣隙取候而は無趣寸楮ヲ以、右之趣旨申上置候、早速下ノ関惣奉行所迄、否応御返事可被成遣候、匆々謹言、

二月十四日

長州より御使者

御使番

宮城彦助

平士

赤根武人

坂本力二

田中直吉

山本仙太郎

外五人

(本文書ハ慶応二年トスルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一六糎 横九七・三糎

一五〇五ノ二

六月十四日長州様より小倉様へ御使者

御使番

宮城彦助

平士

赤根武人

坂本力二

田中直吉

山本仙太郎

十四日、小倉御客屋ニ而對面之賦、取次役其外出張ニ相成処、何致急敷引取面会不致、書状を殘置申候、別紙之通、

旅宿大坂屋金助方ニ而、十四日昼頃床ニ飾有之候熨斗三方を取出し、二タ刀伐付、ケ様之品ハ乱世ニ入用無之ト申候由、尚又襖ニ染書致候左通、
かゝる世に生れて越は

大君のために死へき活業 いけるなりわい

(宮城彦助)
藤原御楯ト有之

十八日長州より御使者

瀧 弥太郎

稲田 次郎

松尾甲之進

田中 弁藏

菅山 吾作

齋藤文三郎

貫 又助

賀茂 九郎

此三人ハ十七日ニ
一旦參候、引取又々
同道ニ而參る

右御使之趣は、過日宮城彦助より申出置候田ノ浦・門司
場所借用致度、強而御相談申、其返答可承ト申演候処、
小倉様ニは御借渡は不相成、其訳は重役より御重役ニ返
書差出置候と被申候得共、是非承帰可申ト申候由、左候
而、田ノ浦ニ相對ニ宿を取可申間、返答は田之浦へ可被差
出旨申置、是も又々差急キ渡海仕候、

出帆之節、川口御番所上の御飾付之大繩所望致候

へ共、不相渡候義、自分ニ求メニ上り候而、川口

出帆之時、所持之小筒ニ而一発打放相取申候、

いつれもく狂人之令然事ニ候、

(本文書ハ慶応二年トスルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一六糎 横九三糎

一五〇元 桂右衛門ヨリ小松帶刀へ

財政困難、藩札処分ノ件等

(包紙ウツ書)
一 小松帶刀様

桂右衛門

平信

六月十七日

尚々、随分御厭為國家御保護奉祈候、

野村壯七被差上候付、一輪呈上仕候、御双方

上々様方益御機嫌能被遊御座、御同慶奉存候、貴様弥

御壯健御奉職一段目出度奉恐祝候、随而小子無異条罷

在候間、乍憚御放意可被下候、爰許先何も静謐ニ而申

上程之儀も無御座候間、御安念可被下候、然は先日ハ町田家帰朝、彼是得と御聞取相成候半、野村ニも同断罷帰、右之事実大略ハ御聞取ニも相成候半、依而此節仏国事情得と御聞ニも可相成と存差上候間、此儀御聞可被下候、就而ハ第一仏使節為替金旁及相違、全く手当無之処より、方々手を尽し候而も、当座為替之趣法も無之、漸く日用丈モンフラン致世話、此後ハとても不相調処より、野村右之為ニ帰朝被成候次第ニ而、委敷御聞可被下候、就而ハ当分御金線別而六ヶ敷折から殊更長崎御払前も甚差迫り、ガラバ・ボウドエン方も兎角近々不繰入候而ハ不相叶時宜成立候付、御金割及吟味、大坂統等も申遣、乍其上無致方御勝手方江吟味為致候処、兎角難差置訳合ニ而、段々以其条ヲ申出候内、御宝蔵之内五万両丈御出し被下候ハ、大坂より五万両丈ハ繰合御統相成欵、又ハ若不相叶候ハ、鴻池等江出銀無和理致相談候ハ、随分出来可申哉ニ申出候ニ付、御宝蔵之内三万両、御家老座御格護金之内

古金貳万両之処繰合、都合五万両、此節雜金繰替として為差登候儀成立、甚長大息之次第御座候得共、無致方御推計被下度、左候而、若哉大坂繰合出来兼候ハ、誰ニ而も上坂可被仰付候得共、其内大久保辺江致談合(利通)候様、御取計被下度、表通御問合も申上候得共、何卒此段ハ宜敷御取計之処御願申上候、余事とハちかひ、難差置訳ニ御座候間、宜敷御汲受可被下候、毎も掛搦上候儀而已ニ御座候得共、返すくも御願申上候、一紙札切出方之儀、於当方ニ趣法立之儀、早速より為致吟味候処、実ニ細小之趣法ニ而、廻転之儀長引き可申候得共、何分ニも不手馴の一件ニ而、一統甚疑惑而已ニ御座候得は、眼前人目之及丈ニ而不致候而ハ不相叶処より、差迫御問合申上候通御座候、就而ハ第一御相談之上、尚又得と御賢考も致承知度御座候得共、銀札の害も則より相生候旨、御心配之処より兎角一時も早く当分之札不相改候而ハ、弊害弥増ニ相成候半と致吟味、近日中より引揚候賦ニ御座候、廻転之儀ハ安田趣

法中ニも本より荷為替第一之目当ニ御座候、外ニ三拾万両を以廻転之趣法ニ切出し候賦ニ御座候、夫より琉半上之儀ハ別段繰替、鑄変を以時々繰上ケ候儀も御座候付、全く荷為替迄之趣法ニ無御座、是ハ態と表廻之趣法ニハ不相見得、内場計ニ而仕賦ニ御座候間、左様御心得可被下候、右ハ(島津久光)中将様江も伺之上、取付可申事候得共、荷為替最早砂糖・煙草等仕登之時節ニも差掛候付、追々不仰出候而ハ不相濟、甚以為取極 伺事ニも御座候得共、此段ハ可然様

御伺濟被下度、御願申上候、

一 大田屋十兵衛一件ニ付而は、追々大坂より申越未逢取不申候得共、下田清兵衛ニも致下着、先穩之向ニ相成候由、殊ニ東郷源左衛門迄も御差下し御下知被下候由、かた／＼御手数ニ相成、何とも奉恐入候次第ニ御座候、殊更少々 御名目迄も左様候次第ニ而、更ニ謝罪之道も無之、甚以恐入罷在候儀ニ御座候、只今ニ而ハ程能御濟候儀ニ而候半とハ奉存候得共、実ニ此一事ハ私之

失策ニ而、今更何様申上候而も無詮次第ニ罷成、此末如何様候而可然哉と心痛罷在、何分ニも当時公平之御議論とも可被遊御時節ニ当り、ケ様之儀差合候而ハ、別而如何敷儀ニ御座候間、何卒進退如何相心得宜敷候哉と深く恐入罷在事御座候付、宜敷御汲受居被下度、御願申上被下候、

一 四月廿九日飛脚急便後、御左右無之折角相改申事ニ御座候、

御前ニも御越被遊候付、以御見合、月ニ兩度位も御指立相成候様御取計有之度、此段御願申上被下候、

先はかた／＼申上度、毎之通乱毫失敬御有免被下度、時季御暇向も申上度御座候、恐惶敬白、

六月十七日 桂 右衛門

小松帯刀様
閣下拜呈

文書原寸 縦一六・八種 包紙原寸 縦二七・三種
横二〇八・七種 横 三九種

一三〇七 英国公使パークス一行出迎ノ件

一 明廿日調練、四字兵卒・士官磯御茶屋下江上陸、刻限少前雲行丸江御国土官乗船案内として差越、ハッテイラ曳事、

一 太守様三字比

御出之事、

一 毎日三字より夕刻迄、士官上陸場所石燈爐下相定候事、

一 明後廿一日朝五字ニ安内船差越候事、

一 アトミラル初十五六人之由、

六月十九日

文書原寸 縦一六・六種 横五一種

一三〇八 勝安房ノ対長州意見

六月中旬比ニ而も可有御座候哉、勝房州上京ニ付、岩下家御同道、旅宿江見舞いたし候処、同人儀長防之御所置
いまた戦争ハ有之ましく存、上坂いたし候処、最早事破居、いたし様も無之候、江戸出立義ハ、山口へ直々差越

彼是応接成功可致含之処、今更手之付様無之、戦へと有之候ハ、差越直々打挫キ見せ可申、上京之主意は不被申聞候得共、会ニ被相頼たるニても可有候哉、公用掛之野村初説破せられ、忠を尽候ハ、大忠を尽せと申立候、薩・会之中、周旋ハ決而不出来、そのようなるタヒコ持ハいやちやと申立候、乍併、以道論丈ハ可致と申立候と笑咄ニ御座候、この三ヶ年之遊ひニ大ニ学問もいたし、目も開候事多く候、兵庫開港之儀ハ力を尽候存念ニ候、何分、幕ハ 朝廷之御役所、則幕といふ役所と心得候得ハ、訳ハ無之候得共、夫をわか物同様ニ心得、朝幕など唱候故、事皆間違ニ成立候、是等ハ鎌倉已来之弊故、いたし方も無之候得共、是よりハそんなものニ而ハ決而相済ス、いづれ大藩之五六藩も尽力いたし、ともく得失を論判し、宜敷をとるの仕掛ならてハ不相済との儀ニ御座候、○会も大ニ悔悟いたし、房が義論ニ而、薩の心意初而存たると申居候間、とふそ頼ムとの事ニ御座候、外ニ様々咄も御座候得共、国家ニ関係したる事ニ而ハ無御座

候間、成行御申上候、只今ハ下坂ニ付、此度一橋被下候
ハ、軍艦之行ニ而被參候哉、相分不申、軍ニ罷成、軍
艦之指揮を被預候ハ、相応之儀ニ被致候半、尤（後欠）
文書原寸 縦一五・八横 横六三横

一四〇 人吉堀直太郎ヨリ在国ノ奥掛書役衆へ

人吉藩内訂ノ件

私事、去ル四日求摩着之上、御内使者として被差越

太守様

中将様より被仰進候趣有之、（相良頼基）遠江守様江御直申上候様被

仰付罷越候間、拜謁被仰付候様、御取次之者江申入候処、

遠江守様御病氣付、拜謁不出来候間滞在仕、御病快を奉

待候、然処段々内密承得候趣も有之、右通日教長延候、而

は宜敷有之間敷と存し、同十五日登城、家老菊池七郎左

衛門江致面会、米良小源次・米良造酒儀付、思召之詔有

之、昨冬本田弥右衛門・中村新兵衛被差遣、被仰進趣有

之候処、被応其意、先は一旦之御仕合ニ被思召候、必竟

右通被仰進候儀、御隣国兼而御親敷被仰合、殊ニ近年尚
更御懇ニ被仰進、当時勢旁別段御依頼も被成度被仰進候
事故、第一此御方様往々御為之処を深被思召、次ニは右
兩人始終之次第をも御聞届相成、不便ニ被思召、御隣藩
旁御親敷詔を以、思召之程被仰進候次第ニ候、然処当時
天下之形勢益以切迫之模様相成、別而被成御心配候事ニ
而、御互ニ力を被合、皇国之御為御尽力も被遊度被思召
候より、尚又往々此御方様旁之儀をも被成御勘考候処、

何れ至当之御所置を以人心致安堵、御国中一同折居致一
和居候様無之候、而は、当時勢尚更不相濟儀と被思召候、
時宜ニ依り候、而は、蔽刑を以惡をこらし庄し鎮め候事も
可有之候得共、何れ仁徳之道を以人々致安堵候様無之候
而は、一旦蔽威ニ畏服いたし無事相鎮り候、而も、人心ニ
落着出来兼、其所置之平を不得儀は、亦跡更不慮之煩混
雜之出来候ものニ御座候、此御方様昨年御混雜之儀も、
基砲術一条より事起り、右砲術取起候者共ニも、初発其
志ハ第一折角御国之御為ニと存し、一向一凶ニ存込、夫

より事不和様成立、勢ひ相激候而之上之事ニ而可有御座候間、基起より之事情旁を以、篤と御勘弁も不被為在候而は不相成事ニ候、殊更当時勢將ニ乱ニ成そふな砌柄ニ候間、時勢旁彼是之次第を以、小源次・造酒儀、寛大之思召を以、早々御幽囚御解被成候而、御仁徳ニ致感激、一同折居相付致一和候様御取計被成候ハ、往々之御為め可宜、左候ハ、

修理大夫様

大隅守様ニも適其事を御承知被成、被仰進候詮も一廉相立、御双方宜敷可有御座、幾重ニもなから基起之次第、不和相激候而より之事情間、若哉揚屋ニ而病死ニ而もいたし、自然物議相生し、夫か事之類とも相成候様之儀共致到来候而は、当時勢尚更不宜御事ニ候、尤右両人国元江御出御依頼被成候ニ付、右両人計江御ひいき被成候而之訳ニは全無之、前条通御仁徳之御取扱ニ而、一同折居致一和候様との御趣意御座候間、右一列之子孫等をも程能難有様ニ御取扱も御座候ハ、釣合宜敷、折居も可相付

哉と奉存候、右旁之趣、篤と申上候様被仰付越候、乍併此御方様ニ而御差障有之、折居も付兼候儀を、押而被仰進候儀ニ而は勿論無之候間、若哉御故障之儀も被為在候ハ、拜承仕度

御両殿様御趣意之儀、委敷被仰付候間、成行ニ応し、篤と御熟談も可申上旨申述置候処、委細遠江守様江可申上との儀ニ而、其後同人より無御抛差障も被為在候由ニ而、其訳は不申聞御断之趣承候付、前条之趣意を以、種々致説得、当時勢利害得失等を以も申論候得共、汲受候体無之候付、左様ならハ致方無之候、若哉此御方様ニ而御幽囚御解難被成御故障被為在候節は、右両人儀は貫切帰候様被仰付越候間、国元之方ニ御貫切被成度、夫と申も、内実之儀打明不申上候而は、事情も通兼候付、是ハ其御方様迄御内々御咄申上候、国元之方ニ而も、内実ハ諸士共より色々申立候、刑罰之儀は誠ニ国之重事ニ而、其罪明白相分候上ならてハ、不可行罪儀は申迄も無之候処、基礎術一条より不和成立、夫より事起候を、一方之讓口

御聞込、一応之御糺明も無之、適被相捕、剩其者より御糺明願出候而も御糺明無之、其假御殺、就而は不審之次第、殊更夜中不意ニ御打殺、甚以暴成被成方ニ付、春秋之法を以

天朝 幕府江御届相成、此方より人数被差越、御糺明も可有之、或ハ右兩人此方江致依頼參候付而は、其れ丈之道を御尽可被下は当然之儀ニ而、本田・中村被遣、被仰遣趣有之候処、被応其意、寛大之御所置を以死を被有、揚屋入被仰付、揚屋と申候而も、座田同然ニ而宿元より何も差統、不自由無之杯、寛之方ニ申、且は日数を経候而宿許江被差返、在宿被仰付、夫より世間徘徊、又は年月を経候而城内徘徊等、追々御慶事・御年回等之廉を以御赦被仰付、家格相当之勤方をも可被仰付杯と御返答も被為在候而、日数只今ニ相成、御年回も兩度程有之候而も御赦無之、揚屋と申候而も、内実ハ極罪之者被召入候、至極手狭之牢屋ニ而、密ニ御幽殺可被成巧之由、又は松本了一郎・中村友輔等、第一頭取之者之由候処、持高等

御取揚、其外一体之次第、右兩人儀は一列よりも却而格段重ク御取扱有之、彼是之次第甚以薩摩を御輕蔑被成候仕方杯と、様々と申立候者も有之、実ハ重役共ニも致心配候儀候間、若哉只今病死共候節は、此御方様之儀は先拟置、国許ニおひても物議相生候儀は案中之勢ヒニ而、往々煩敷、御互ニ不宜次第、其上別段思召之訳も被為在候間、右兩人儀は是非御實切被成度、左候ハ、夫限ニ而相濟可申欵とも被存、御双方御互ニ無差障可宜哉と奉存候、左候而、是ハ御質問申上候様と之儀ニ而は全無之、唯私之考ニ而御尋申上候、御年回も兩度、御正統様之御法会も被為在候由、如何候哉、松本一列より小源次等御手重き御取扱之儀は如何候哉、其外国元諸士共申候儀は、皆全慮説ニ而候哉、且又江戸之屋敷江御出相成候山北貫之介・加賀慎三郎一列之儀は、何之子細も無之との趣、江戸御詰役より御墨付も被遣、是非御引渡申上候様と之儀ニ付、御渡申上候処、山北氏・加賀氏被差下、早速慎被仰付候由、是ハ如何之事ニ御座候哉と尋掛候処、一々返答も出

来兼、御国許諸士共色々申立候一条申出候より、些恐怖
当惑之向ニ而其尾迄不申終内、何分遠江守様江申上、亦
思召も可有之との儀ニ而、度々其座を相立ぬといたし候
を申掛不相濟候付、漸々其座ニ居たまり聞取、委細承知
仕、何分篤と可申上との儀ニ而、早々引取、其後菊池良
太郎・片岡市次御使者ニ而參、右兩人当秋大宝之御祭付
御赦被仰付帰宿ニ而、蟄居被仰付筋御内決相成候、諸士
等江も申論相成候処、皆致納得折居も相付候、夫より等
を越へ御赦等被仰付候儀は無御坳御差支も被為在、何分
御取計難被成、尤一列之儀は皆死罪相成、其儀は御英断
と

修理大夫様よりも御称美被仰進候儀ニ而、今更兩人計別
段難有被仰付候而も、一同折居も付兼、却而不宜候間、
右之趣は何卒勘弁致具

御両殿様江も宜申上具候様と之儀ニ而、其上十分之処迄
ハ迎も相解候丈無之候付、右兩人も先出牢さへ相成候ハ
、宜敷訳故、夫形承何比御赦相成候哉と相尋候処、当九

月大宝之御祭有之候得共、成丈早御取調、御赦被仰付御
模様之旨承候付、精々早目之方ニ致相談候処、何分可申
上旨申答引取、一昨廿三日又候良太郎御使者ニ而參
御両殿様江之御返答之趣、

此御方様御為ニと深被思召態々遠方迄御使者被差越、段
々御厚被仰進候趣、誠忝被思召候、依之米良小源次・米
良造酒儀、今日御赦ニ而帰宿蟄居被仰付候と之事ニ而御
座候、

右之通御座候、此段御届旁申上候、尚委細之儀は罷
帰候上可申上候、私儀被仰付置候通、今日爰元出立、
中津之様差越候間、爰許之首尾、各方迄申越候条
御頭様江宜申上可給候、以上、

但御届書可差上、下書認候処、客来間、取急候付
其候ニ而各方迄差越候間、何分宜御取計可給候、

寅六月廿五日

堀 直太郎
人吉より

御国許
奥掛書役衆